花まつりのてんぐ

——愛知県の昔話と伝説——

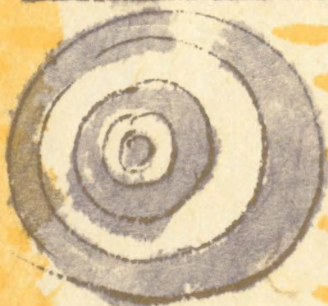
日本児童文学者協会／編

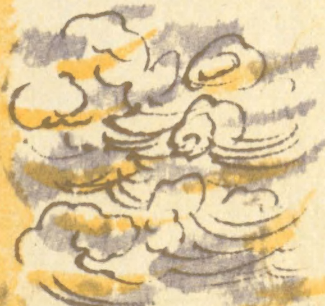


東国と西国のさかいめにあった愛知県には、東海道をいきかう旅人たちが、東の国、西の国のさまざまな話をつたえていきました。そして、それらが地元の伝説や世間話とまざりあって、ゆたかにふくらんだ愛知の民話をつくりあげています。

ふるさとの光と風、祖先の知恵と希望がこめられた『愛知県の民話』を、どうか、たのしくあじわってください。








ふるさとの民話1　愛知県

花まつりのてんぐ

日本児童文学者協会編

偕成社

●刊行のことば

いつの時代にも子どもたちは民話が大すきです。本ぎらいな子も，民話の本ならば喜んで読むという話も聞きます。考えてみれば，それも当然のことかもしれません。

民話には、長い時間にみがきぬかれた簡潔平明な語りのおもしろさと，ふるさとの風と光，遠い祖先の知恵，夢と希望，喜びと悲しみ，笑いと涙が，さまざまにこめられているはずですから。それを読むものが，どんなに幼くても，同じ風土にそだったのならば，おのずからなる親しみをそこに見いだすのでしょう。

わたしたち児童文学にたずさわるものは，日本の子どもたちに，この祖先の貴重な遺産を正しい形でつたえることを，なによりもたいせつなことだと考え，ここに日本児童文学者協会創立30周年記念出版として，県別『ふるさとの民話』（全47巻）を発行することにいたしました。

各県の代表的な民話のほか，これまで紹介されなかった民話，活字化されなかった民話をできるかぎりほりおこし，さらに明治以降の新しい民話もくわえて,従来にない，地方色豊かな民話シリーズをつくるべく努力したのです。

むろん，このような大事業は，わずかな人数だけでできるものではありません。地方在住の会員の協力と，各地の民話研究家，民俗学者の一方ならぬご援助をあおぎました。心よりお礼もうしあげます。

日本児童文学者協会

『ふるさとの民話』編集委員会



「ヤマトタケルとミヤズ姫」より（本文39ページ）



花まつりのてんぐ――もくじ

旅人のものがたり



金のシャチのお城の話

山につたわる話

海につたわる話



川につたわる話

村や町に つたわる話







■装　丁――――――司　　修
■さし絵――――――斎藤博之
■絵地図――――――坂川知秋

愛知県の昔話と伝説

花まつりのてんぐ

日本児童文学者協会編



旅人のものがたり



じょうるり姫

〈伝説・岡崎市〉

いまからおよそ八百年ぐらいまえ、さむらいやとうぞくたちが、力があれば、いくさをしかけてよその国をとろうとうかがっていた、ぶっそうなころの話。

でも、みやこからとおくはなれた矢作の村では、まだまだ、おだやかなくらしが、まい日つづいとった。

春になれば、街道のサクラが、いっせいにさく。

その道すじに、たいそうりっぱなかまえのやしきがあった。それは兼高長者のやしきで、三だん

五だんとくみあわせた石がきの上には、白い倉が、いくつもならび、やねのいらかは、一里（四キロメートル）もさきから、きらきらかがやいて見えたそうな。
その長者やしきには、じょうるりという名まえの、うつくしいむすめがおった。
なんでも長者が、鳳来寺の薬師如来におまいりしてさずかったということで、そのかわいがりようときたら、そりゃあ、かくべつなもんじゃった。あけてもくれても、
「じょうるり……じょうるり……。」
と、よんで、そばからはなそうとせん。
こうして、なにひとつ不自由なく、そだてられたじょうるりは、年ごろになるにつれて、かがやくばかりにうつくしいむすめになった。村人からも、花のようにきれいなかたじゃと、うわさされ、
「姫さま、じょうるり姫さま。」とよばれとった。
そんなある日、若いりっぱな武士とけらいの一行が、矢作の村にやってきた。
その若い武士は源九郎義経で、平家にほろぼされた源氏の家をおこすために、鞍馬山の寺からでてきて、ひそかに奥州（いまの東北地方）にくだる旅のとちゅうじゃった。
人目につかぬように、山のぬけ道をとおったり、ときには野宿というような旅が十日、二十日とつづいたので、さすがの義経も、身も心も、すっかりつかれきっておった。

そこで、おともの金売り吉次は、こののどかな村につくと、さっそく兼高長者のやしきへいって、一行をやすませてもらえまいかとたのんだ。すると長者は、

「このようなひなびたところで、なんのおもてなしもできませぬが、なん日でも、おとまりくだされ。」

と、こころよく、ひきうけてくれた。

義経たちは、長者のことばにあまえて、しばらく、ここですごすことになった。

長者やしきは、いっぺんに、にぎやかになった。これまで、やしきのなかでだいじにそだてられ、だれとも話をしたこともなかったじょうるりだったが、このめずらしい客をむかえてからは、ときどき小鳥のような、はれやかなわらい声をたてるようになった。

義経も、そのじょうるりのやさしさに、ひかれないはずはなかった。そうして、たのしいまい日をすごした。

でも、そういうおだやかな日びは、いつまでもはつづかなんだ。

義経のゆくてには、ほろびた源氏をふたたびおこすという、大きなやくめがあったからじゃ。

そこで、いよいよ旅だつ日、義経は、じょうるりにむかって、

「わたしは、これから奥州へいかねばならん。これは、母のかたみの、うすずみという名の笛じゃ。この笛を、そなたにあずけておこう。いずれまたあうときがくるまでな。」



と、一本の笛をさしだした。じょうるりは、なにもいえずに、笛を両手でうけとると、いつまでも、むねにだきしめておった。

それからのち、じょうるりにとって、かなしい日がつづいた。

「奥州は、地のはてのとおい空の下じゃ。」

と、長者はいって、じょうるりの思いをあきらめさせようとした。だが、じょうるりの心は、ますます、とおい奥州にむかっていく。

ある秋の夜のこと。じょうるりは、うすずみの笛をだいて、ひとりで、やしきをぬけだした。

「奥州、奥州へ……。」

と、つぶやきながら、足は、おのずと北のほうへむかっていく。

月のあかるい夜じゃったが、じょうるりにとっ

ては、あるきなれない街道(かいどう)。石につまずき、いばらにそでをひっかけてはたおれ、また、おきあがる。そして、ただむちゅうになって、あるきつづけた。

あえぎあえぎ、どれくらいながい道(みち)をあるいたか。ふと、足をとめると、目のまえに、男川(おとがわ)のながれが、白いおびのようにかがやいておった。

川の上は、しずかで、さざ波(なみ)ひとつない。ほんとうに、あるいてわたることができるように見えた。じょうるりは、ゆっくりと、ながれの中に足をふみいれた。

ながれは、だんだん、こしをひたし、むねをひたした。が、じょうるりは足をとめなんだ。

やがて、じょうるりのすがたは、そのまま男川(おとがわ)の水の中に、きえてしもうた。

この、じょうるりが川にはいっていったところを、それからのち、じょうるり淵(ぶち)とよぶようになった。岡崎市明大寺町成就院(おかざきしみょうだいじまちせいしゅういん)のうらのあたりで、いまは、アシのしげる砂(すな)の洲(す)になっている。

また、ちかくの誓願寺(せいがんじ)には、義経(よしつね)と姫(ひめ)の、ふたつの墓(はか)が、なかよくならんでのこっている。

〈再話(さいわ)・北村(きたむら)けんじ〉

初(しょ)連(れん)ギツネ
〈伝説(でんせつ)・刈谷市(かりやし)〉



むかしむかし、刈谷(かりや)の恩田(おんだ)というところの、ある寺(てら)の境内(けいだい)に、一ぴきの白ギツネがすんでおった。

そのキツネには、だれがつけたのか、初連(しょれん)という名まえがついておって、住職(じゅうしょく)も村の人たちも、たいへんかわいがっておった。

それなのに、その初連(しょれん)は、とてもいたずらギツネだった。住職(じゅうしょく)の幽石(ゆうこく)おしょうにばけて村をあるいたり、医者(いしゃ)へ目ぐすりをもらいにいったり、そんないたずらのうちはよかったが、そのうちに、こまったことをしでかした。

奥州(おうしゅう)のある大名(だいみょう)のお姫(ひめ)さまが刈谷藩(かりやはん)へよめいりしてくるいうとき、初連(しょれん)は、そのお姫(ひめ)さまにばけて、にせの行列(ぎょうれつ)をしたてたんやと。

祝言(しゅうげん)がすんでから、いよいよ、お姫(ひめ)さまがふろにはいられるというとき、いあわせたものどもが、どうもおかしいといいだした。人がはいっているのとは、ちがう音がするというのや。

あんまりへんな音がするもんで、こっそり、家老がふろ場をのぞいてみると、なんということや。年とった一ぴきの白ギツネが、大きなしっぽで、ザワザワッ、ショワショワショワと、ふろおけの中の水をかきまわしておるとこやった。

家老は、その白ギツネのすがたを見るなり、かあっとなって、大刀をひきぬき、さあっときりつけたが、大刀は空をきっただけ。

もうそのときには、その白ギツネ、つまり初連は、恩田のあなへもどって、ゆうゆうとねむっておったそうや。

ほんとのお姫さまのことを、すっかりなおざりにしてしまったことが、いつのまにか幕府にきこえ、刈谷の殿さま、三浦侯の領土は半分にへらされ、しかも、よそへ国がえということになってしまった。

住職の幽石おしょうは、たいへんおこった。幽石おしょうにしかられては、もう初連も恩田におることができず、箱根の山へにげていった。だまってにげればいいものを、そこが初連のことや。

恩田ばかりに　日はてりゃしめえ
箱根　日もてる　雨もふる

そんなにくまれ口をたたいていったもんで、幽石おしょうは、いっそうおこったそうな。
ところがさ、初連はいたずらずきでも、根っからわるいキツネではなかった。箱根をこえる人たちをばかしてたのしんでおるうちに、三浦侯にわるいことしたという気がしはじめ、三浦侯の行列がとおるときには、金銀にそめわけたつなを道すじにはって、行列のぶじをいのったそうや。
ところで、初連が三浦侯にたいして、なんであんなことをして、えらいめにあわせたかという、そ

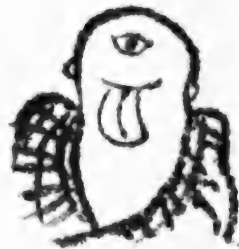


のわけについてはな、土地の人たちゃ、こんなふうにいうとるそうな。
あるとき、幽石おしょうは、だいじにしとった文福茶がまを、三浦侯に献上した。そこで、三浦侯が、たびたび恩田をたずねられるようになったが、そのたびにけらいたちが、初連のすむキツネあなをのぞいては、子ギツネにいたずらしたんやそうな。それで初連は、なにかあったら、三浦侯にそのうらみをはらしたいとおもうとったんやろうと。それにしては、ちとひどすぎるいたずらじゃったというわけや。

やがて明治維新になってから、初連は、恩田のキツネあなへもどってきたともつたえられとる。そのころは、だいぶ年もとっておったので、やはり、そこを死に場所にえらんだのかもしれん。

〈再話・赤座憲久〉

ばかされたタヌキ〈伝説・津島市〉



津島のタヌキ話いうたらゆうめいなもんで、ずいぶんいろんな、おもしろい話がのこっとる。
ある晩のこと。ふたりの男が、タヌキがすんどるちゅう、うわさのある本蓮寺のよこをとおりかかった。
「タヌキって、人をばかすそうやが、どうやって、ばかすもんやろうなあ。」
と、はなしあいながらあるいておると、ふいに、
「こんなふうにじゃ。見ろっ。」
という声がして、見あげるばかりの大ぼうずが、にゅーっとあらわれた。
それで、ふたりとも、きもをつぶして、にげかえったということや。
また、夜中に、本蓮寺のあたりをあるくと、コチコチ、コチコチ、こまげたをならすような音が、うしろからついてくる。こちらが足をとめると、その音もすぐに、ぴたりとやむ。あるきだすと、ま

たコチコチ、コチコチとついてくる。それもタヌキのいたずらやった。

また、人びとが、みんなねしずまったころ、家のおもて戸をザアザアなでてあるくのも、タヌキのいたずらなんや。

「どなたじゃ、なんぞ用かな。」

と、声をかけると、

「おれじゃ、おれじゃ。」

と、おもてのほうで、わらい声がするが、戸をあけてみると、だれもおらんというわけじゃ。なんとも、はらのたつことじゃのう。

しかし、人間のほうも、そう、ばかされっぱなしになったりはせん。けっこう、ばかしかえしてやったりもする。たとえば、こんなふうにじゃな。

津島の麩屋町というところに、服部喜右衛門という人がおった。喜右衛門の商売は、小間物の行商で、かみそりや、はさみなどを、大きなふろしきにつつんで、せなかにしょい、ちかくの村むらから、とおくは江州（いまの滋賀県）のほうにまで売りあるいておったそうじゃ。

ある日、喜右衛門がいつものように、行商にいった村の家の庭さきで、品物をひろげておると、

あつまってきた村の人たちの中に、
「なんじゃ、こんななまくらなはさみ、これじゃ、とうふのかどもきれん。それに、このかみそり、いつもくるほかの商人のものより、うーんとたかいじゃないか。」
などと、いちいち、なんくせをつける人がおった。
喜右衛門は、
(えい、いやなお客やなあ。)
と、むねの中でおもったが、はらをたててしまっては商売にならん。そこで、ぐっとこらえておったが、その客は、ますますいい気になって商売のじゃまをする。
(どうも、おかしいぞ。このあたりで見かけん顔やし、こりゃ、もしかしたらタヌキがばけとるんかもしれん。)
そうおもった喜右衛門は、わざとにこにこしながら、いうてやった。
「お客さん、わしはこんな行商をしとりますが、ちょっとばかり医術のこころえがありましてな。ところで、あんたはどこぞ、からだに、わるいところがあるように見えるんじゃが……。」
「いや、おらは、どっこもわるいとこなんかねえよ。」
「ふうん、そうかな、わしの見たところ、おまえさんには口にちゅうぶ(中風)の気があるように見え



る。いやいや、しんぱいすることはない。いいことをおしえてあげるから。口のちゅうぶには、おきゅうがいちばんじゃ。くちびるにおきゅうをすえなされ。ちゅうぶがおきずにすみますで。」

喜右衛門のことばに、その人は、じぶんのくちびるをつまみつまみ、かえっていったそうや。

つぎの日、喜右衛門がまた、その村にやってきて、商売をしておると、「ふが、ふが。」といいながら、やってきた人がおる。見ると、きのう喜右衛門の品物になんくせをつけた人やった。

その人は、くちびるがひどくはれあがり、まえから見ると、はなのあなさえ見えんほどやった。

喜右衛門は、おもわず、「ぶっ。」とふきだしそうになった。が、わらいをこらえて、いうたげな。

「おやおや、わしのいうたとおり、くちびるにお

きゅうをすえなさったか。まあ、しばらくは口もきけんじゃろうが、それでちゅうぶがおきんのじゃから、しんぼう、しんぼう。」

それからなん日かたって、喜右衛門が、ある村にいったときのこと。昼になったんで、茶屋でいっぷくしとると、ひとりの武士が、茶屋のおやじに、なんやら、むりなんだいをいいはじめた。見ると、その武士は、口をやけどしとる。

（さては、あんときのタヌキじゃな。）

喜右衛門は、すぐ気がついたが知らんふりをしとった。武士は、しばらく、ふがふが、なにかいうとったが、やけどがいとうて、ばけとおせなんだのじゃろうな。とつぜん、タヌキのすがたにもどると、ぱっと、ちゅうをとぶようにはしっていってしもうたそうな。

津島のタヌキ話いうたら、このほかにも、たくさんあった。

でも、明治のおわりごろから、このあたりにも、だんだん工場ができるようになっての、タヌキをばかす話も、ばかされる話も、めったにきかれんようになってしもうた。

なんやら、さびしいことやなあ。

〈再話・熊沢あきら〉

まぼろしの金魚花火〈伝説・岡崎市〉

明治のはじめごろ、岡崎の祐金町の長屋に、〈研せん〉という、めっぽうかわりもんの男がおったそうな。なんでも、東京と名まえのかわった江戸の町からやってきた、刀のとぎ師だというんだが、いくらきんじょの人たちが、

「出刃、といでくりょや。」

「ほうちょう、たのむに。」

というて、やってきても、

「わしは、刀はとぐが、出刃やほうちょうは、とげねえ。」

と、まったくぶあいそうに、おいかえしてしまう。

また、道で長屋のものにいきあっても、あいさつはおろか、口もきかん。これじゃあ、きんじょの人たちが、よくいうはずはないわな。



だから、半年たち、一年もすぎるころには、もうだれひとり、研せんとつきあうものはおらんようなってしもうた。

二年くらいたったころ、長屋じゅうに、みょうなうわさがたちだした。

「おい、研せんのうち、夜になると、かって口に青い火が見えるぞ。」

「いやあ、青い火じゃねえ。赤い火だ。」

「それによ、ときどきは、くせえ火薬のにおいがしてよ。」

「なんにしても、きみょうな男だ。」

うわさは、つぎつぎにひろまっていった。昼まは、まるっきりゴソッとも音のしない研せんのうちだが、夜になると、ガサゴソ、カタコト音がする。それに、ちろちろ、ぱっぱと青い火や赤い火だ。みんながあやしむのも、むりはないわな。

そんなある晩、一けんおいたとなりの大工の吉蔵さんが、夜中にべんじょにおきた。しょうべんをしとると、ふと、研せんのうちのかってまどから、ぼうっ、ぼうっと、赤い火や青い火が見える。

「あっ、火だ。」

吉蔵さんは、びっくりしたとたんに、しょうべんがとまっちまった。でも、きもっ玉はふとい職人のこんだ。

（よし、なにょやらかいとるか、しらべてやらずに――。）

と、いそいで、どてらを頭からひっかぶると、そとへとびだした。

ちょうど、研せんのかって口にちかづいたとき、ガタ、ガタッと音がして、中から、ぬのこずきんをかぶった研せんが、こわきに大きなつつみをかかえてでてきおった。吉蔵さんはあわてて、へいかげにかくれた。研せんは気がつかんらしい。すたすた長屋のろじをぬけると、町をつっきり、菅生川の川原へおりていった。

（へんなとこへいきよるわ。）

吉蔵さんは、そうおもいながら、じっと、ヨシのかげにかくれて、研せんを見つめとった。

空の星はちらほらあっても、月のない、くらい川原だ。はなれている研せんの黒いせなかだけが、まるで、かっぱか、カワウソのように見えた。

とつぜん、ぴかっと、研せんの手もとで光がちった。とおもうと、しゅっ、しゅっしゅと川の中を赤い火がはしった。つづいて、ぱっ、ぱっぱーっと、水面に花火がひろがっていく。

「うわあっ！」

吉蔵さんは、おもわずとびあがった。

「金魚花火だあ！」



青い火、赤い火、むらさき、黄色、金色の火ばしらが、ならんで水面をはしる。それはまるで、うつくしい、生きた金魚のむれがおよぎまわっとるようやった。

ヨシのかげからとびだした吉蔵さんは、べたあっと川原にしりもちをついたまま、うごけなくなった。

「なんとみごとな金魚花火じゃ。」

金魚花火というのは、岡崎名物の花火のひとつで、水中をはしるのろしだ。一本のつつか、または十字にくんだほそながいつつに火薬をつめて火をつけると、花火はするする水面をおよぐようにはしっていき、およぎきったさいごには、ぱあっと空中にとびちる。

そんな金魚花火なら見なれとる吉蔵さんだが、

いま見た花火は、ふつうの金魚花火とはくらべものにならんほど、みごとなもんやった。
「こんな金魚花火を見たのは、はじめてじゃ。」
吉蔵さんは、なんどもなんども、じぶんの目をこすった。
「岡崎じゅうの花火師が、ゆめにまで見た、まぼろしの花火じゃわい。」
ゆうめいな花火どころの岡崎では、うでじまんの花火師も、かぞえきれんほど、ぎょうさんおる。
夏の天王まつりの夜は、町じゅうがふたつにわかれ、菅生川にほこ船をうかべて、花火のうでをきそいおうたもんや。なかでも祐金町は、菅生町、板屋町とならんで、花火のことになると、町をあげて、むちゅうになる。
それで、吉蔵さんも花火のことについては、くわしかった。だから、いま見た金魚花火が、ただの金魚花火でないことを、すぐに見やぶったんだ。
目のまえにつっ立っている研せんが、吉蔵さんの目には、まるで、話にきいた天じく（インド）か、南ばん（ヨーロッパ）のまほうつかいのように見えたという。
その夏の天王まつりの夜、菅生川の川原をうずめた人たちは、はじめて見るすばらしい金魚花火に、ただただどぎもをぬかれて、声をあげることもできなんだ。

研せんの手もとからはしる火の金魚は、菅生川のおもてを、にしきの火でそめ、火の波を立てておよぎ、きらめく光とともに、一ぴき、また一ぴき、くらい空のかなたにすいこまれて、きえていった。

この世のものとはおもえんような、そのまぼろしの金魚に、町の人たちは、ただ、うっとり見とれとった。

やがて、よいからさめた人たちは、光のきえた川原に研せんをさがした。

だが、どうしたことか、それきり研せんのすがたは見えなんだ。どこへいってしもうたんか、なぜきえたのかもわからん。長屋にも、二どと、かえってこなんだ。

それで、町の人たちは、

「研せんは、あの金魚花火にのって天にきえちまったずら。」

と、うわさしあった。

いまでも町の人たちは、研せんのことを〈まぼろしの花火師〉とよび、その金魚花火のすばらしかったことを、ながくかたりつづけている。

〈再話・寺沢正美〉

せとものまつりの雨〈伝説・瀬戸市〉

名古屋市の北東、矢田川をずっとさかのぼったあたり、猿投山のふもとには、えんとつが林のように立ちならび、そこから、まい日まい日、けむりが立ちのぼっておる。ここが、やきものでゆうめいな瀬戸の町だ。

瀬戸のおくには、多治見、土岐、瑞浪と、よい土のでるところが多くて、このあたりはむかしから、やきものがさかんなところやった。

江戸時代の中ごろ、この瀬戸のやきもの師の中でも、うできき のひとりに、民吉という人がおった。

民吉は、やきものによい土があるときけば、どんなにとおくても、でかけていった。そして、こしのにぎりめしをたべるのもわすれて、なん日もなん日も、さがしあるいた。おかみさんでさえ、

「ようまあ、くさったにぎりめし、こしにぶらさげて、ほっつきあるいていりゃあたわ。」

と、いつも、あきれるほどやったそうな。そんな民吉の耳に、あるとき、



「九州の天草に、めずらしいやきものがあるげな。」

という、うわさ話がつたわってきた。なんでも、瀬戸のやきものよりずっとかたくて、水気をふくまず、きめのこまかな、つやつやしたはだのやきあがりだという。

さあ、民吉はもう、じっとしておられん。

「なにも、そんなとおくまでいかんでも……。」

というて、とめるおかみさんの手をふりきるようにして、九州の天草めざして、旅にでた。

とちゅうでくろうをしながらも、なんとか天草へたどりついた民吉は、町じゅうをたずねあるき、とうとう、うわさにきいた、やきものをつくっている家をさがしあてた。そして、いきなりはいっていって、

「わたしは、尾張の瀬戸というところから、あなたのやきもののことをきいて、やってきたものです。どうか、やきかたをおしえてください。」

とたのんだ。ところが、家のあるじは、むずかしい顔をして、

「このやきもののつくりかたは、秘伝じゃ。まして、他国の人におしえることは、お上からも、きびしくいましめられとるでな。」

と、ききいれてくれなんだ。

民吉は、がっかりした。でも、なんとしてでも、このやきもののつくりかたをならいたい。おぼえるまでは、瀬戸にかえりとうなかった。

あくる日も、そのまたあくる日も、民吉は、その家へかよって、たのみこんだ。

その民吉のねっしんさに心をうたれたのだろうか。ある日、あるじが声をひそめていうた。

「おまえさんのねっしんさには、頭がさがる。だが、他国者のおまえさんに秘伝をおしえることは、どうしてもできん。しかし、ひとつだけ手だてがある。どうじゃ、うちのむすめといっしょにならんかね。そうすれば、おまえさんは、うちのむこ。秘伝をおしえることも、ゆるされるというもんじゃ。」

いわれて民吉は、一も二もなく、しょうちしてしもうた。瀬戸にのこしてきた妻や子のことをおもわんでもなかったが、ただもう、やきものをならいたいいっしんやった。

こうして、その家のむことなった民吉は、ひっしに修業をつづけ、三年もたたんうちに、あるじから、

「もう、おまえにおしえることはなくなったわい。」

といわれるまでになった。のぞみどおり、たたくとチンチンというたかい音をだす、りっぱなやきものがやけるようになったんじゃ。

そんなある日、民吉はふと、瀬戸にのこしてきた子どものゆめを見た。子どもの目は、なんだか、



とてもさびしそうやった。

はっと目ざめた民吉は、おもわず、むねのまえで手をあわせた。

「ああ、なんというこった。わしは、国の妻や子どものことをわすれとった。」

おもいだすと、こいしくて、矢もたてもたまらなんだ。しかし、いまかえりたいというても、なんにもわけを知らん天草の妻や父が、ゆるしてくれるはずがない。

民吉はおもいなやんだが、ついにがまんできなくなって、おき手紙をのこすと、月のない夜ふけに、こっそりと天草をでてしもうたげな。

ひょっこりかえってきた民吉を見て、瀬戸のおかみさんは、びっくりするやら、よろこぶやら。なにしろ、九州へいくというてから、まる三年、

たよりひとつよこさず、もう、てっきり死んだもんとおもうとったところやったからのう。

それからというもの、民吉はせっせと、天草でおぼえてきたやきものをつくりはじめた。これまでの瀬戸のやきものとは、くらべものにならないほど手ざわりのよい、白くひかる、磁器というやきものやった。

「これはよい。これからのやきものは、これや。」

と、民吉のかまは、たちまちひょうばんになった。民吉は、そのやきかたを人びとにおしえ、お役人までが手だすけをしてくれたので、たちまちのうちに、瀬戸じゅうのかまで、この磁器がやかれるようになった。

そのほうびに、民吉は殿さまから、たいそうな家やしきをもらい、親子して、しあわせにくらしておったげな。

そんなある日、民吉の家に、ひとりの女がたずねてきた。ながい旅をしてきたようすで、すっかりやつれてはおったが、

「わたしは天草からきました。ここは、民吉さんの家ですか。」

という声は、はずんでおった。女の人は、とつぜんいなくなった民吉をしたって、はるばる瀬戸までやってきた天草の妻だったんや。

民吉のおかみさんが、おくからでてきて、あいさつした。

「はい、わたしが民吉の妻ですが、あなたさまは？　主人が天草におったときのお知りあいでございますやろか。」

「えっ、民吉さんのおくさん……。」

天草の女は、びっくりして、ききかえした。三年たらずとはいえ、夫としてつかえ、やきものの秘伝までつたえた人に、妻があったとは。

天草の妻は、民吉がうらめしかった。にくかった。でも、目のまえのおかみさんと、そのそばにいる民吉そっくりの子どもを見ては、いまさら、じぶんが天草で民吉の妻であったとはいえなんだ。

そのまま、あとをも見ずに民吉の家をとびだすと、かなしみのあまり、池に身をなげて死んでしもうたと。

それからながい年月がすぎて、民吉も、民吉のおくさんも、なくなった。でも、民吉のつたえたやきものは、日本じゅうにひろまって、いまでは〈せともの〉といえば、やきもののことだと、だれでもおもうておるほど、ゆうめいになった。

瀬戸の町では、いつからか窯神神社に民吉をまつり、そのおまつりが、年に一ど、九月にもよおされるようになった。それが、せとものまつりなんや。

いまでもその日は、瀬戸川ぞいに、ずらりとやきものをならべた露店が、のきをつらね、大ぜいの人たちが、一日じゅう、ちかくの町からやってくる。

ところが、どういうわけか、まえの日や、その日の朝までは、どんなに天気がよくても、おまつりがはじまると、まい年きまって雨がふる。すると、土地の人びとは、

「かわいそうに。ことしもまた、天草の女が、なみだをながしよる。」

と、つぶやくそうな。

〈再話・松原喜久子〉

ヤマトタケルとミヤズ姫

〈伝説・名古屋市〉

とおい、はるかなむかし。

大和の国のヤマトタケルは、伊勢の海から船にのって、尾張の国の熱田の浜へわたってきた。

ヤマトタケルは、ちえもふかければ、力もつよい、りっぱな若者だった。ところが、王子のあまりのつよさをおそれた父の大王が、なんとかタケルを、とおくへおいやってしまおうと、エゾせいばつをめいじたのだった。

エゾはまだ道もない、とおい東のはて、山はたかく、谷はけわしく、冬は雪のふかいところだという。そのうえ、大王にしたがわぬ人びとが、あばれまわっている。そんなおそろしいところへたたかいにいくのに、父王は、たったひとりのけらいしか、つけてくれなかった。

さびしい秋の日ぐれどき、熱田の浜についたヤマトタケルの心は、父王のひどいしうちをおもい、



かなしみでいっぱいだった。

ところがここで、タケルはおもいがけず、にぎやかなでむかえをうけた。砂浜にずらりとならんで、にこやかにおじぎをしていたのは、尾張の国の主の白ひげのオトヨと、その妻マシキトベ、そして、そのむすこのタケイナダネたちだった。

「おお、ヤマトタケルノミコト。ミコトが伊勢の海をおわたりになったといううわさをきいて、ずっとこうして、おまちしておりました。さあさあ、まずは、わたしどものやかたで、ひとやすみなされませ。」

と、オトヨは、ヤマトタケルを、じぶんのやかたへあんないした。

やかたは、熱田の森のおくに、どっしりとたてられていた。その入り口には、たいまつがあかあかともえていて、いかにも、ヤマトタケルをまちかねているようだった。

その夜、オトヨのやかたでは、タケルをむかえて、はなやかなうたげがひらかれた。

なにしろ尾張の国は、ひろい平野と、よくしげった森と、おだやかな海をもつ、ゆたかな国だ。タケルのまえには、野の幸、山の幸、海の幸など、さまざまのごちそうが、つぎからつぎへとはこばれた。

やがて、ひとりのうつくしい少女が、白いきもののすそをなびかせて、お酒のつぼをささげながら、



ヤマトタケルのまえにすすみよった。
「よくおいでになりました。」
まっすぐにヤマトタケルを見あげてほほえむ、少女の目は、すずしくすんでいる。
タケルは、むねをはずませながら、少女にたずねた。
「うつくしい人だ。名は、なんという。」
「はい。オトヨのむすめで、ミヤズともうします。」
きびきびしたそのこたえが、またタケルの気にいった。
「タケルさまのお話は、父や兄から、よくうかがっておりました。」
ミヤズは、ひとみをかがやかせていう。
タケルはミヤズとはなしているうちに、いつの

まにか、心の中のくるしみを、すっかりわすれてしまった。
「ミヤズよ。わたしは、こんなにしあわせな夜は、はじめてだ。」
「では、いつまでも、ごゆっくりなさっていってくださいませ。」
「いや、そうはいかぬ。あすはもう、とおく、ながいたたかいの旅にでかけなければならない。しかし、たたかいがおわったら、きっとミヤズのところへもどってこよう。」
「はい、わたしも、その日まで、きっとまっています。」
こうして、ふたりは、ふたたびあう日をちかいあった。
つぎの朝、ヤマトタケルは、ミヤズの兄のタケイナダネをみかたにくわえて、東の国のたたかいに出発していった。
冬がきて夏がすぎて、なん年かたったのち、ヤマトタケルは、エゾのたたかいにかって、やくそくどおり、ミヤズのところへかえってきた。
それからのふたりには、ことばにもつくせない、しあわせな日がつづいた。
けれども、そのしあわせは、ながくはなかった。
ヤマトタケルは、大王の命令でふたたび、伊吹の山へたたかいにでかけることになったのだ。
わかれの日の朝、ヤマトタケルは、ミヤズにいった。

「ミヤズ。わたしは、かならずおまえのそばにもどってくる。そのあかしに、この剣を、おまえにあずけていこう。」

それは、タケルがエゾせいばつのときにもっていった、たいせつな剣だった。

ミヤズは、剣をしっかりと、むねにだきしめていった。

「タケルノミコトがおかえりになる日まで、この剣を、あなただとおもいましょう。そして、けっして、わたしのそばからはなしますまい。どうぞ、ごぶじでおかえりくださいませ。」

「あんしんしていなさい、ミヤズ。わたしはきっと、かえってくる。」

けれども、ヤマトタケルは、そのままとうとう、かえってはこなかった。

伊吹の山できずをうけたヤマトタケルは、つめたいこおりの雨にうたれて、おもいやまいにかかってしまったのだ。

タケルは、どんなに尾張の国のミヤズのところへ、かえりたいとおもったことか。

タケルは、なんどもミヤズの名をよんだ。そして、ミヤズにあずけた、あのたいせつな剣のことをおもいだした。

しかし、もういまとなっては、いとしいミヤズも、たいせつな剣も、あまりにもとおかった。

見まもってくれる人もなく、ヤマトタケルはただひとり、さびしいあれ野の中にたおれて、いきた

えてしまったのだった。
ヤマトタケルの死の知らせをきいて、尾張の国のミヤズは、気がくるったようになげきかなしんだが、もうどうすることもできなかった。
尾張の国の主オトヨたちは、ヤマトタケルがミヤズにあずけた剣を熱田の森にまつって、タケルのたましいをなぐさめた。
いまでも熱田神宮には、そのヤマトタケルの剣がまつってあるのだと、いいつたえられている。
ところで、名古屋市北部の志段味村というところには、ヤマトタケルとミヤズ姫の、べつの話がつたわっている。
ここでは、ヤマトタケルを伊吹山で死なせてしまうのは、あんまりかわいそうだと、人びとがおもったのか、話のすじも、ちがうものになっている。
伊吹山のわるものをうちにいったタケルが、けわしい山道をのぼっていくと、とつぜん一ぴきの小ヘビがでてきて、足にかみついた。それは毒ヘビだったので、すぐにタケルのからだに、その毒がまわってきた。
タケルは川へはしっていって、きず口をあらったが、たかい熱がでて、目がくらみ、ばったりたお

れてしまった。
　そんなときにも、まぶたの中には、なつかしいミヤズ姫のすがたが、うかんでくる。
「ああ、ミヤズにあいたい、尾張の国へいきたい。」
　うわごとをいっているとき、一わの白鳥が、空からまいおりてきた。タケルは、その鳥にむかって、
「白鳥よ、おねがいだ。わたしを、尾張の国まではこんでいってくれないか。」
と、たのんだ。
　白鳥は、しなやかな首で、ゆっくりとうなずくと、ばさりと大きく、はねをひろげた。
「おお、つれてってくれるか。」
　ヤマトタケルは大よろこびで、きずついたからだを、白鳥にあずけた。
　白鳥はタケルをせなかにのせると、たかくたかくまいあがり、はるばると尾張の国めざして、とびたった。
　風をきり、雲をつきぬけて、白鳥はとびつづけた。
　しかし、尾張の国の志段味の里までくると、さすがに力がつきてしまったのか、しずかにまいおりていき、そのまま、ぐったりと死んでしまった。
「ああ、かわいそうなことをした。白鳥が、わたしのかわりに死んでくれたのだ。」



ヤマトタケルは、やさしい白鳥の死を、心からかなしんだ。そして、こんもりとしげった木立ちの中に、白鳥のなきがらをまつってやった。

それが、いまも志段味村にある白鳥塚だと、村の人びとはかたりつたえている。

熱田の里のミヤズ姫は、ヤマトタケルが志段味の里についたときいて、いそいでかけつけてきた。ミヤズのけんめいなかんびょうのおかげで、タケルはまた、もとのからだになった。それからふたりは、尾張の国で、いつまでもなかよくくらしたという。

〈再話・阿久根治子〉

金のシャチのお城の話



とぼけ村

〈伝説・尾張旭市〉

街道わきのあき地などに、大きな石がでーんとおさまっとるのは、たいてい、なにかいわれがあるものじゃ。名古屋から瀬戸へむかうとちゅうの、いまは尾張旭市という町ん中にも、そんな石がひとつある。

その道は、いまも御成街道と土地の人がいっとるが、むかし、尾張の殿さまが定光寺へおまいりにいくおりに、

「殿さまのおなりーい、殿さまのおなりーい。」

と、けらいたちが、さきぶれしてとおったから、

そんな名まえがついたのじゃげな。

さて、その殿さまが、名古屋城をつくられたときの話。

お城をつくるにゃ、まずはじめに、石がきをつまんならん。

なんちゅうたって、ここん殿さまは、将軍家にいちばんちかい家がらの徳川御三家のかしらだで、天下になりひびくような、大きなお城をつくれっちゅう命令じゃ。大きなお城となりゃ、大きな石が、ようけ（たくさん）いる。それで、ちかくの大名衆へも将軍家から、

「尾張の城への石はこびをするように。」

という、おふれがまわったと。

瀬戸のおくの玉野川にゃ、ちょうどええ石が、たんとあった。

そこで大名衆は、けらいや人夫たちを、ようけつかって、まい日、石はこびをはじめた。

荷車に、ふたかかえも三かかえもある石をつんで、くる日もくる日も、石はこびの行列よ。

「わっせ、わっせ。あとひといきだで。」

そうはいっても、五里（二十キロメートル）もの道のり。

大きな石をつんだ車をおす人もひく人も、玉のあせをながしながし、御成街道を名古屋へむかう。道の両がわの田んぼにゃ、手ぬぐいでほっかむりした土地の百姓衆が、こしをひくくまげ、顔を

ふせて、ひそひそ、はなしあっておった。
「ようとおるなあ。どえりゃあお城ができるげなで。」
「きんのうも、そのまえも、えりゃあこったなあ。ほんでも、顔あげさっせるな。手つだわされてみやあ、とろくさい（ばからしい）で。」
百姓衆は、ちゃんと知っとる。えらい衆は人手のほしいときゃ、どこの人でも、へいきで、こきつかうってことをな。
ひまそうにけんぶつなんぞしとって、石はこびにこきつかわれるんは、まっぴらまっぴら。みんな、そうおもうとった。
さあて、そんなある日。
いつものように、御成街道をすすむ石はこびの行列が、この村をとおりかかった。
まん上からてりつける太陽に、みんないきははずむし、のどはからっから。
ちょっと手をぬいたとたん、大きな石がひとつ、車からずるずるすべりだして、あっというまに夏草のしげみにおっこちてしもうた。
さあ、さしずのさむらい衆は、大よわり。
石はこびの人夫たちは、もうすっかりくたびれてしもうとったで、なんどもちあげても、石は車に



あがらなんだ。
そのうちに、あとの車もおいついてまって、街道にゃ、石車がじゅずつなぎよ。
あとの車にゃせかされるし、あついし、人夫はうごかんしで、さしずのさむらい衆も、とうとうまいってしもうた。
「もうよい。石は、そのままずておけ。」
その石は、そこにのこされたまんま、行列はうごきはじめたと。
けんど、とちゅうで石をすてたとあっては、工事の手ぬきということで、幕府のお役人からのおとがめがこわい。
さむらい衆は、きつい顔で、見ておった百姓衆にいったもんだ。
「お城をつくるお目つけの役人が、この石のわけをたずねてきても、けっしてなにもこたえるでない。もし、おもさにたえかねて、のこしていったなどと、ちっとでももうしてみよ。村じゅうのこらずきりころすぞ。」
そりゃあきびしい、いいつけようじゃ。
村の百姓衆は、上目づかいで目くばせしながら、ふかく頭をさげて、
「ははあっ……。」

とはいうたものの、みんな、こまりきってしもうた。

とんだ板ばさみよ。

お目つけの役人に、石はこびのさむらい衆のいうとおりにうそをついて、もし見つかりゃ、そっちはそっちで、しばり首まちがいなしじゃ。

すると、村のちえ者のひとりが、となりの百姓に、なにやら、こっそり耳うちをした。耳うちは、耳から耳へとつたえられた。

「よしきた。そんじゃあ……。」

「うん、むにゃ、むにゃ……。」

「わかったぞ、ごちょ、ごちょ。」

みんな、にやりとわらって、また、畑しごとにもどっていったと。

さあて、あんのじょう、それからいく日もたたんうちに、お城の目つけ役人がやってきた。

「こんなところに大きな石があるが、これはなぜじゃ。城でつかう石ではなかったか。」

「ああ……。」

「うう……。」

はいつくばって田の草とっとるだれにたずねても、みんな、

「う……、あ……。」

の手ぶりばっかり。

「なんという村じゃ。さても、耳や口の不自由なもんの多い村じゃのう。」

とうとう、お役人は、ぷりぷりおこりながら、あきらめてかえっていったげな。

お役人のうしろすがたが小さくなると、村の衆は、ほっとかたの力をぬいて、どっと、声をたててわらった。

「わしら、えらい衆のやりかたにゃ、なれとるで。耳や口にふたをするなんぞ、いつだってできるでよ。」

それからずっと、この石は〈つんぼ石〉とよばれて、いまでも、そこに根っこがはえたように、でーんとおさまっておる。

おとなが、しゃがんだほどの大きさの〈つんぼ石〉。この石におねがいすりゃ、耳のとおいのがなおるんやそうな。

〈再話・松原喜久子〉

のろりのろりの小田井人足

〈伝説・名古屋市〉

名古屋のあたりは、木曽川をはじめとして、大きな川や小さな川が、あみの目のようにいりくんでながれとる。川の両岸は、どれも大きなていぼうになっとるんで、そのあみの目の中の土地は、まるで、ていぼうの輪にかこまれたようなもんや。

輪の中には、田んぼもあれば畑もある。もちろん、町もあれば村もある。これが、このあたりの名物〈輪中〉や。その輪中の村のひとつに、小田井村というのがある。村からは、庄内川ひとつこせば、その南は、もう名古屋の町や。

さて、この名古屋の町が、徳川御三家のかしら、尾張藩のご城下やったころのこと。

ドドドッ、ザー。きょうもふりしきる、えらい雨。



「えらいこっちゃ、この雨で、庄内川は、はや、あっぷあっぷしてござる。お城下のおさむらいが、ござらなええが。」
小田井の村人の顔は、たちまちくもってくる。
「きょうは、かみのほうも、たんとふっとるらしいで、あぶにゃあなも。」
そういいながらも、年より衆は、なれた手つきで、食糧や道具を、ちょっとでもたかいところへ、どんどんはこんでいく。
そこへ、あんのじょう、お城下のおさむらいの、雨の中にもひびく馬のひづめの音。
「くそっ！　やっぱりござったか。」
村人たちは、ためいきまじりのうらめしそうなまなざしで、馬にのったおさむらいを見あげるのやった。
「はやく村の男どもをあつめろ。」
庄屋さんのおふれで、しかたなく村の男衆は、かたをおとして、のろりのろりとあつまりよった。
みのかさをつけ、きもののすそをこしにからげて、雨の中を、げんきのない足どりや。
おさむらいの命令は、きかんでもわかっとる。
「名古屋のご城下をたすけるのだ。いつものように、ていぼうをきりおとせ。」

名古屋の町へ水がいかないようにするために、庄内川の北がわのつつみをきって、小田井の村へ水をながせいうんや。
「ああ、ことしもまた、わしらの小田井は、村じゅう水びたしや。」
百姓たちはうつむいて、ひくい声でぶつぶついう。
ていぼうでやっとまもられている輪中の田んぼは、ていぼうをきりおとしたら、ぜんめつや。たちまち目のまえで、水におしながされてしまう。
百姓たちは、手しおにかけてそだててきた田んぼのイネが、あわれでならん。
「しょうがにゃあぜ、おさむらいにゃかてんで。」
年かさのじっさが、口をへの字にまげて、そういいながら、わざとのろりのろりと、ていぼうこわしにとりかかる。
若い衆たちも、
「ええっ、わしらの手で、わしらの村を水びたしにするんかい。」
と、いったんはまゆをつりあげておこってはみるものの、しょせん、さむらいにはかてん。
「ふん、お城下のほうだけがたすかればええのか。」
と、小声でつぶやくだけや。



ぐずぐずするのが、せいいっぱいのさむらいへの反抗やった。

「はようやれ、おくれるな、お城下に水をあふれさすな。北をきれ、北へながせ。」

いそがしいのは、つつみ役人の声ばかり。

「へん、じぶんたちの村を水びたしにするのに、なんでそう、てきぱきはたらけるもんきゃあの。」

いくらどなられても、とてもみんなは、ほんきではたらけはせん。わざと、のろのろとうごいとるだけやった。

そんなむかしの百姓たちの話があるんで、いまでもこのあたりでは、むりなんだいをいわれて、しごとをおしつけられたときなんぞ、のろのろして、ようはたらかん人のことを〈小田井人足〉というのやそうな。

〈再話・松原喜久子〉

毛かえ地蔵
〈伝説・名古屋市〉

これは、名古屋にお城ができる、ずっとまえ、平安時代というてたころの話。

名古屋の東のはずれ、島田のあたりは、そのころから、京のみやこと東国をむすぶ、だいじな街道がとおり、けっこうさかえとったもんや。西の国からは、陶器をはこぶ商人たち、東の国からは、砂金や砂鉄をはこぶ金売りたち……、そんな人らが、ゆったりといきかっとったそうな。

しかし、源氏と平家のあらそいが、はげしくなるにつれ、ぶっそうな旅人がふえてきた。馬にのった、さむらいたちや。

いくさは、しだいに、このあたりまでひろがってきて、血刀をさげたままで、かけぬけていくさむらいたちに、田も畑も、ふみにじられるようになった。なかには、やりや刀にものをいわせて、むりやり、米や、みそをうばっていくさむらいも、でてくる。

百姓たちは、そのたびに、くやしなみだをながすんやが、とめることはできん。うっかりもんく



をいえば、ころされるでなも。かげで、ぶつぶつ、こぼすばかりや。
そんなある晩、村の若者のあつまりで、ひとりの男がいいだした。
「このまま、さむらいたちに、したいほうだいさせとくわけにはいかんぞ。どうや、夜中に、こっそり、やつらの陣地にしのびこんで、馬をぬすんじまったら……。」
「そりゃあ、ええかんがえだ。やつら、うごきがとれんで、田も畑もあらされずにすむわなも。」
「さっそく今夜、やろまいか。」
なにせ、いせいのええ若い衆のこんだ。日ごろのしかえしとばかりに、あとさきもかんがえんで、ちかくの丘に陣をはっとる東の国のさむらいたちのうまやに、しのびこんだ。
つながれとる馬は、どれも、やみ夜とまごう、たくましい黒馬ばかり。
「こりゃあ、つごうがええぞ。」
なき声をたてんよう、足音をきかれんよう、こっそりとうまやからひっぱりだし、村へつれかえった。
村へついて、ほっとひといきいれてから、みんなは顔を見あわせた。
「さて、この馬、どうせるだ。ぬすんだのが見つかったら、ただじゃすまんぞ。」
「見せしめじゃいうて、村じゅう、しばり首になるかもしれん。」

「売りとばしても、すぐにわかってしまうに。」

すっかり頭をかかえこんだ若者たちは、村のお地蔵さまに、おねがいした。

「お地蔵さま、どうか、わしらをたすけてくだされ。」

「おねがいします。どうか、わしらが馬をぬすんだことがわからんような、いいちえをさずけてくだされ。」

口ぐちにいいながら、みんなで、お地蔵さまのまえにひざまずき、頭をさげて、いっしんにおいのりした。

さて、若者たちが顔をあげると、これはどうじゃ。なんと、かたわらの木につないでおいた黒馬は、ぜんぶ、かがやくばかりの白馬にかわっとる。

「こりゃ、うまいぐあいだ。これなら、ぬすまれた馬とは、わからせんぜ。」

若者たちは大よろこびで、白い馬を村へつれてかえった。

夜があけると、さむらいたちの陣地では、馬がぬすまれたのに気づいて、大さわぎ。あちこちさがしても見つからんので、村へも、しらべにやってきた。

でも、ぬすんだ馬は、みんな白馬にばけとるんで、見つけだすことができん。しきりに首をひねりながら、かえっていった。



馬がのうては、さむらいたちも、いくさができん。ぶりぶりはらをたてながら、東のほうのじぶんの国へ、とぼとぼと、あるいてかえっていったと。

つぎに、西のほうの国のさむらいたちがとおりかかったときも、やっぱり馬が、ひと晩のうちに、きえてなくなってしまう。

こんなことがかさなるうちに、あちらこちらのさむらいたちのあいだに、馬がきえてなくなる、ふしぎな村のうわさがひろまり、やがて、どの国のさむらいたちも、この村には、よりつかんようになってしもうた。

おかげで、村のお百姓たちは、平和で、しずかなくらしをおくることができたと。

そののち、熊坂長範という大どろぼうが、この

お地蔵さまのそばに馬小屋をつくり、馬をぬすんでは、毛の色をかえて売りとばしておったといわれとる。ぬすんだ馬の毛の色がかわっとるんで、見つからずにすんだんだわなも。

長範は、金もちの家からしかぬすまず、また、もうけた金は、おしげもなく、まずしい人たちにわけてやったんで、人びとからしたわれ、お地蔵さんも、たすけてくださったんやと。

いまでも、このお地蔵さんは、〈毛かえ地蔵〉とよばれ、かみの毛の色をよくするお地蔵さんやいうて、年二かいのおまつりには、大ぜいの人でにぎわっておる。

〈再話・しかたしん〉

うめく金シャチ

〈現代民話・名古屋市〉



伊勢は津でもつ　津は伊勢でもつ
尾張名古屋は　城でもつ

こういう歌を知っておいでるかなも。その歌のとおり、名古屋城は、なんというても、名古屋の人びとのほこりや。それだけやのうて、心のささえにもなっとる。

あの太平洋戦争で、まけいくさの色がこくなり、名古屋の町が空しゅうをうけはじめたころも、お城は、北のほうの空に、どっしりとそびえとった。どうどうたる五層の天守閣と、金のシャチホコを見あげながら、町の人びとは、こんなことをはなしとったもんや。

「B29のばくだんがおちても、このお城は、だいじょうぶなようにできとるんやと。」

「おお、おれも、そうきいた。天守閣のやねは、みんな、あつい赤金(銅)でふいてあるでなも、ばくだんはみんな、すべりおちてしまうげなよ。」

「そうだげな。それに、あの金のシャチホコが、水をよんで雨をふらせ、お城をまもってくれるんやと。」
「なんしょ、天下の名城だでなも。」

けれども、昭和二十年にはいってからは、空しゅうが、ますますひどくなり、工場や港だけじゃのうて、町のほうのふつうの家や店まで、ばくげきをうけはじめた。それで、金のシャチホコも、空しゅうでこわされてはたいへんと、どこか、あんぜんなところへうつされることになったげな。
天守閣のてっぺんまで、ふとい丸太の足場がくまれ、二ひきの金シャチは、そろそろと、おろされていった。そして、その日のうちに、一ぴきは下まで、もう一ぴきも、とちゅうのやねまで、おろすことができたそうだわ。
「やれやれ、これで、あしたじゅうには、かたづけられるわなも。」
「ご先祖さまからつたえられた、名古屋のたからを、ぶじにまもることができるわえも。」
しごとにあたった人びとは、ほっとして、その晩は、うちへかえった。
つぎの日は、朝から、ようはれとった。ところが、午前七時ごろになって、とつぜん、人びとのねむりをきりさくように、空しゅう警報がなりひびいた。そしてまもなく、南の空に、数十機ずつのア

メリカばくげき機のかたまりが、いくつもいくつもわきだし、やがて、空いちめんをおおう大群となって、おそってきた。
たちまち、町じゅうは火とけむりにつつまれた。ふりそそぐ、しょういだんの雨。地面をゆるがす、ばくだんのひびき。
家いえからふきだす、まっ黒なけむりが空をおおい、町は日食のときのように、うすぐらくなっ



た。その中を、まっかなほのおにてらされて、にげまどう人びと。それはもう、地獄やった。

やがて、北のほうで、ひときわ大きなばくはつがおこり、大きなたてものが、やけくずれる音がした。

「ああ、お城がもえる。」

人びとは、防空ごうの中につっぷしながら、そうおもうた。

すると、そのときじゃ。

「ウォーン、ウォーン。」

ながく、ふとい、ひめいのような声が、どこからともなく、きこえてきた。ばく音でもなければ、サイレンの音でもない。それはまるで、巨大なけだものが、死のまぎわにさけぶ断末魔の声を十ばいにも、二十ばいにも大きくしたような音やった。

その、くるしげな、ものがなしい声をきいて、防空ごうの中の人びとは、おもわず身ぶるいした。

そして、

「あれはきっと、お城の金シャチが、ないとるんじゃ。」

「ああ、天守閣からはずされて、名古屋のお城も、町も、まもることができんかったんをかなしんで、ないとる声じゃ。」

と、うわさしあった。

ようやくアメリカ機がさったあと、うすれてゆく黒煙の中を、人びとは、ぼうぜんと北の空を見あげた。しかし、そこにはもう、お城もなければ、金のシャチも見えなんだ。

「お城は、もえてしまったなも。」

人びとは、がっくりとかたをおとしながら、やけおちた家いえのあとかたづけをはじめるのやった。そして、憲兵やけいさつ官にきこえんように声をひそめながら、

「これで、いよいよ名古屋もおしまいだわ。」

と、ささやきあった。

この空しゅうをはじまりとして、そのあと、名古屋へのてってい的なじゅうたんばくげきがはじまり、まもなく町は、かんぜんにやきはらわれてしもうた。そのばくげきのたびに、名古屋の町の人らは、シャチのかなしそうなうめき声をきいたそうや。

〈再話・しかたしん〉

山につたわる話



花まつりのてんぐ

〈伝説・北設楽郡〉

むかし、北設楽郡の柿野に、幸作という、とってもおどりずきの男がおった。

北設楽といえば花まつりだ。まい年、くれから一月のころ、新年のゆたかなみのりをいのって、村ごとにひらかれるまつりで、そりゃあ、にぎやかなもんだ。

まつりの夜、村人たちは、花宿になった家の庭さきにかがり火をたき、ひと晩じゅうおどりあかす。骨のしんまでこおるようなさむさの中で、みんな、むちゅうになってまいおどるんじゃ。

なかでも幸作は、たいへんなおどりずきだったから、この花まつりのころになると、もう、じっとしておられん。きょうは、こっちの村の花まつり、あすは、あっちの村とでかけては、まい日でも、まいおどるほどだったそうな。

その年も、ぶじ花まつりがすんで、ある日のこと、幸作は波多森沢という山へ、草かりにいった。

やがて、ひとわたりかりとったので、ちょっと木かげで、いっぷくしとった。

すると、ふと、どこからか、笛の音がきこえてくるじゃないか。花まつりの舞いのはやしだ。幸作の手や足は、もう、どうにもむずむずしてきた。

「まいたいのう……。いや、いかん、いかん。……山でまってはならんのじゃ。」

このあたりでは、山で口笛をふいたり、おどりをおどったりすると、おそろしいてんぐにさらわれるという、いいつたえがあった。それで、幸作もじっとがまんしとったが、こんどは、たいこの音までが、ひびいてくる。

幸作は、おもわず立ちあがった。そして、いまにも、手足をうごかしそうになったが、

「いかん、いかん。てんぐにつれていかれるでなあ。」

と、やっとのことで、じぶんにいいきかせ、また、草の上にこしをおろした。

だけど、風にのってきこえてくる笛や、たいこの音が気になって、どうにもおちつかん。ひじまく

らでねそべってみても、心はうきうきするし、とても、じっとしておれん。
　まつりばやしは、ますます、ちょうしよくなった。

　　ピーヒャラ　ピヒャラ　ドドンコドン
　　ヒャララコ　ヒャララ　ストトントン

「ええい、もう、たまらん。」
　幸作は、そうさけぶと、おもいきって立ちあがった。そして、首をふりふり、からだじゅうでちょうしをとりだすと、もう、とまらなんだ。ここが山ということも、山でまってはいかんことも、なにもかもわすれ、ただおもしろくまいつづけた。
　やがて、あせびっしょりになったが、まうほどに身がかるくなって、知らずしらず口笛までふきながら、幸作は、ときのたつのもわすれとった。と、ふいに、
「おい。」
と、だれかがよんだ。
　ふりむくと、すぐそばに、はなのたかい、まっかなてんぐが、ぬっと、つっ立っとる。そのうしろには、青い顔のてんぐもおった。赤いてんぐが、
「花をまうなら、いっしょにまうで、ついてこい。」

と、幸作をさそった。幸作は、びっくりして、ものもいえずに、ぼわっと立っとった。
　すると赤てんぐは、つなのようなものを、大空めがけて、えいっとなげた。
「あ、あれっ？」
　幸作がまばたきするまに、つなは、するするっとのびて、りっぱな道になった。そのさきは、大空をまたいで、明神山から御殿山、平山明神へと、つづいとる。
　幸作が、目をぱちぱちさせとると、てんぐは、
「さあ、いくぞ。下を見るな。」
とさけんで、幸作の手をとり、とぶように山やまをわたっていった。幸作は、ただもうおそろしくて、じっと目をつぶっておった。
「そうら、ついたぞ。」
　てんぐの声に、幸作は、おそるおそる目をあけた。そこは平山明神のいただきで、目のまえでは、赤てんぐ、青てんぐどもが、大ぜいあつまって、花をまっておる。
「それ、いっしょにまうがいい。」
　てんぐに、ぽんとせなかをおされて、幸作も、おどりの中にはいっていった。だけど、おそろしくて、おそろしくて、おどるどころじゃあない。ただ、ぶるぶると、ふるえておった。



ひろばでは、赤てんぐのふきならす笛の音が風にのり、青てんぐのたたくたいこの音が、山の木の葉をふるわせて、てんぐたちは、いかにもたのしそうにおどっている。

ヒューララ　ヒュララ　ドドンコドン
ヒューララ　ヒュララ　ドドンコドン

はやしをきき、おどりを見とるうちに、幸作もだんだん、ゆかいになってきた。そして、いつのまにやら、身ぶり手ぶりおかしく、まいはじめておった。

「やんや、やんや。おまえはうまいな。」

赤てんぐが、まいながらさけんだ。

「やんや、やんや。おれにもおしえろ。」

青てんぐも、幸作のうしろについておどりはじめた。大ぜいのてんぐたちも輪になって、はなを



ふりふり、くるくるとまいおどった。

幸作はもう、おそろしさもわすれ、舞いのなかまになりきって、ただ、うっとりとまいつづけた。あいてがてんぐだということさえわすれ、いよいよ、まいにまった。

やがて、ふらふらになってまいおわると、てんぐは幸作にむかって、

「いやあ、おもしろかった。おまえのおどりは、たいしたもんじゃ。ほうびに、これをやろう。」

と、うまい臼もちと、かおりのよいたばこをくれたそうな。

幸作がよろこんで、もちをぱくついておると、てんぐは、いきなり幸作をつかんで、きりたったがけの上にある猿岩まで、つれていった。そして、がけっぷちに立たせて、大声で、

「ここから、おとすぞ。」
と、さけんだ。そいでも、幸作(こうさく)はふしぎに、すこしもこわいとはおもわなんだ。へんじもせずに、にこにこしとると、てんぐは、ふふんとわらって、
「たいしたやつじゃ。てんぐのすがたを見られたからには、生きてはかえせんのじゃが、おまえのおどりと、きもったまにめんじて、ゆるしてやろう。山のふもとまで、あんないするぞ。」
と、さきに立って山をくだりはじめたと。
今立(いまだち)というところまできたとき、道(みち)のかたわらに、大きな杉(すぎ)の木があった。幸作(こうさく)がその木をきって、
「秋葉山(あきばやま)にいるという大てんぐさまに、これをさしあげてくだされ。」
というと、てんぐはたかわらいして、
「よい心(こころ)がけじゃ。みやげに、なんでもやるぞ。」
と、幸作(こうさく)を見おろして、いったそうな。そこで、幸作(こうさく)も、えんりょなくこたえた。
「べつにほしいものもないが、大力(だいりき)がほしい。」
　すると、てんぐは、きげんよくうなずいて、
「よしよし。では、あの木をせおってみよ。」
といいながら、幸作(こうさく)がきったのよりもずっと大きな木をひっこぬいて、幸作(こうさく)のかたにかつがせた。

ふつうのものには、とてもてんような大木なのに、幸作は、ちっともおもいとおもわなんだ。かるがるとせおいながら、てんぐとわかれて、村へかえっていった。

村の人びとは、大木をへいきでかついでかえってきた幸作を見て、もう、おどろいたのなんの。みんな、幸作のまわりにあつまってきて、目をまるくしながら、たずねた。

「幸作さあ、そんな大きな木を、ようまあかついで、いったい、どうしただん。」



幸作は「へい、どうも。」と、おじぎをしてから、いままでのことを、ぜんぶはなしてきかせた。だが、村の人たちは、なかなか、ほんとうとおもってはくれなんだ。

そいでも、十人でももちあげられん木を、幸作が、ひょいとゆびさきでつまみあげたり、大岩をよいしょっとかついだりしたら、

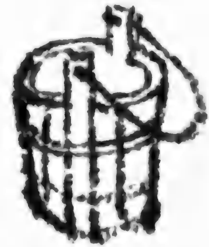
「ふうん、なるほど。てんぐのことも、やっぱりほんとうらしいなあ。」

と、やっとのことで、わかってくれたと。

それで、みんなでそうだんして、てんぐのくれた大木は、「そまつにしちゃあ、いかん。」というて、ほこらをつくって、村でだいじにまつることにしたそうな。

〈再話・山本知都子〉

水こい鳥
〈むかし話〉



南設楽郡をながれる三輪川にそったあたりに、むかし、一けんの百姓家があって、一頭の馬をかっておった。馬のせわは、もっぱら、下女のおはなのやくめだったが、家の人は、いつも、

「馬は、炭や米をとおくまではこんでくれる、だいじなはたらき手じゃ。けっして、そまつにあつかうでないぞ。」

と、おはなにいいきかせておったそうな。おはなは十二、まだあそびたいさかりなのに、家がまずしかったもんで、こうして、よその家にはたらきにでとったんじゃ。

　ところがある日、おはなは、あんまりいそがしくて、つい、馬に水をやるのをわすれてしまった。すると、家の人は、

「だいじな馬に水をやるのをわすれるとは、なんてこった。今晩は、めしはやれんぞ。」

と、えらいおこりようだった。

ごはんをぬかされたおはなは、はらがへって、はらがへって、とこについてもねつけなんだ。
「いっくら米や炭を、とおくまではこぶか知らんが、馬は馬。それなのに、馬は家の人とおんなじようにかわいがられ、わしらあ、いっくらはたらいても、そまつにされるなあ。」
おはなは、なさけなかった。くやしかった。
「馬ばっかり、馬ばっかり……。」
つぶやくうちに、なみだがながれ、まくらがびたびたになった。
おはなは、それから馬を、にくらしくおもうようになった。ときどき馬をいじめて、また、家の人にしかられた。
ある日、うちじゅうの人が田や畑へ、しごとにいって、馬とおはなだけがのこっとった。
「こいつがおるで、おこられるんだ。こんな馬、わしゃあ知らん。」
そうかんがえたおはなは、わざと、馬に水をやらなんだ。馬は、のどがかわいて、ヒヒーン、ヒヒーンと、ないた。
つながれとる馬は、ひとりで、水のみにいくことはできん。昼がすぎ、日が西の山にかたむきかけても、馬は水をのませてもらえなんだ。
「ヒ、ヒーン、ヒ、ヒーン。」



だんだん、死にそうななき声になった。
おはなは、水ももたずに馬のそばへいくと、
「ふふん、くるしむがええ。いいきみじゃ。」
と、いじわるくわらった。
と、そのときじゃ。きゅうに、おはなのからだがちぢみはじめた。そして、みるみる、こぶしぐらいに小さくなってしまった。くちびるはのびて、赤い、とがったくちばしになり、からだからは、まっかなはねがはえ、ながい尾ばねもでてきた。
馬をいじめたおはなは、赤ショウビンという小鳥になってしまったんじゃ。
おはなは、びっくりして、
「ピョー、ピョー、ピョー。」
と、なきだした。
そこへちょうど、家の人がかえってきた。見る

と、馬小屋で馬がぐったりしとるというのに、いくらよんでも、おはなのすがたが見えん。そばで、まっかな小鳥が、しきりにないておるだけじゃ。そして、
「おはな、おはなあ。」
とよぶたびに、その小鳥が、
「ピョー、ピョー。」
と、こたえるように、なくんだと。それではじめて、家の人たちも、
「ほう、これはきっと、おはなが鳥になってしまったにちがいない。あんまり、馬をいじめたむくいじゃ。」
と、気づいたそうな。
小鳥は、木のえだにとまり、なきながら首をかしげて、またないた。なきつづけているうちに、のどがからからにかわいた小鳥は、小川のほうへ、とんでいった。
ところが、小川の水をのもうとすると、水の中から、まっかにもえる火が、めらめらと、くちばしめがけて、せまってくる。あわてて、べつの木のえだにとびうつって、水をのもうとしたが、やっぱり、また水の中から、火の玉がせまってくる。
それは、ほんとうは火じゃあなくて、まっかな小鳥になったおはなのすがたが、水にうつっとるの

だった。でも、それに気づかんおはなは、

「ピョー、ピョー。」

となきながら、ほかの沢へとんでいった。沢で水をのもうとしてうつむくと、そこにも、まっかな火の玉があった。

のどがかわいて、ひりひりするのに、まっかな小鳥は、水をのむことができん。そうなると、天か



らおちてくる雨だけが、のどをうるおす、ただひとつのたよりだ。おはなは、木のえだにとまって、はねをうちふるわせながら、空にむかって雨をよびつづけた。

「ピョー、ピョー。ヒョロ、ヒョロ、ヒョロ。」

まっかな小鳥の、かなしそうなきなき声は、水がこいしい、水がこいしいというようにきこえた。その声がきこえてくると、村の人たちは、

「ほれ、おはなが、水こいしいとないとるぞ。」

「ほんにまた、水こい鳥がないとるぞ。馬をいじめたむくいかいのう。」

「あれ、あんなに雨をまっとるんじゃ。千声ないたら、雨がふるげな。」

などと、はなしあったと。

いまでも、このあたりでは、水こい鳥（赤ショウビン）がなくと、雨がふるといわれとる。

〈再話・山本知都子〉

犬千代さ〈伝説・南設楽郡〉

さて、こんどは、あるごうけつの話をしよう。

ごうけつなどといえば、どうも、とおいむかしの話のようだが、これは、明治のはじめごろ生まれて、つい、このあいだまで生きとった人だ。南設楽郡作手村川手の千代之助という人で、東三河きってのかりの名人といわれとった。

「おらあ、あと四十五頭うちゃあ、イノシシを三千頭うったかんじょうになる。」

といったのが七十さいのころのこと。十五のときから鉄砲をかつぎ、山あるきが三どのめしよりすきだった。かりだけじゃあない。字をかかせてもうまく、義太夫（三味線にあわせて物語をかたる音曲）もうたい、村長もできるほどの、たのもしい男だったそうな。

村の人たちは、千代之助とはよばんで、いつも、千代さ、犬千代さとよんでおった。それは千代さが、犬よりたしかな目やはなをもっとったからだ。



なにしろ千代さときたら、りょう犬もつれずにかりにいって、山へはいると、すぐにイノシシを見つけたり、
「ここを昼まえに、イノシシが東のほうへとおった。」
と、ぴたりとあてるんじゃからのう。
あるときなんぞ、一日のうちに、イノシシ五頭、シカ七頭もしとめたり、二頭ならんであるいとったイノシシを、一ぱつの玉で、ころりとたおしたりしたもんじゃ。
冬になると、シカ皮の上着とズボンを身につけて、よく本宮山などへ、かりにでかけた。せおいぶくろに、米、みそ、しょうゆ、しお、くすりなどを、ぎっしりおしこんで、
「ちょっと山へいってくるぞ。」
と、ひょっこり家をでたきり、冬じゅう、かえってこんこともあった。それでも、おかみさんのまつは、なんにもいわんで、ひとりきりで田や畑のしごとをして、七人の子を、じょうぶにそだてあげたから、また、えらいわなあ。
千代さは山へいっても、かならずどこからか、たべものを見つけてくる。野宿など、なんともおもわん。雪がふると、岩あなでたき火をたいて、ごろねする。そして、なん日も山じゅうをかけまわって、かりをつづけたそうな。

あるとき、この犬千代さが、鳳来町只持のあたりの山へ、六人ばかりのなかまといっしょにでかけたことがあってな、そのときのことだ。
一頭のイノシシが、とや（イノシシのねどこ）にねておるのを見つけた犬千代さは、みんなを見まわしていったと。

「きょうのイノシシぼい（つかまえること）は、おれにまかしてくれんかい。みんなは、ここでけんぶつしとってくれ。」

「それじゃあ、お手まえ拝見といくか。」

なかには、千代さのうでじまんを、こころよくおもわん人もおって、

「イノシシちゅうもんは、大ぜいでとりかこんでいかにゃあ、とれんもんじゃ。たったひとりで、どうやってたおすつもりだらあ、まあ、見とろうわい。もし、とりにがしたら、わらってやろう。」

とおもいながら、すこしはなれたところに、なかまとかくれとった。

ところで、ひとりでイノシシのとやへむかった千代さは、なにをおもったか、とつぜん、とやのまわりを、ぐるぐるはしりだしたではないか。そして、はしりながら、とくいの義太夫をうなりはじめた。

この千代さの作戦に、いい気もちでねとったイノシシは、びっくり。なんせ、千代さの足がはやいもんで、義太夫の声は、あっちからも、こっちからもきこえてくる。イノシシは、どっちへにげたら



いいかわからず、ただ、じっとすくんどるだけだ。

そこへ、だんだん輪をちぢめてちかづいた千代さが、木のあいだからイノシシをねらって、パーンと、鉄砲をぶっぱなした。大イノシシは、みごと一ぱつで、ころりじゃ。

なかまのりょう師たちも、おどろいて、

「ふうん、さすが犬千代さじゃ。あんなとき、義太夫をうなるとはのう。」

「義太夫でイノシシをうちとったとは、こりゃ、めずらしいわい。」

と、口ぐちにほめそやしたと。

こうして犬千代さは、いつも、じぶんだけのやりかたで、九十さいをすぎるまで、山のりょう師をつづけたそうな。

犬千代さのように、しんからけものととっくみあえる、きつい山男は、いまのような世の中では、もうでてこんかもしれんなあ。

〈再話・山本知都子〉

おうむ石〈伝説・渥美郡〉

とおいむかし。渥美半島の和地の荘に、渥美太夫国重という豪族がおったそうな。

あるとき、けらいをひきつれて、高根山（いまの越戸の大山）へかりにでかけた。だが、どうしたことか、シカもキツネも、一ぴきもおらん。

えものをさがして、北へ北へとすすむうちに、とうとう高根山をこえて、そのうらにあたる那草山のあたりまできてしまったと。

そのとき、ふと、どこからか、きれいな笛の音がながれてきた。

「はて、こんな山おくで……。」

国重が、笛の音をたよりにさがしてみると、谷間のせせらぎのそばに、ひとりのむすめがすわって、笛をふいておった。そのうつくしいこと、また、笛のじょうずなこと。

しばらくききほれていた国重は、しずかに声をかけた。



「これ、これ。おまえは、なぜひとりで、こんな山おくへきておるんじゃ。」
むすめは、笛をふきやめると、うつくしい声でこたえた。
「はい、わたしはふもとの里にすむ、八重寿ともうすものですが、母のお墓まいりにきて、すこし山あるきをしましたところ、道にまよってしまいました。どうか、おたすけくださいませ。」
国重は、八重寿をつれてかえって、やかたにすまわせているうちに、そのうつくしさと、やさしさにひかれ、やがて、じぶんの妻にした。
八重寿は、夜になると、いつも、たいせつにもっている唐竹のよこ笛をふいた。すみきった笛の音は、山のほうへも、村のほうへも、ながれていった。
「ああ、また奥方さまだ。なんとええ音色だろう。それにしても、あんなにうつくしい奥方さまが、いったい、どこからござったんだろう。」
と、村人たちは、いろいろにうわさした。
やがて奥方には、女の子が生まれて玉栄と名づけられた。
玉栄はうつくしく成長して、十七さいになったとき、主馬之助というさむらいのいいなずけになった。一家は、なんの不足もなく、しあわせだった。
その年の大みそかに、国重は、玉栄をつれて、山田の観音さま（渥美町山田の泉福寺）へ、おまいりに

でかけた。高根山をこえてあるいていくのだから、一日がかりだ。
ところが、そのるすをねらって、とうぞくが国重のやかたにおしいった。
るすをまもっていた八重寿は、なぎなたを手に、けんめいに、とうぞくとたたかった。そのいきおいにのまれたのか、とうぞくは、なにもとらずに、にげていった。
ほっとした八重寿は、あんしんとつかれから、正体もなく、ねむってしまった。
くらくなってかえってきた国重は、へやの中いっぱいに、とぐろをまいている大蛇を見てびっくりぎょうてん。
国重のおどろきの声に目をさました大蛇は、あっというまに、八重寿のすがたにもどった。
でも、じぶんの正体を見られてしまった八重寿は、かなしそうにうつむいて、
「ながい年月おせわになりまして、ほんとうにありがとうございました。わたしは高根山のおくふかくすんでおりました大蛇です。すがたかたちは、このとおりでも、心は人間とおなじです。この世の中では、すがたかたちがちがうだけで、なぜ、いっしょにくらすことができないのでしょう。ああ、もうこうなってしまっては、おわかれするほかありません。どうか、玉栄のこと、くれぐれもおねがいもうします。それから、わたしのたいせつにしておりました、この唐竹のよこ笛を、かたみにおいてまいります。この笛を、わたしとおもって、ときどき、ふいてくださいませ。」



そういって、そとのくらやみの中へ、すがたをけしてしまった。すると、にわかにつよい風がふき、雨がふりだして、その夜は大あらしになった。

いいなずけの主馬之助は、このことを知ると、きゅうに玉栄をうとみはじめ、あうこともさけるようになった。そして、ほかの女となかよくなってしまった。

玉栄は、そのような主馬之助の心がわりが、かなしかった。

そして、ある日、玉栄は、八重寿のかたみの唐竹のよこ笛をだいて家をでた。

高根山をこえ、北へ北へとあるいていくと、谷のそばに、大きな岩が、たちはだかっていた。その下に、かすかに水のながれる音がする。玉栄は大岩の上にのぼって、こしをおろした。そして、しずかによこ笛をふきはじめた。

この笛の音をきいたら、かあさまが、すがたを見せてくれるかもしれない。けものでもいい、大蛇でもいい。かあさまでさえあればいい。

玉栄はそうねんじて、いっしんに笛をふいた。だが、なにもあらわれなんだ。ただ、木立ちをふきぬけていく風の音がするだけだった。

やがて、月がのぼってきた。

笛の音が、はたとやんだ。

そのときにはもう、玉栄は、しっかりと笛をだいて、大岩の上から谷へとびおりておった。

そののち、玉栄のすがたを見たものは、だれもおらん。

渥美郡渥美町馬伏の、那草山の中腹にある、たかさ十五メートル、はば十七メートルもある大岩は、どんな音でも、よくこだまするので、おうむ石といわれているが、玉栄のたましいがのこっているのか、笛の音だけは、こだましないという。

おうむ石の岩かべには、いつごろ、だれがほったのか、日がさをさした玉栄のすがたがあるが、それもいまは、ふかい木立ちの中で、ひっそりと、あついコケにおおわれている。

〈再話・山田もと〉



鳳来寺の三びきのおに〈伝説・南設楽郡〉



むかし、南設楽の鳳来寺の山に、三びきのおにがおったそうな。いつごろからおったのか、どこからきたのかわからんが、そのおにたち、青おにを太郎、赤おにを次郎、黒おにを三郎といった。

青おにの太郎は、大きな木をかた手でひょいとひきぬくほどに、力がつよかった。

赤おにの次郎も、大きな岩を、かた手でがっとなげとばすほどの力もち。

黒おにの三郎も、大きなイノシシを、かた手でぐいっとひねりつぶすほどの大力じゃったと。

三びきのおには、鳳来寺の山が大すきだったもんで、ひろい山じゅうを、子どものようにかけまわっては、まい日たのしくくらしとった。

ある日、といっても、いまから千三百年もまえのことじゃが、おにたちのおる鳳来寺の山へ、ひとりの坊さんが、のぼってきた。それを見つけた青おにの太郎は、ヒュ、ヒュ、ヒューと、風のような

口笛で、あいずをした。すると、二ひきのおにたちも、木の間をぬって、とぶようにはしってくると、青おにのそばの岩かげにとびこんで身をかくした。

「あやしいやつだな、あのぼうず。ひょいっとつまんで、ほかってやろうか。」

青おにの太郎は、大きな杉の木のかげから、坊さんをにらんだ。

「うん、なにものだろう。なげとばしてやろうか。」

赤おにの次郎は、大きな岩のうしろで、むずむずする毛だらけのうでをさすった。

「へへん、つきとばしてくれるぞ。」

黒おにの三郎は、つのを岩でごしごしといだ。

そんなことと知ってか知らずか、坊さんは、なにかぶつぶつとなえながら草をふんでやってくる。

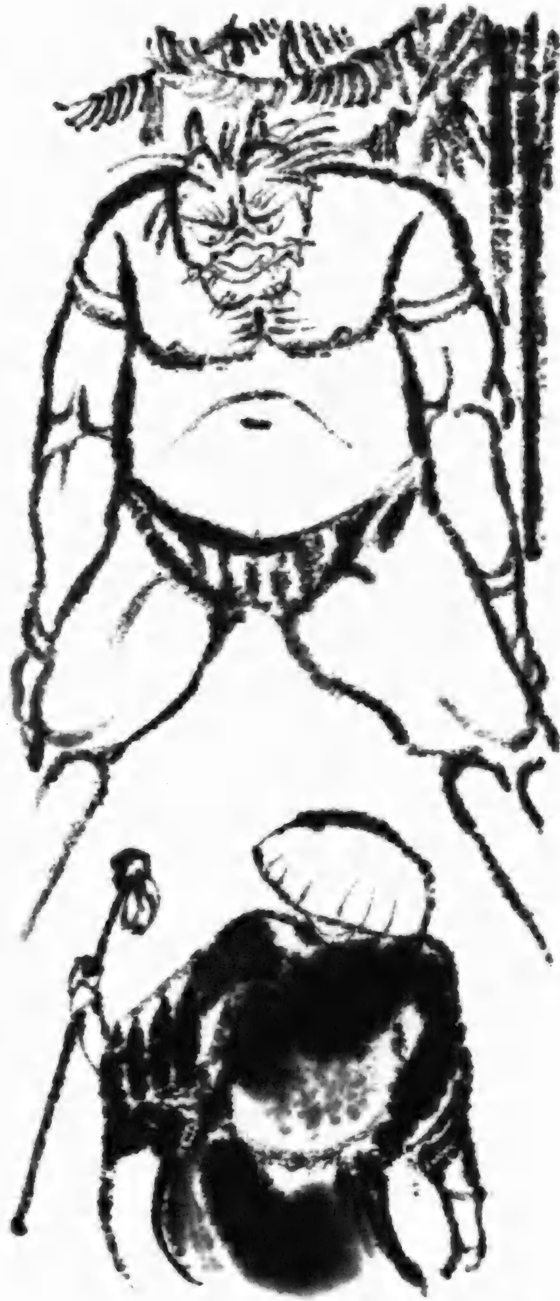
三びきのおには、ぬっと、すがたをあらわし、うでをのばしてちかよった。と、そのとき、坊さんのからだが、ちかあっとひかって、おにたちの目をさした。

「あ、ち、ち……、目が、目が見えん。」

「やっ、なんも見えんぞう。」

「お、おれもじゃ。」

三びきのおには、あわててわめいた。目をこすってうろうろしとるうちに、坊さんは、どんどん山



へのぼっていっちまった。そして、日ぐれには、ゆうゆうと山をくだっていった。

つぎの日もまた、坊さんは、やってきた。青おにの太郎は、「きょうは、やられんぞ。」と、目をつむったまま、杉の木のかげから、ずいっとでていって立ちはだかり、大声でどなった。

「おまえは、だれだ。」

そいでも、坊さんは、ちっともおどろかん。しずかな声でこたえたと。

「わたしは利修。」
こんどは、赤おにの次郎がとおせんぼして、
「どこの生まれだ、どこからきた。」
と、われるような大声でおどした。
「山城の国（いまの京都府）に生まれ、百済の国（むかし朝鮮半島にあった国）でまなんできた。」
つづいて、黒おにの三郎も、まけずにわめいた。
「なんで、ここへきた。なにしにきた。」
利修は、やっぱりおちついた顔で、
「このおくぶかいお山がすきだから。ここで修行したくてきた。」
それだけこたえると、なにごともないように、草をわけて、どんどんのぼっていく。
三びきのおにたちは、ぽかあんとした。
「へえ、このお山がすきだと。」
「修行って、なんだろ。」
「うーん、わからんなあ。」
けわしい岩をよじのぼっていく利修のあとを、三びきのおには、あわてておっていった。

それからというもの、雨がふっても、風がふいても、利修は、まい日まい日、やすまずにのぼってきた。おにたちは、いつも利修のあとをついてまわりながら、
「お山でへんなことしたら、しょうちしねえぞ。」
「そうだとも、ぶんなげてやる。」
「おらあ、つきとばし、ひねってやる。」
と、おどかした。

ある日のこと、利修は、鳳来寺の七本杉の一本をきった。おこった青おにの太郎は、利修につかみかかったが、どうしたことか、さわろうとすると、うでがおもうようにうごかん。
赤おにの次郎も、利修のかたをつかもうとしたが、やっぱり、うでに力がはいらん。
こんどは、黒おにの三郎が、首をひねりつぶそうとしたが、力がぬけて、どうしようもない。
そうするうちに、利修は杉の木に、ほりものをきざみはじめた。三びきのおにたちは、口をあけたまま見ておった。
利修は、なにごとかをいっしんにとなえながら、なん日もかかって、木をほりあげると、それを、大岩の上にまつった。

「それは、なんじゃ。なにせるだ、そんなもん。」

青おにの太郎がにらみつけた。

「うん、これは、薬師如来というてな、村の人たちが、ぶじに、たっしゃでくらせるようまもってくれる、ありがたいほとけさまじゃ。」

利修は、そのまえに、きちんとすわって、両手をあわせ、ごにょごにょとなえはじめた。

「へえ、ほとけさん？　へえ。」

青おにの太郎は、なんだかようわからんで、きょとんとしとった。

「やあ、大岩の上のほとけさんが、ひかりだしたぞ。」

赤おにの次郎は、目がしょぼしょぼしてきて、なんどもこすった。

「なんだか、いいにおいがしてきたぞ。」

黒おにの三郎は、黒いはなを、ひくひくさせた。おにたちは、顔を見あって、首をかしげた。

つぎの日から、利修はまた、べつの木をほりつづけ、仏像ができあがると、またいっしんにおがんだ。

「こんどは、なに、おがむだのん。」

黒おにの三郎が、小さい声できいてみた。



「田や畑につくったものが、たくさんみのるようにな。」

「へえ、そいでも、おまえが米やムギつくっとるわけじゃねえに。」

「村の人たちのためにな。」

「ふうん、そうやって、人のことをおがんで、おまえ、木の実や、草あたべるだけじゃあ、はらあへってならねえだら。」

「それも修行じゃ。」

「へえ、なんでそんなこと。おらあ、とってもできねえ。おらあ、シシの肉もくいてえし、ウサギもつかまえてえ。とってもできねえ。」

黒おにの三郎は、しきりに首をふった。

「こりゃあ、ふつうの人じゃあねえなあ。」

三びきのおにたちは、だんだん利修がすきに



なった。
「なあ、利修さまあ、おれたちで……。」
黒おにの三郎に、みなまでいわせず、赤おにも青おにも、つづいていった。
「おう、まもってやろう。」
「鳳来寺のお山のすきなものどうしでな。」
おにたちは、にけっとわらった。それからは、三びきのおにたちは、あやしいものがちかづかんようにと、いつも目をひからせて、修行する利修をまもっておった。
利修のいのりのおかげで、ふもとの村むらでは、そののち、たいしたやまいもはやらず、まい年、たいそうな豊作がつづいたそうな。
そのうわさは、とおいみやこにまでつたわっていった。

ある日、みやこの天皇が病気になって、それがなおるように、いのってもらいたいというつかいの人が、利修をたずねてやってきた。つかいの人は、三河の国（いまの愛知県東部）へはいって、本宮山のあたりまできたものの、道にまよってこまっておった。

すると、ひとりのふしぎなおじいさんがあらわれて、小さな子どもを鳳来寺の山への道あんないにつけてくれた。

つかいの人は、その子どものあとについて、やっと牛ノ鼻とよばれているあたりまでのぼった。

それを見つけた三びきのおにたちは、あやしいやつがやってきたぞと、おこりだして、

「やあ、ここへのぼるのはゆるさんぞ。」

「なにやつだ、もどれ、もどれ。」

「ひねりつぶしてくれるぞ。」

と、山じゅうにひびきわたる声でどなった。

びっくりしたつかいの人が、わたしはあやしいものではないゆえ、いかせてほしいと、なんどたのんでも、おにたちはききいれん。

そのとき、道あんないの小さな子どもが、もっていたたからぼうを、さっとふった。すると、青おにも、赤おにも、黒おにも、きゅうに力がぬけてしまった。子どもは、薬師如来さまのおつかいだっ

たんじゃ。

　こうして、天皇のつかいの人は、やっと利修にあうことができた。そこで、

「利修さま、どうか、天皇のご病気がなおられるように、おいのりしてください。」

と、ていねいにおねがいした。

　三びきのおにたちは、首をかしげて利修を見ておったが、それからいよいよ利修をうやまう気もちがつよくなり、じぶんたちのあらあらしいおこないをはじるようになったという。

　やがて、天皇の病気もなおり、そのお礼に、この山に鳳来寺という、りっぱなお寺がたてられた。

　さて、三びきのおにたちは、それからも利修のそばをはなれんでまもっておったが、利修も三百九さいになり、入寂（坊さんが死ぬこと）するときがきた。

　そこで利修は、青おにの太郎、赤おにの次郎、黒おにの三郎をよんでいった。

「いよいよ、おわかれだ。わしは死んでも、このお山と村をまもるが、おまえたちは……。」

「おれたちも、なあ。」

「うん、いっしょに、ずっと。」

「このお山と、村の人たちをまもりたい。」

三びきのおにたちは、まよわんでこたえた。

「そうか、それなら、ともにまいろう。」

「おうっ。」

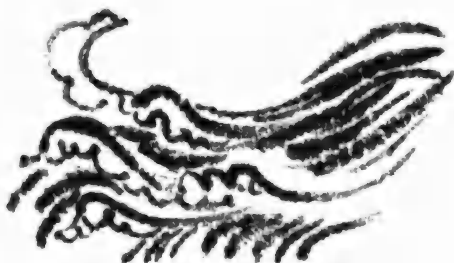
三びきのおにたちは、目をつむって、しずかに首(くび)をきられた。そして三びきとも、石のかんにおさめられ、死後(しご)もなお利修(りしゅう)をまもるかのように、鳳来寺(ほうらいじ)の本堂(ほんどう)の地下(ちか)にうずめられたという。

それをつたえきいた村の人たちは、それからまい年、正月(しょうがつ)三日に、田楽祭(でんがくさい)をして、おにたちの霊(れい)をなぐさめ、供養(くよう)をしておる。

いまから三百五十年ほどまえ、元和(げんな)年間(ねんかん)に本堂(ほんどう)がやけたとき、石のかんをほりだしてみたら、ふつうの人よりずっと大きい骨(ほね)が、のこっとったという。

〈再話(さいわ)・山本知都子(やまもとちずこ)〉

海につたわる話



かしき長者

〈伝説・知多郡〉

むかし、むかし。三河湾の入り口にある日間賀島という小さな島に、きよじいさんという、びんぼうなかしきがすんでおった。

かしきというのは、漁にでていく船にのりこんで、漁師たちのごはんのせわをする人、めしたきのことだ。

きよじいさんは、いつもうすぐらい船底で、ごはんをたいたり、やさいをきざんだり、あとかたづけをしたりして、はたらいとっただ。

漁師たちのしごとは、きつい。それで、みんな

はいつも、はらをへらしとって、
「おうい、じいさん、めしはまだか。」
「はや、めしにしてくれんかい。」
などとどなって、さいそくする。きよじいさんは一日じゅう、おちつくひまもありゃあせん。
だが、きよじいさんには、ひとつだけ、たのしみがあった。
それは、一日のしごとがすっかりすんで、漁師たちもねしずまってからのことだ。
きよじいさんは、みんなのたべのこしや、やさいのきりくずを、ただ、すててしまったり、くさらせたりせんで、のこらず、とっておいた。そいで夜になると、ひとりで船ばたまであがっていって、
「おいお（おさかな）、おあがり。」
といって、海にむかって、まいてやるのだ。それが、きよじいさんのなによりのたのしみであり、「おいお、おあがり。」が、じいさんの口ぐせだったそうな。

あるとき、きよじいさんののった船は、いく日もいく日も、いそがしい漁をつづけて、遠州なだまでやってきた。
一日じゅうやすむひまもなく、たちはたらいた漁師たちは、船がいかりをおろすと、みんな、ぐっ

すりと、ねこんでしまった。

きよじいさんは、あいかわらず船の底で、みんながたべたあとの、茶わんや、さらや、なべをあらい、そして、あしたの朝ごはんのしたくまでして、やっとかたづけおわったのは、もう、夜中にちかいころだった。いつものように、のこりものをもって、船ばたにあがると、

「おいお、おあがり。」

といいながら、海にまいた。そいで船底にもどろうとしたときだ。それまで遠州なだの黒潮に、ゆらり、ゆらりと、大きくゆれていた船が、ぴたりとうごかんようなったのに、きよじいさんは気がついた。

「おや、へんだぞ。」

船ばたへひきかえして海を見わたしたきよじいさんは、びっくりこいた。いままで大波がどこまでもつづいとった海原が、すっかりひあがってしまって、いちめんの砂浜になっとる。

砂浜は、おりからの十五夜の月にてらされて、見わたすかぎり銀色にかがやいとった。船は、その砂浜に、どっかりと、すわっとるんじゃ。

「こりゃいったい、どうしたことずら。」

きよじいさんは、たまげて声もでん。いくらなんでも、このひろい、ふかい遠州なだが、ちっとや



そっとで、ひあがるわけがない。きよじいさんは、ゆめじゃあないかと、じぶんのほっぺたをつねってみたが、どうしてもゆめじゃあない。

「漁師の衆をおこいて、見せてやろう。」

と、おこしにいきかけたが、

「まてよ、漁師の衆は、えらいくたぶれてねてござるだで、あしたの朝、はなしてきかせてやればえ

え。だけど、話のたねに……。」
そうかんがえたきよじいさんは、大きなおけをもってくると、船からとびおりて、さらさらした砂を、おけにいれて、船底にもちかえった。そいで、そのまま、ねてしまった。
あくる朝、きよじいさんは、漁師のだれよりもはやくおきだした。ところが船は、いつもとおなじに大海原の中でゆれとるじゃないか。
「ゆんべの砂浜は、どうなってしまったずら。」
きよじいさんは、どうしても、がてんがいかん。おきてきた漁師に、夕べのことをはなすと、
「ははは、ばかこくない。」
「つくりごとも、ええかげんにせんか。遠州なだが砂浜になんぞ……とんでもない。」
というばかりで、だれひとり、ほんきにしてくれん。
「おいおい、きよじいも年だで、頭がへんになったかいの。」
「ながい船の上のくらしだでよ。」
いわれて、きよじいさんは、おけにいれておいた砂のことをおもいだした。
「ようし、そんねにうたがうなら、ゆんべとっといた、ここの砂を見せてやるで。」
みんなにそういうと、きよじいさんは、船底へかけおりた。漁師たちも、そのあとについて、「ど

れどれ。」とばかり、にやにやしながらおりようとした。と、そのときだ。
「ひゃっ、こりゃあ、どうしたんじゃ。」
とつぜん、きよじいさんのさけび声がきこえた。漁師の衆は、船底へなだれこんだ。
「ありゃりゃあっ。」
「おおっ、こりゃあ、金だ、銀だぞ。」
きよじいさんがいれといた砂が、みんな、金や銀にかわってしまって、きらきら、おけの中でひかりかがやいとる。あんまりふしぎなんで、きよじいさんは、ただもう、ぽかーんとしとるだけだ。
船長役の年かさの漁師が、みんなのさわぎをしずめて、いった。
「きよじいさんよ。こりゃあきっと、おいおたちが、おまえさんにくれたもんじゃろう。」
きよじいさんは、こうして島へかえってから、村いちばんの長者になったとよ。そいで、みんなが、きよじいさんのことを、かしき長者というようになっただ。そののち、日間賀島の漁師たちは、のこりものをすてるとき、きっと、
「おいお、おあがり。」
というようになったそうな。

〈再話・山田もと〉

竜神の燈〈伝説・碧南市〉

むかし、応仁寺というお寺のちかくの浜べに、漁師の親子がすんどった。

むすこの漁師は、まい日、一ばんどりがなくと、小船をこいで漁にでた。しかし、あみももてん、びんぼうな漁師だったので、一日かかっても、とれるさかなは、ほんのわずかなもんやった。

漁師のおっかあは、むすこのとってきたさかなを、小さなおけにいれ、てんびんぼうでになって、村を売りあるいた。一日売りあるいても、たいした金にはならなんだ。しかし、ふたりは、まずしくてもしあわせなまい日をすごしておった。

その日も、漁師は、一ばんどりがなくと、すぐとびおきて、漁にでるしたくをした。

「おっかあ、それじゃ、いってくるで。」

「ああ、でかけるかや。けどよ、けさあ、雲ゆきがよくねえぞ。」

「だいじょうぶだ。たいして、沖へでるわけじゃねえ。しけになりゃ、すぐかえるで。」



「むりせんと、気いつけてや。おめえのすきなアワもちつくって、まってるでな。」

そとは、いつもなら東の空がほんのり白みかけ、西尾の山がぼんやり黒ずんで見えるのだが、その日は、まっくらで、なにも見えなんだ。

（こりゃ、おっかあのいうように、しけになるかもしれん。）

いつもとようすのちがう空を見あげて、漁師は、そうおもった。だけど、一日漁をやめると、一日くえんようなびんぼう漁師だ。

「しけになりゃ、けえってくりゃええ。」

漁師は、おっかあにいったとおんなじことをつぶやくと、沖へむかって小船をだした。

いつものつり場につくと、船をとめて、つり糸をたれた。

しかし、どうしたのか、その日にかぎって、一ぴきもつれなんだ。

（どうしちまっただ、一ぴきもかからねえたあ。）

漁師は、やきもきした。なんとかして、一ぴきでも、二ひきでもあげて、かえりたかった。

ぽつぽつ雨がおちだしたが、（もうすこし、もうちびっと。）と、ねばった。

そのうちに、雨がどしゃぶりになった。風もふきだした。いつもの風とはちがう、なまあたたかいこち（東風）だ。

（いかん、しけがくる！）
漁師は、あわてて、つり糸をたぐった。
そのときだ。ぴかあっと、ま上のまっ黒な空から光がはしった。と、ガラゴローッ、バジバジーッと、目のまえの岩島の松に、ものすごい火ばしらがたった。
「うわあっ！」
一丈（約三メートル）もある大波があがった。とたんに、漁師は、ドシンと船底にたたきつけられて気をうしなった。
どのくらいたったか、目をあけたときは、海はうそのように、しずかになっておった。しかし、右を見ても左を見ても、なんにも見えん。まっくらやみだ。
（ああ、夜になっちまっただ。）
さいわい、ろはながされておらなんだ。でも、応仁寺の浜はどっちだか、わからん。漁師は、ぼうぜんと船べりによりかかったまま、日ごろ信心している竜神さまに、
（たすけてくだされ。）
と、いっしんにいのった。すると、船のとも（後方）のずうっとさきの、まっくらやみの中に、ぽつんとひとつ、たばこの火くらいの、ちっちゃな燈が見えた。



「あっ、燈が！」

漁師は、むちゅうでろをこいだ。ときどき波のしぶきで見えなくなったが、燈は、だんだんちかくなった。

「おうっ、浜だあ！」

漁師は、ろをこぐのもわすれて、さけんだ。おりからでた月の光に、うす白くひかった浜べは、見おぼえのある応仁寺の浜だ。

「おうい！　おうい！」

浜べでよぶ声がする。

（おっかあだ。）

漁師は、へさきにしがみついた。

「おっかあっ、かえってきたぞう！」

声をかぎりにさけんだ。なみだでぐしゃぐしゃになった顔でさけんだ。



浜にかけあがってみると、あの赤い燈は、ふしぎなことに、どっこにも見えなんだ。

二、三日すぎた日、漁師は、燈明のあぶらを買いに西端のあぶら屋へいった。

すると、あとからむすめがひとり、あぶらつぼをかかえてはいってきて、おんなじように、あぶらを買った。見たこともない、うつくしいむすめだ。漁師は、しばらく見とれとった。

あぶらを買ったむすめは、そんな漁師に、にこっと笑顔を見せると、すたすたあるきだした。道は、漁師とおなじ応仁寺の浜べのほうだ。

(おや、おらのうちのほうだが?)

漁師は首をかしげた。おんなじ浜のもんなら、知らんはずはない。だけど、こんなうつくしいむ



すめは、いままで見たことも、きいたこともない。漁師はよっぽど、よびとめてきいてみようとおもった。でも、そんなゆうきはなかった。

応仁寺のまえをすぎると、道はふたつにわかれとった。漁師のうちは左手の土手の上だ。むすめは右手にあるいていく。そっちへいっても、うちの一けんもない、みさきだ。でも、むすめは、うしろもむかんと、あるいていく。

(へんだ？　あんなほういって。)

漁師は、

「もし。」

と、声をかけた。とたんに、すうっと、むすめのすがたは、きえてしもうた。

「おや。」

漁師は、おもわず目をこすった。むすめがきえ

るとどうじに、みさきのあたりに、ぼおっと、赤い燈がともったのだ。それがゆらゆらっと、ゆれて見えた。

「おおっ、あんときの。」

漁師は、口をあけたまんま、ゆらゆらゆれる、みさきのさきっぽの赤い燈を見つめた。

(竜神さまは、よく若いむすめにすがたをかえなさるというが、あれは、やっぱり竜神さまが、おらをたすけてくれただな。)

漁師は地べたにしゃがみこむと、おもわず、むすめがきえていったほうへ両手をあわせた。

そのご、そのみさきを、だれいうともなく竜燈岬といい、油が崎とよぶようになった。いまでは、海岸線が南にくだって、このみさきのあたりも湖にかわっているが、油が淵として、その名をのこしている。

〈再話・寺沢正美〉

犬をかわない島〈伝説・知多郡〉



篠島は、三河湾の入り口にうかんでいる小さな島だ。この島には、むかしから、犬が一ぴきもおらん。それには、こんな話がつたわっている。

島の海べに八王子社という氏神さまがある。いまでもまい年、夏になると、〈おじんじきさま〉というおまつりがおこなわれ、この夜、八王子社の神さまたちが、島のまんなかの森にある神明神社まで、おわたりになるという。

ところが、ある年のおわたりのとき、島の犬たちが、神さまにほえついたり、ねぎさま（神主）にかみついたりしたそうな。それからというもの、くる日もくる日もしけがつづいて、漁にでることができず、島の人らはみんな、くらしにこまってしまった。そこで、島の庄屋が、

「どうか、しけがおさまりますように。どうか、漁がありますように。」

と、海のそばにある八王子社へ、おまいりにいった。

鳥居をくぐって、なにげなく境内を見まわした庄屋は、びっくりぎょうてん。いつも、おやしろのまえでむきあっとる石のこま犬が、おらんのじゃ。あちこちさがしまわると、おやしろのうらのやぶの中に、ころがっとるじゃあないか。

「なんちゅう、おとましい（もったいない）ことを。」

庄屋は、こま犬のどろをきれいにふきとって、うんこら、うんこらとはこんで、もとの台の上に、



すえておいた。

　ところが、あくる朝、庄屋さんがおまいりにきてみると、また、こま犬が台におらん。

「だれだ、こんなわるさをするやつは。とっつかまえて、ひどいめにあわせるぞ。」

　庄屋は、ぷりぷりおこりながら、さがしまわった。すると、また、こま犬は、きのうとおなじところにころがっとった。

　うんうんと、あせをながしてはこんでくると、それを台の上にすえてかえったが、つぎの朝も、またつぎの朝も、おなじように、こま犬はほうりだされとる。

　庄屋は、いたずらものをつかまえようとおもって、こま犬のそばで番をしたり、島の人たちにはなして、みんなで目をひからせたが、どうしても、だれのしわざか、わからなんだ。

　そのうちに、へんなうわさがながれはじめた。

「八王子社の神さまは、犬がおきらいなんだ。そいだで、こま犬をほうかりだしたりせるだよ。きっとそうだ。」

「おじんじきさまのとき、犬がほえたり、かみついたりしただものな。」

「このしけも、ひょっとすると、神さまのおいかりかもしれんぞ。この島ではもう、どこでも犬をかうのをやめよう。」

「うん、犬をかったらいかんぞ。」
信心ぶかい島の人たちは、かっていた犬を一ぴきのこらず、島からおいだしてしまった。
こま犬も、ちかくの医徳院という尼寺へうつした。
するとふしぎにも、あんなにつづいていたしけが、ぴたりと、おさまってしまった。島の人たちが、いさんで船をこぎだしていくと、びっくりするほどの大漁だった。
「やっぱり、犬のせいだったんじゃ。」
と、みんなでおやしろへいき、
「これから、けっして犬をかいませんから、どうか、島のみんなのくらしをおまもりください。」
と、いのったそうな。
医徳院へうつされたこま犬は、それからのち、もうどこへもいかんようなって、本堂のまえに、どっしりすわってござる。いまは保育園となった医徳院の庭で、あそびまわる子どもたちを、じっと見まもっとるようじゃ。

〈再話・山田もと〉

へこきのへえ七〈むかし話〉



むかしむかしのことよ、日間賀の島に、〈へこきのへえ七〉ってよばれとった、しょうもねえ男がおった。漁師だったが、さかなとることは、からっきしだめな男だった。でも、へえこかいたら、だれも、へえ七にかなうもんはおらなんだ。

へえちゅったって、そりゃ、ただ、ブウスカ、ブウクラこくだけなら、だれだってできるこんだが、

「さあ、いま、こいでみい。」

っていわれて、

「よっしゃ。」

と、すぐ、ブウスカ、ブウクラこけるやつは、そうはいねえ。また、おったにしても、そのブウスカ、ブウクラが、こっちのいうように、

「ええかあ、『ブウ、クララア。』って、やってみい。」

っていやあ、そのまんま「ブウ、クララア。」ってやりおるし、
「そんなら『ブブブブウ、ク、クララア。』って、やってみよやあ。」
っていやあ、そのまんま「ブブブブウ、ク、クララア。」ってやりおるようなやつは、日本じゅうさがしたって、そうは、ざらにおるもんじゃねえ。
だから、へえ七は、もうまい日、なんもしごとせんで、
「おら、そのうち旅にでて、へこきの他流試合やってよ、日本一の名人になったるで。」
などと、とろくさいことといっちゃあ、浜べにねっころがって、ブウスカ、ブウクラ、へこきのれんしゅうばっかりしとったそうな。
あるとき、へえ七は、年よりから〈にぎりべ三里〉っていうことばをきいた。
なんでも、くせえへえこいで、それをぎゅうっとてのひらににぎりしめて、三里（約十二キロメートル）の道をあるいても、そのまんま、くせえにおいがせにゃ、へこきの名人じゃねえっていうんじゃ。
へえ七は、（よし、おらが、そいつをやってみる。）とおもうて、ある日、島のもんを浜べにあつめて、
「おら、いまから〈にぎりべ三里〉に、ちょうせんするでえ。」
というと、みんなの目のまえで、べろっときたねえしりをだし、「ブスウ！　クラア！」と、そりゃ

あ、とてつもねえでっけえへえぶっこいたもんだ。そして、すかさずそいつを右手でぎゅうっとにぎりしめた。それから、

「おらがひとりでいってもよ、証人がおらにゃ、うそんなっちまう。すまんが仙三さん、けえってきたら、三日ただばたらきするで、ついてきてくりょや。」

と、いやがる網元の若衆の仙三さんをたのんで、船こいでもらって師崎へわたりおった。

師崎へあがったへえ七は、まるで、だいじなおそなえもんを、伊勢の大神宮さまへでももってくように、左手でぐうっとつつみこんで、片名、大井とあるき、鳶ケ崎へやってきた。もう島をでてから一里にはなる。しんぱいになって、そうっと右手をはなにちかづけた。

「うははあ！　におう、におう、とてつものう、くせえわあ。」

へえ七は、うれしくってたまらん。そばの仙三さんに、

「けえでくりょ。うそじゃねえぞ。」

と、こぶしをつきだしたが、

「あほっ、そんなとろいもん、かげるか！」

と、どなりつけられた。

　またあるきだして、矢梨、河和、時志をすぎていった。あんまりにおいをかぐと、においがきえち

まうような気がして、へえ七は、かぎたいのをがまんしながらあるいた。

やがて、布土をすぎ、笠松の海岸まできた。へえ七は、もう、がまんできなんだ。それで、もったいないとはおもうたが、そうっと右手をはなにくっつけてみた。

「くせえ!」

へえ七は、とびあがるほどうれしかった。

「におうぞ!　におうぞ!」

と、浜べをはしりまわってよろこんだ。

「仙三さん、おら、日本一のへこきだわい。まんだ、こげんにおうってこたあ、三里や四里はへっちゃらってこったあ。」

へえ七は、とくいになって、またあるきつづけた。浦島をすぎ、武豊の六貫山まできた。もうあ



るきつかれて、はらも、グウスカなりだした。
「もう、これだけあるきゃ、三里はとっくだ。」
へえ七はそういうと、松の根っこに、どさっと、しりもちこいた。
「におう、におう。ちっとも、かわっちゃいねえぞ。」
まるで、香でもかぐように、へえ七は、はなをくんくんならした。
「さあ仙三さん、証人だで、かいどくれ。」
へえ七は、ぱあっと手をひらいた。その手に、はなをちかづけた仙三さんは、
「ふへえっ！」
と、へんてこな声をあげて、おもわず顔をそむけた。
なんと、ひらいたてのひらのまん中に、ダイズぐらいの、まっ黒なもんがひとつ、つぶれもせんと、ぽつんとくっついておったそうな。
あっはっはっはっは、ばかげた、たわいもねえ話よなあ。

〈再話・寺沢正美〉

川につたわる話



やろか水
〈伝説・犬山市〉

いまでは犬山市になっとるが、むかし、鵜飼屋という村があった。その村の井関（田や畑に水をひくための水門）の番人に、善助さという、気のつよい人がすんでおった。

この善助さ、気がつよいばかりやのうて、じぶんの身のまわりのことを、なんでも、じまんするくせがあった。

ことに、木曽川のはげしいながれから水をとりいれるために、どっしりと、がんじょうにつくられた井関は、なにより、善助さのじまんのたね

じゃった。
「どうじゃ。これだけ、しっかりつくられた井関は、木曽川の上のほうにも、下のほうにもありゃせんぜ。どんなに木曽川があれたって、うちの井関にかぎっては、びくともするもんじゃねえ。」
善助さのじまん話をきくたびに、村の衆は青くなった。
「しっ！　しっ！　だまってくりょう、善助さ。そんなことが川の神さまにきこえて、ようし見ちょれ、なんてことになってあばれられたら、たいへんだ。それこそ、村じゅう水の底だぜ。」
「だいじょうぶだって。ていぼうも、きずきなおしたばかりだ。へん、あばれられるなら、あばれてみろって。」
「たのむ！　もう、じまん話は、やめてくりょうったら。」
そんな善助さのじまん話が、川神さまの耳にとどいたのかどうかわからんが、ある年、ふりつづく雨に、木曽川の水は赤くにごってふくれあがり、ゴウゴウとほえながら、しだいに、ていぼうの上までせまってきた。
村人はもう、生きたここちもなく、雨のやむのをまっとったが、雨は、いっこうにやむけはいもなく、いよいよはげしくふりつづいた。やがて、善助さのじまんの井関まで、まるで、なき声をたてているように、キイキイときしみはじめた。

村人は、ねるどころではなく、キイキイという井関のなき声に耳をかたむけておった。

「井関が、あんなにないちょるぞ。だいじょうぶやろうか。」

「ああ、いまやぶれるか、いまやぶれるか、気になって身がちぢむわ。」

しかし、善助さだけは強気じゃ。

「だいじょうぶ。井関がやぶれるなどということはありゃせん。しんぱいするな。」

といいきる。

それでも善助さは、やはり気になるのか、夜になると、井関を見にでかけた。

ちょうど雨はやんで、空ははれあがったが、川の水は、黒ぐろとふくれあがっておった。山のはからでた月が、きりさくような光をなげかけていて、なんともいえずぶきみやった。

そのとき、いままでキイキイとないていた井関が、とつぜんなきやんだ。そして、どこからともなく、

「やろか、やろか、やろか。」

という声がきこえてきた。

(おや?)

と、耳をすますと、その声は善助さをからかうように、ますます大きくきこえてくる。

「やろか、やろか。」



善助さは、日ごろのじまんもわすれて、おもわず立ちすくんだ。ドウドウととどろく川の水の音まで、はたとやんで、あたりは、へんにしーんとしとる。

声は、またきこえてきた。

「やろか。やろか。」

まるで善助さをあざわらうように、はっきりきこえる。

善助さは、あまりのおそろしさに、もうこれいじょう、だまっておられなんだ。はらの底からしぼりだすような声で、つい、へんじしてしもうた。

「よこさば、よこせ。」

善助さの声が、黒い川のおもてにとどいたかとおもうと、ゴオーッという、すさまじい音がきこえてきた。川がとつぜん、かべのようにもりあがってきた。

「あっ。」

さけんだときは、おそかった。かべのようにもりあがった川は、たちまち、ていぼうも井関ものりこし、うちやぶり、鵜飼屋いったいは、村も田も畑も、いっしゅんのうちに、きえてしまったげな。

〈再話・しかたしん〉

では陸をまいろう〈伝説・一宮市〉

むかし、木曽川をかよっていた、おもしろい船頭の話じゃ。

木曽川は長野県の山おくからながれでて、とちゅうで川はばをひろげながら岐阜県をとおり、愛知県へきて伊勢湾にながれこむ。まだ鉄道やトラックなどのなかったむかしのこと。この川はだいじな交通路で、上流のほうでつくられる炭、やきもの、石材など、みな船ではこばれとったもんや。

そのころ尾張藩では、木曽川にいくつかの船番所をおいて、のぼりくだりする船を、いちいちしらべておった。あやしい人間が藩内にはいってくるのをふせいだり、藩のひみつにしとるもんが、藩のそとにもれでていくのを、おさえるためじゃ。そして、船番所のきまりで、日がくれてからのちの船の通行は、いっさい禁じられとったそうな。

その船番所のひとつが、北方村（いまは一宮市）にあった。

ある夕方、そのあたりを、よほどいそいでいるとみえて、ながれにろをこいでくだってくる小船が



あった。それを見た船番所の役人は、水ぎわへはしりでて、よびとめた。
「これこれ、その船、本日はもう、とおること、まかりならぬ。」
「あのう、いそいでいますんで、おねがいいたしとうぞんじます。」
「もう本日は、刻限がすぎた。明朝までまてい。」
船頭は、いかにもこまったようすで、もみ手をしながら、頭をひくくさげた。
「あいすみませんでございます。しかし、どうしても今晩じゅうに、桑名までまいらねばなりませんので。」
「いや、だめじゃあ。」
「そこをひとつ、なんとか……。」
船頭は、ぺこぺこ頭をさげて、役人にたのみこんだ。だが役人は、
「いかようにたのまれようとも、日ぐれてのちは、この川を、小船一そうとおすことは、あいならん。きまりじゃ、きまりじゃ。」
と、いうことをきいてくれない。
「あのう。」
船頭は、下から役人の顔を見あげながら、おそるおそるきいた。



「あのう、きまりでは、川の上をとおってはいけませんので。」
「そうじゃ。」
「とおっていけないのは、川の上ですな。」
「くどいやつ。そうじゃともうしたろうが。」
役人（やくにん）がいうなり、

「それでは、ごめんなすって。」

船頭は、ぽーんと岸にとびあがると、

「えい、やっ。」

と、かけ声もろとも船をもちあげた。そして、頭上たかだかと船をかつぎあげると、川岸をのっし、のっしとあるきだしたもんだ。

小船とはいえ、おもさは二百キロもあろうか。

船頭はまっかな顔をして、のっし、のっしと、番所のまえをとおっていく。あっけにとられて、口をあけたまま見ている役人のまえをとおりすぎると、

「えいっ。」

と、船を川の中におろした。そして、人びとが、あれよ、あれよ、と見ているうちに、そのままさっさと、こぎくだっていってしまったそうな。

ほんに、えらい力もちの船頭がおったもんよのう。

〈再話・野田文子〉

かっぱのやけどみまい

〈伝説・南設楽郡〉



むかしむかし、南設楽郡作手村の大和田に稲吉庄右衛門応貞という庄屋がおった。

そのころ、みょう字を名のれる百姓はすくなかったが、庄右衛門は武士とおなじようにみょう字があって、刀もさしとった。剣術のうでまえもたいしたもんで、学問にもすぐれ、医者のこころえもあるという、めずらしい人だった。よその村むらにまでひょうばんで、

「神やほとけのまねならするが、大和田、庄右衛門さのまねできぬ。」

と、いわれとったそうだ。

その庄右衛門が、ある日、おくのざしきで本をよんどると、川下の道をいきおいよくはしってくる、馬のひづめの音がきこえてきた。

「ありゃあ、村の百姓馬じゃないな。」

すぐにそんな気がしたものの、そいじゃあだれがのっとるのだろうと、庄右衛門はなんだか、むなさわぎがした。
「よし、なにものか、見てやろう。」
そとにでてみると、見なれない黒馬が、風のようにはしってくるじゃないか。目をこらしてよくよく見ると、はだかの子どものようなものが、のっておる。
庄右衛門は、とっさに道のまんなかへはしりでると、両手をひろげて馬をとめた。
「なにものだ。どこへいく。わしは庄屋の庄右衛門じゃ。」
大きな声でさけぶと、馬の上の、つるつる頭にすこしばかりばらばらがみのはえた、おかしな動物は、うるさいやつという顔をして、
「おれは今馬のかっぱじゃ。島川さがやけどしたっちゅうで、みまいにいくとこじゃ。どけどけ。」
とこたえたと。しかし、かっぱといわれておどろくような庄右衛門じゃない。
「ははあ、おまえが、今馬の主といわれとるかっぱか。それにしても、島川淵のかっぱが、やけどしたとは、さいなんじゃのう。みまいにいくのなら、わしがつくった、やけどのくすりをやるから、もっていけ。」
といって、竹づつにいれたどろどろの黒いくすりをもってきてやった。それは、庄右衛門が山でとっ



てきた薬草の根をせんじて、あぶらでねりかためた、やけどの妙薬だった。

すると、今馬淵のかっぱは、しんみょうに、

「これはありがとうございます。では、いそぎますのでごめんなすって。」

と、ちょっとおじぎして、ぴしっと馬にむちをあてると、川上の島川淵のほうへはしりさっていったと。

「かっぱにも人の心がつうじるんだなあ。」

と、庄右衛門は見おくったが、いつも水の中におるかっぱが、なぜ、やけどなどしたのか、さっぱりがてんがいかなんだ。

ところが、それからなん日かすぎたある日、今馬淵のかっぱがやってきて、

「先日は、まことにおせわになりもうした。」

と、ていねいにおじぎしてから、じつはと、島川淵のかっぱがやけどしたわけをはなしたそうだ。

山にすむ人たちが、食事のために、川原でたいた、たきぎのもえくずがのこっとって、川原の石がかんかんにやけついとった。そこへとおりかかった島川淵のかっぱが、たべのこりをひろってたべようと、石に手をかけたからたまらん、じわじわっと大やけどをしたんじゃと。

そこまではなした今馬淵のかっぱは、あらたまって、

「あのときのくすりは、まことにありがとうござった。だが、庄屋どの。」

といいだした。

庄右衛門は、あとまできかずに、

「いや、わかった。村人の火のしまつのことであろう。これからは、よくとりしまるゆえ、ゆるしてやってくれ。」

と、おじぎして、あやまったと。すると、今馬は、にっこりとうなずいた。

「ときに今馬どの、島川淵のかっぱがやけどしたということが、どうして川下のおまえにまでわかったのかな。」

庄右衛門は、もうひとつ、ふしぎにおもっとったことをたずねた。すると、今馬は、あたりまえのことを、というように、

「川にすむさかなたちが、つぎつぎにつたえあいます、なにごとも。」

と、すましてこたえたそうだ。

「さてさて、きょうは、そなたに、いろいろおしえられたわい。」

庄右衛門がうなずいておるうちに、ふいっと、かっぱは、どこかへいってしまった。

「さすがは主といわれるかっぱ、こしゃくなやつよ。」

と、あとで人にはなすとき、庄右衛門は目をほそめて、そうつけたしたそうな。

〈再話・山本知都子〉

水ぬすびと〈伝説・犬山市〉



いまから六百年あまりむかし、濃尾平野の北のほうにある橋爪村（いまの犬山市）に、勘五郎という若い百姓が、目の見えない、年おいた母とふたりで、くらしておった。まずしいくらしではあったが、勘五郎は母親思いの、まじめなはたらきものやった。

ある年の夏のこと。いく日もいく日も日でりがつづいて、いつもは、ゆたかに田んぼをうるおしていた青木川のながれも、すっかりほそくなってしもうた。

青木川の水は、上流にちかい田から、じゅんじゅんにはいっていく。だから、上流にちかいほどいい田んぼで、金もちがもっておった。

びんぼうな勘五郎の田は、いちばん下のところにあった。川がかれてしまっては、とても水はまわってこん。

「こんな天気があと五日もつづきゃあ、おらの田んぼのイネは、ぜんぶかれちまう。ああ、水がほし

いのう。」
勘五郎は、からからにかわいた田をながめては、ためいきをついた。
このあたりの百姓にとって、米は、ただひとつのくらしのささえやった。その年にとれた米から領主への年貢をおさめ、のこりのわずかな米を売って、一年じゅうのくらしをたてにゃあならん。
「ほんのすこしでもいいで、水をわけてくだされ。」
おもいあまった勘五郎は、きんじょの田のもちぬしたちにたのんでみた。だが、どの百姓も水はおしい。だれも勘五郎のたのみなど、ききいれてはくれなんだ。
「ああ、雨さえふってくれたらなあ。」
勘五郎は、うらめしそうに天をあおいだ。
その夜、勘五郎は、田のことがしんぱいでねむれなんだ。かたわらの母親に気づかれんように、そうっと、むしろのふとんをぬけだすと、ふらふらと、じぶんの田んぼまででかけていった。
月のない、まっくらな夜やった。あたりには人かげも見えん。勘五郎は、ふとおもった。
(いまなら、だれも見とらん。いっちょ、となりの田から水をひいてやろうか。)
(いやいや、それはいかん。水をぬすめば、村のおきてをやぶることになるで……。)
勘五郎は、田のまわりを、うろうろとあるきまわった。じぶんのうえたイネが、葉をすぼめ、ぐっ

たりと頭をたれているのが、夜目にもはっきりとわかる。イネのかなしげなうめき声がきこえてくるようやった。

（これじゃ、あしたまで、もつかどうかもわからん。よしっ！）

勘五郎は、はんぶんむちゅうで、となりの田とのさかいのあぜに手をかけた。そして、目をつむると、

「えいっ！」

とばかりに、おもいきって、あぜをくずした。

こわされたあぜから、となりの田の水がちょろちょろと、勘五郎の田へながれてきた。水をすいこんだイネは、やがて頭をぴんともちあげ、生気をとりもどした。田にたまった水には、星がうつり、ちかちかとひかっている。

しかし、となりの田の水は、たちまちへってしもうた。気のせいか、イネも、ぐったりしてきたようだ。

「ああ、とうとうやってしもうた。」

勘五郎は気がぬけたように、へたへたとあぜ道にすわりこんで、ぼんやりと田の水にうつった星を見つめとった。

夜があけると、村は大さわぎになった。



こわされたあぜを見れば、だれのしわざかはひと目でわかる。村人は勘五郎をよびつけると、

「この水ぬすっとめ、おきてをやぶるとはなにごとだ。」

と、口ぐちにののしり、足でけり、くわでなぐりつけた。

水をとられた百姓のいかりは、まことにすさまじいものだ。勘五郎はぐったりとして、とうとう、そのまま死んでしもうた。死体は勘五郎の田にうめられた。

その夜、目の見えん勘五郎の母親は、家の戸口に立って、くらくなってもかえってこんむすこの名まえを、いつまでもよびつづけておった。

「勘五郎やあい。はよう、かえっとくれよう。どこぞへいったんじゃあーい。」

そのかなしい声をきくと、村人は、いまさら母親に、ほんとうのことをおしえてやることはできなんだ。

それからというもの、母親は、くる日もくる日も、戸口に立っては、勘五郎のかえりをまっておった。しかし、死んじまった勘五郎が、かえってくるはずはないわなも。

だれも、せわをしてくれるもんのなくなった母親は、それからまもなく、

「勘五郎や、勘五郎や。」

と、むすこの名をよびつづけながら、とうとう死んでしもうた。そして、村人らの手によって、勘五郎の死体にならべてうずめられた。

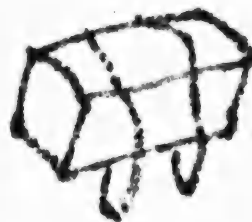
そのことがあってからのち、なん人かの村人が、勘五郎の田の上をとびまわる、ふたつのあやしい火の玉を見たという。また、夏になるときまって、青木川がはんらんするようになった。

きみわるがった村人らが、ずっとのちになって、大山徳寺の大陽おしょうにたのんで、ふたりの霊をなぐさめてもらったところ、ようやく、たたりはおさまったという。

その青木川は、いまでは、木曽川から水をとりいれて、ゆたかな用水になっている。

〈再話・野田文子〉

子だが橋〈伝説・宝飯郡〉



松なみ木のある、むかしの東海道を、豊橋のほうから小坂井の莵足神社のちかくまでくると、右がわに、〈子だが橋〉とかかれた石碑がたっている。

むかし、そのちかくに小さな橋があって、その橋は莵足神社の風まつりに、だいじなやくめをつとめておったそうな。

それというのが、風まつりには、風神に人身御供（いけにえとして神にそなえられる人）をささげて、その年、大風がふかんよう、豊作になるよう、いのるならわしがあったんじゃ。その人身御供は、まつりの朝、その橋をいちばんさきにわたった、若い女の人がなるきまりじゃった。

そのいけにえになる女をとらえる役は、まい年、村人の中から、えらびだされることになっとって、その年は、平井村の八兵衛のばんだった。

「ああ、やくめとはいいえ、いやだなあ。」

風まつりの朝、くらいうちにおきだした八兵衛は、井戸水でからだをあらいきよめるあいだも、どうにも気がすすまなんだ。
そいでも、もし人身御供をさしださんで、神さまをおこらせでもしたら、大風がふいて、米がとれんだり、病気がはやったりするかもしれん。そうなったら、えらいこった。
八兵衛は、ようよう心をきめると、朝もやの中を、村はずれの橋までやってきた。
もやが、すっぽりあたりをおおっとって、見とおしはわるかったが、わが身をかくすには、かえってつごうがええ。
どこのだれが、きょうのいけにえになるのだろう。その女の人の親は、あとでどんなにか、かなしむことだろう。それなのに、この手で女の人をつかまえにゃあならんとは……。
おもいまよって、にげだしたくなるのを、じぶんでしかりつけ、しかりつけ、土手の下でしゃがんでまっとるうちに、あたりはだんだん、あかるくなっていった。
それにつれて、もやもうすれかけたので、橋のむこうへ目をむけると、ちょうど、とおくからくる人かげらしいものが見えた。
やってくるのは女の人のようだった。目をこらして見ると、まだ若い女で、朝の風に、ほつれたかみをかきあげるしぐさもやさしい。

（ああ、あの若い女の人は、なんも知らんと、ふびんなことよ。）
と、八兵衛の心は、しきりにまよったが、
（いや、しかたがない。村のために、神さまにささげるいけにえじゃ。やくめだで、ゆるしてくれ。）
と、心をきめて立ちあがった。
ところが、ちかづく女の人を、よくよく見さだめた八兵衛は、おもわず、「あっ。」と、声をおしころした。
なんと、その若い女は、となり村へよめにいった、わがむすめじゃないか。
八兵衛は、気もくるわんばかり。あまりのことに、声もでん。そのうちに、むすめは、もう橋のすぐそばまできてしまった。
橋をわたらんうちに、なんとかひきかえさせんと、この手でとらえにゃあならん。
八兵衛は、むすめにむかって、
「ひけ、ひきかえせ。」
と、手まねであいずした。
父親に気づいたむすめは、そいでも、それを、手まねきしとるのだとおもったらしい。
（あれ、おとっつあんがむかえにおいでた。）

と、にっこりして、いっそう足をはやめ、橋にさしかかる。
（きてはいかん、わたってはいかん。）
しかし、口にはだせん。八兵衛は、ただもう、まっさおになって立ちすくんどった。
むすめは、なんにも知らずに、橋をわたりきって、
「おひさしゅうございます、おとっつあん。」
と、かけよってきた。
（ああ、もうだめじゃ。）
八兵衛は、ただ、くちびるをわなわなとふるわせながら、むすめを見つめるばかりだった。
わがむすめを、わが手で、どうしてとらえられよう。にがしたい、このままにげてくれといいたい。
だが、もし、にがしちまったら、村の人は見とらんでも、神さまにはわかるだろう。
神さまがおこり、村にさいなんがふりかかってきたら、村のみんなにもうしわけがたたん。
（ああ、わが子だが、しかたがない。）
八兵衛は、気をとりなおして、ふるえながら、むすめにちかづいた。
むすめも、父親のまっさおな顔と、おかしなそぶりに、やっと気がついて、顔色をかえた。
「あれ、おとっつあん、どうなされた。」

とたずねても、父親は、おしだまったままじゃ。ふしぎにおもって、かたわらを見ると、ひつ（はこのようなもの）が目についた。まい年、風まつりには、このひつにいけにえをいれるのを、むすめも知っとった。

「あっ、それでは、わたしがいけにえに……。」

はっと気がついたむすめは、手をあわせて、どうかゆるしてくだされと、にげかける。

そいでも、八兵衛は、心をおににして、むちゅうでおいすがり、むりにとらえてしまった。

むすめは、しきりにもがきながら、うらめしそうに父親を見あげておる。八兵衛は、血をはく思いで、むすめにいったと。

「ちょうどとおりかかったのが、おまえの身のさだめ、運命とあきらめてくれ。のう、どうか、いけにえになって、風神の気もちをやわらげ、村の豊作をいのってくれ。」

むすめはもう、ことばもなく、うなだれて、ぶるぶると、身をふるわせておった。

むりににげれば、父親が村の人にせめられる。このままおると、いけにえにされてしまう。むすめは、とほうにくれて、その場になきくずれた。

そのうちにも、だんだん、ときはすぎていく。ぐずぐずしとると、風まつりを見にくる人びとがやってくる。



「もう、しかたがない。」

と、八兵衛(はちべえ)は、たましいのない人のように、ふらふらになりながら、ないとるむすめをひつにいれ、それをしょって村へかえった。

そして、むすめのはいったひつは、その日、菟足神社(うたりじんじゃ)の風神(ふうじん)さまにささげられた。ひつの中からもれとった、かなしいなき声(ごえ)も、しだいに、ひくいいのり声(ごえ)にかわり、やがては、それさえもきこえんようになったそうだ。

あとで、この話(はなし)をつたえきいた村の人たちは、親子(おやこ)をあわれんで、それからというもの、だれいうとなく、その小橋(こばし)を〈子(こ)だが橋(ばし)〉とよぶようになったそうな。

〈再話(さいわ)・山本知都子(やまもとちずこ)〉

村や町につたわる話



つと穂でみのれ

〈伝説・南設楽郡〉

ひろい、ひろい日吉原（宝飯郡一ノ宮町）のはしに、梵地ケ池という池がある。

むかし、この梵地ケ池のちかくに、成信という、ひとりものの百姓がすんでおった。成信は、はたらきもので、心のやさしい若者だった。

ある、さむい夜のこと。本宮山からふきおろす風の音をききながら、成信は、いろりにたきぎをくべておった。そのとき、

「ごめんください、ごめんください。」

と、そとで戸をたたく音がした。

「はて、いまじぶん……。」
成信が戸をあけると、うつくしいむすめがひとり、立っておった。
「道にまよって、こまっています。どうか、ひと晩とめてくだされ。」
さむさとつかれで、よわりはてたむすめのようすを見ると、成信は、かわいそうにおもって、
「見たとおりのあばら家じゃが、そとでねるよりは、ええだらあ。」
といって、家にいれ、火のそばにすわらせて、おかゆなどつくってやったと。
ところが、あくる日になると、むすめは、
「もう一日、やすませてくだされ。」
といって、一日じゅう、成信の手つだいをしてすごした。そのつぎの日も、また、
「もう一日、おいてくだされ。なんでも、お手つだいしますに。」
と、朝はやくからおきだして、ごはんのしたくや、そうじやと、こまめに、はたらきまわる。
こうして、むすめは、とうとう成信の家にいついてしまった。成信も、このよくはたらく、うつくしいむすめが、だんだんすきになって、いつか、ふたりは、めおとになった。
そのうち、ふたりのあいだには、かわいらしい男の子が生まれた。森目と名づけ、一家は、とてもしあわせだった。

「成信とこのよめは、ようはたらく。」
「しんせつで、ほんとに、ええよめごじゃ。」
「それにしても、あんなうつくしいよめが、どこからきたずら。」
村人たちは、うわさしあった。成信も、なんかのおりに、一ど、きいたことがあった。
「おまえ、どこの生まれだや。」
でも、女房は、だまったまま、しずかにわらっているだけだった。
「ええだ、ええだ。どこで生まれようが、人間はみなおんなじだで。」
成信は、むりにきこうとはせなんだ。むりにきくと、いまのしあわせが、こわれそうな気がしたもんでな。
森目が五つになった春のことだ。この一ノ宮郷に、ひどい熱病がはやりだした。日ごろ、じょうぶだった森目も、このはやりやまいにかかってしまった。
成信夫婦は、おろおろと、つきっきりで、かんびょうした。
森目が病気になったのは、田をすきおこし、水をはり、しろかきをして、田うえをはじめようという、一年でいちばんいそがしいときだった。
しかし、成信の家では、森目のかんびょうに手をとられて、田んぼしごとができん。きんじょじゅ



うが田うえをおわったというのに、成信の田だけ、草ぼうぼうじゃ。

成信は、気がきでなかった。いま、うえつけをせにゃあ、ことしの米はとれん。そうなりゃあ、一家そろって、うえ死にじゃ。おもいあまった成信は、ある晩、ぽつんとつぶやいた。

「あしたは、なんとしてでも、田うえのしたくをせずばなあ。」

それをきいた女房は、ただ、だまってうつむいておった。

あくる朝、成信は、森目のことを気にかけながらも、おもいきって田んぼへでかけた。ところが、じぶんの田んぼへいって、びっくりぎょうてんしただ。

草がいっぱいはえておるとおもっとった田んぼ

が、ちゃんとすきおこされ、水がはられ、田うえまですんどるじゃあないか。

「いったい、だれがやってくれたんだろう。もしや、しんせつな村の衆でも……。」

だが、それにしてはおかしい。よく見ると、うえられたなえは、どれもこれも、さかさまじゃ。どうにも、わけがわからなくなった成信は、家へとんでかえると、戸口から女房へ、

「おいおい、田うえが……。」

といいかけたが、そこでおもわず立ちすくんでしまった。

森目のよこにねておる女房のふとんのすそから、白い、ふさふさしたキツネのしっぽが、はみだしとるではないか。

「ああっ、おまえは……。」

その声で、女房も、びっくりして目をさました。

「ああ、見て、見てしまったんだね。」

ひと夜のうちに、すきおこしから田うえまでやってしまった女房は、つかれはてて、つい、じぶんの正体をわすれて、ねむりこけとったんだなあ。

「ああ、正体を見られてしまったのでは、もう、おわかれするしかありません。ながいあいだ、ほんとうにありがとうございました。心のこりは森目のこと。森目を、どうかおねがいいたします。」

いうなり、そとへとびだしていった。
成信は、あとをおった。女房は、じぶんが田うえをした田んぼまでくると、かなしげな声をふりしぼって、
「世の中よかれ、わが子に食わしょ。検見をのがしょ。つと穂でみのれ。」
と、三かいさけぶようにうたったと。すると、ふしぎなことに、さかさだったなえが、いっせいに、まっすぐうえかわってしまった。
女房は、あとをおってきた成信に、
「森目のこと、よくよくたのみます。」
というと、ふいてきた風とともに、さあっと、クズの葉のしげみの中へ、きえていってしまった。
成信は、ぼうぜんとして、女房のきえていったあたりのクズの葉が、風に葉うらをかえしてざわめいているのを、いつまでも見ておった。
その年の秋、成信の田には、イネの穂がでなんだ。年貢をきめる検見の役人がやってきたが、そのイネを見て、
「ふうん、穂がでとらんイネでは、とても、みのりはあるまい。」
と見のがしてくれたんで、その年の成信の田は、年貢ごめん（年貢をおさめなくてもよいこと）になっ



たと。

けれど、検見がおわると、ふしぎなことに、その葉につつまれたつとの中で、いつのまにか、米はみごとにみのっており、おもいがけない豊作になった。

キツネの女房が、わかれぎわにさけんだ歌で、

「わが子にたべさせられるよう、イネの穂がでないで、役人の目をのがれ、あとでみのってほしい。」

と、ねがったとおりになったんや。

森目は、そののち、大きくなると、みやこへでて、りっぱな人になったという。

梵地ケ池の下のほうには、いまも、成信の田というのがある。ちかくの小川には、成信の橋とよばれる小さい土橋ものこっとる。

〈再話・山田もと〉

やっとべえとてんぐ

〈伝説・西尾市〉



むかし、西尾の城下に〈やっとべえ〉という、さむらいがおったそうな。ほんとの名は八度兵衛っていうのやが、剣術をするとき、「やっとなあ！」と、とてつもないでっかい気あいをかけるので、みんながそうよぶようになってしもうた。

そのやっとべえだが、剣術が、とてもつよかった。それで、いつも、

「おれは、日本一のごうけつじゃ。」

と、じまんしておったと。

ところでそのころ、鶴城町の伊文神社の森に、てんぐどもがぎょうさん、すみかをつくっとった。だれも見たことはないが、大将の大てんぐは、身のたけ七尺（約二メートル十センチ）もあるという、とてつもないやつで、どこでも自由にとびまわる神通力をもっとるという、うわさだった。

月のでた夜などは、そういうてんぐどもが森の中に車座になって、どこからかかすめてきた酒や、

ニワトリをくらって、それはもうにぎやかに、どんじゃか、ぎゃあすか、さわぎよった。そのやかましいことったら、伊文神社のちかくのもんたちは、ねるにもねられなんだほどじゃ。
それだけじゃない。ときどきは、通行人をおどしたり、子どもをかっさらって、それを人じちに、くいもんや、のみもんをねだったり、わるさをくりかえしとった。
これには町のものたちも、頭にきて、なんどもお城のお殿さまに、「なんとかしてくださりませ。」と、たのみにいったと。お殿さまも、ほうってはおけなくなって、
「伊文神社のてんぐどもを、たいじせよ。」
と、けらいたちにいいつけた。
だが、けらいたちが、やりや刀や弓矢をもって森にでかけると、てんぐどもは、ちゃんと、やってくるのを知っとって、おとしあなをつくってつきおとしたり、木のてっぺんにのぼって、でっかい石をなげつけたり、しょうべんをひっかけたりするのだった。
てんぐのしょうべんというのは、そりゃくさいもんで、ひっかぶったもんでなけりゃわからんが、ちょっとやそっとのにおいじゃない。へどのでそうな青っくさいにおいで、三日三晩はきえなんだ。
そんなことで、いくらお殿さまの命令でも、だれも、てんぐたいじにでかけるものは、おらんようになってしもうた。

さて、夏(なつ)のある日のこと。やっとべえは、ふんどしひとつで、えんがわにねそべって酒(さけ)をのんでおった。すると、そこへ、てんぐの大将(たいしょう)がやってきて、

「やい、やっとべえていうのは、おまえか。うわさにきくと、剣術(けんじゅつ)がうまいといばっとるそうだが、どうじゃ、おれとしょうぶせえ。」

という。

やっとべえは、よろこんでとびおきた。てんぐなら、あいてにとって不足(ふそく)はない。

「ようし、なまいきなてんぐめ、さあこい！」

と、木刀(ぼくとう)をもって庭(にわ)へとびおりた。てんぐは、身(み)のたけほどのつえをふりあげた。

「おうーっ！」

「やあーっ！」

と、やっとべえとてんぐは、ありったけの力(ちから)をだしてたたかった。小半時(こはんとき)（約(やく)一時間(じかん)）もたたかった。

どっちもどっちでつよかった。

（ここでまけちゃ、日本一の名がすたる。）

やっとべえは、さいごの力(ちから)をふりしぼった。

「やっとなあ！」



松の木がぶるぶるっとふるえた。と、そのとたんやった。

「ブッーン！」

と音がしたとおもったら、やっとべえのふんどしがきれて、中身がぶらんとあらわれた。

それを見たてんぐは、びっくりぎょうてんした。びっくりしたとたん、神通力がとけちまった。

「まいったあ！」

と、つえをほかりなげてにげてった。やっとべえは、それをひろうと、なやにほかりこんだ。

その夜、やっとべえがねとると、雨戸をドンドンたたくもんがおる。おきてみたら昼まのてんぐがおって、

「おれのつえをかえせ。それがないと神通力がなくなる。」



という。それで、やっとべえが、

「ただじゃかえせん。かわりのもんをおいてけ。」

というた。

すると、

「それじゃ、てんぐのうちわをおいてくが、わしからもらったなんぞというな。いうと、えらいさいなんがおきるぞ。」

というて、はねうちわをおいてきえちまった。

それから十日ばかりすぎた日だ。

やっとべえは、百石町の友だちの家によばれて、酒もりをしとった。ついじまん話をして、てんぐのうちわのことをはなしてしもうた。

すると、そのときだ。

「火事だあ！　火事だあ！」

おもてで、人のさわぐ声がする。

そとへでてみると、火事は、やっとべえのうちのちかくの盛厳寺というお寺のほうじゃ。やっとべえは、あわててはしった。

盛厳寺まできたとき、どっからか「ケッケッケッケー。」って、かんだかい、てんぐのわらい声がきこえた。

「あっ、しもうた。人にはしゃべらんという、てんぐとのやくそくやった。」

やっとべえは、はっと気がついたが、もうおそい。盛厳寺のうらにまわってみると、じぶんの家は、みごとなまるやけじゃ。

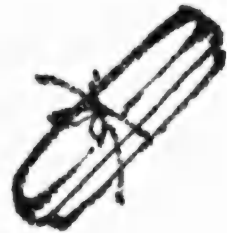
やっとべえは、へなへなっとしりもちついて、

「やっとべえ、まけもうしたあ！」

と、さけんだそうな。

〈再話・寺沢正美〉

まるかの人星〈現代民話・安城市〉



明治のはじめごろのこと。
安城の東のほうの古井という村に、保福寺っていう、ちんこい寺があったげな。保福寺は、まるい丘の上にたっとった。このお寺に、まるい顔の、七つぐらいのこぞうさんがおったと。
まるい丘の寺におる、まるい顔のかわいいこぞうさんだったで、村のものは、
「まるかあ、まるかあ。」
ってよんで、かわいがっとった。
でも、そのまるかは、たいへんなわんぱくこぞうだった。
水をくませれば、わざとそこらじゅうにぶちまけるし、つかいにだせば、あそびほうけていつまでもかえってこん。おしょうさんも、ほとほと、手をやいておった。
ある日、保福寺のおしょうさんは、まるかにつかいをたのんだ。となり村の蓮華寺まで、文箱にい

れた手紙をもっていくことだ。

おしょうさんは、

「だいじな手紙だで、道草くうんでねえぞ。」

と、くどいくらいねんをおして、まるかをだしたんだと。

古井の村はずれに、こんもりした丘があった。丘のてっぺんに、たかい杉の木が一本立っとった。それで、村のものは、一本杉の丘というとった。

その一本杉の根もとまでやってきたとき、まるかのはらの中のわんぱく虫が、むくむくと、さわぎだした。

まだ日もたかいし、蓮華寺までは、もうあとひとっぱしりだ。

「ちょっとだけなら、ええだらあ。」

まるかは、だいじな文箱をほうりだすと、ふとい一本杉にしがみついて、よじのぼった。からだじゅうが、すりきずだらけになった。あたらしいすみぞめのころもが、ビリーッとやぶれた。でも、たかい杉の木のてっぺんにのぼった気分は、なんともいえなんだ。それで、つい、うかうかと、夕方まで木の上であそんでしもうた。

まっかなお日さまが、西の山にしずみはじめて、まるかはあわてた。

いそいで木からすべりおりると、文箱をさがした。ところが、どうしちまったのか、いくらさがしても文箱は見あたらん。

お日さまは、あっというまにしずんで、もう、あたりは、まっくら。

まるかはこまった。文箱をなくしては、寺へもかえれない。杉の木の根もとにうずくまると、両ひざのあいだに顔をつっこんで、ないておった。

いっぽう、おしょうさんは、いくらまっても、まるかがかえってこんので、しんぱいになってきた。そとはもう、とっぷりと日がくれとる。もしや、谷川にでもおちたんじゃあるまいか、山犬にでもおそわれたんじゃないかと、いてもたってもおられん。

とうとう、ちょうちんをともして、さがしにでかけた。そして、ようやく一本杉のところへくると、そこの根もとでないているまるかを見つけた。

あれほどかたくいいつけたのに、あそびほうけてたいせつな文箱をなくしてしまい、それも知らさんでないているのだとわかって、おしょうさんは、すっかり、はらをたてた。

「この、わんぱくのなまけもののめ。」

さんざんしんぱいさせられただけに、おしょうさんは、かんかんになった。おしょうさんは、フジづるで、まるかの手足をしばり、一本杉の根もとにころがすと、そのまま寺にかえってしもうた。

一どはこらしておかんことには、まるかのわんぱくや、あそびぐせはなおるまい。おしょうさんは、そうおもったのだ。

その夜、まるかは、山じゅうからあつまってくるやぶかに、からだじゅうをさされた。でも、手足をしばられとっては、どうすることもできん。どんなにからだをくねらせても、しつこいやぶかは、にげようともせん。

「おしょうさまあ、おしょうさまあ。」

ひと晩じゅう、まるかはよびつづけた。

そして、とうとう、からだじゅうまっかになるまで、やぶかにさされて死んでしもうた。

あくる朝、まるかをつれもどしにいったおしょうさんは、びっくりした。

「ああ、かわいそうなことをした。わしのしおきがひどすぎた。」

と、おしょうさんは心からこうかいした。そして、おもい病気になって、ながいあいだ、ねこんでしまったそうな。

こうして、まるかが死んで、しばらくたってからのこと。

まるかのなかよしだった友だちが、ある晩、ホタルをとりにでかけた。

すると、田んぼのむこうのほうに、ホタルの光にまじって、ふわふわ、ふわふわ、赤いちょうちん

がゆれている。よく見ると、保福寺のほうから蓮華寺のほうへむかっていく。
（だれか、ちょうちんさげてあるいとるな。だけど、だれだらあ？）
そうおもって、その子は、
「おーい、だれだあ、どこいくだあ。」
って、どなった。すると、
「れ、ん、げ、じ……。」
という声がかえってきた。
「れんげじ……、なにしにだあ。」
「ふ、ば、こ、もって……。」
小さな声が、ぽつんと、こたえた。それは、たしかにききおぼえのある、まるかの声。
その子は、いちどに、からだじゅうがこおりついたように、きゅーんとなった。そして、こしのぬけたネコのように、はいつくばって、やっとの思いで、うちへかえった。
それからのちも、まるかのちょうちんのあかりを見た人は、いく人もいたという。
やがて、年月がたって、安城の町もかわり、保福寺のあたりにも、たくさんの家がたった。
ある夏のむしあつい晩、保福寺にちかい農家の庭で、おかみさんが行水をしとった。

するとﾞ、まっくらな夜道を、保福寺のほうから、ちょうちんをともして、だれかがやってきた。そして、おかみさんのまえでとまった。

「おばんわ。」

「……。」

「なんか、ようかえ。」

「……。」

「どこからきたえ。」

「ほ、う、ふ、く、じ……。」

はじめて、へんじをした。でも、ちょうちんのあかりは見えるが、人のすがたは見えん。

「どこへ、いかっせるえ？」

「れ、ん、げ、じ……。」

そのことばに、おかみさんは、はっとした。

「おお、おまえが、あのまるかかあ。」

「……。」

おかみさんのせすじを、つめたいものがながれた。でも、おかみさんはやさしい人だった。ちょっ



とはこわかったが、
「どうもせやへんで、ゆっくりあそんでいかっせ。」
って、いうてやった。
すると、おかみさんのまわりを、ホオズキちょうちんぐらいの火が、ふわふわまわった。なんどもまわった。
はじめは、がまんしとったおかみさんも、だんだん、きみがわるくなった。
とうとうしんぼうできなくなって、おもわず、
「ひいーっ。」
って、声をあげた。
とたんに、その火は、すうっと空にあがっていき、まっすぐに蓮華寺のほうへととんでいったそうな。

それからのちも、むしあつい夏(なつ)の晩(ばん)になると、保福寺(ほうふくじ)から蓮華寺(れんげじ)にむかってとんでいく火(ひ)の玉(たま)を村の人たちは、ときどき見た。そして、だれいうとなく、〈まるかの人星(ひとぼし)〉って、いうようになったそうな。

〈再話(さいわ)・寺沢美智恵(てらさわみちえ)〉

酒のみタヌキののたぼうず
〈伝説・半田市〉



半田といえば、むかしから、酒づくりでゆうめいな町や。大きな、くらい酒蔵には、杉の木のたるがならんで、うまそうな酒のにおいが、町なかまでながれてきよるのや。

この杉の酒だるを千石船につんで、江戸まではこぶと、船が波にたぷたぷゆられて、ちょうどうまいぐあいに、たるのかおりが酒にまわり、おいしい、いい酒になったということや。

さて、そのころの半田には、竹やぶが多かった。ふかい竹やぶの中には、たいてい、タヌキがすんどって、人間にばけては、町の中に、ひょこひょこでてきよる。

そのタヌキの中でも、いちばん年よりで、いちばんかしこいタヌキを、町の人たちは、いつか〈のたぼうず〉と名づけておった。のたぼうずが人間にばけたときは、かならず、〈でんち〉という白黒だんだらもようの、みじかいそでなしばおりをきとったんで、すぐわかったもんや。

さて、のたぼうずは、こまったことに、大の酒ずきやった。

まい年春さき、おいしい酒ができるころになると、やつは酒蔵にしのびこみ、できたてのおいしい酒をのんでいく。

「のたぼうずがでたぞーっ。」

と、酒六（酒づくりの職人のこと）たちは、そのたびに、のたぼうずをおっかけるんやが、すばやく竹やぶの中ににげこんじまうもんで、どうしてもつかまらん。

「くそっ、またやられたか。」

酒六たちは、おたがいに顔を見あわせては、くやしがる。おっかけっこじゃ、タヌキにはかなわんでのう。

「やつに、しぼりたての、うんとつよい酒をのませて、よっぱらわせたらどうじゃろう。よっぱらって、ふらふらしとるところで、とっつかまえるんじゃ。」

酒六のひとりが、いうた。

「おお、それはおもしろいぞ。」

みんなも、あいづちをうった。

つぎの日、のたぼうずは、おとくいのでんちをはおって、また、こっそり、蔵の中へすべりこんで



きおった。みんなは、気づいても、知らん顔だ。

わざと、しぼりたてのつよい酒のはいったたるからはなれたところで、けんめいにしごとをしているふりをしとった。

のたぼうずは、大よろこびだ。

三メートルいじょうもある大きなたるによじのぼると、しぼりたての酒を、ぐいぐいのみはじめた。それを見すますと、みんなはそっと、そのたるをとりかこんだ。

のみたいだけのんだのたぼうずは、たるからおりようとしたが、なにせ、つよい酒をはらいっぱいのんだんや。足もとがくるって、ドシンと土間におっこちてしもうた。

いつものように、すばやく立ちあがろうとしたが、酒ですっかり目がまわって、立ちあがれん。

「それ！」
かけよった酒六たちに、あっさりつかまってしもうた。
「さあ、どうしようか。ころして、タヌキじるにでもせえか。」
「いや、見せもの小屋に売りとばそう。」
酒六たちはふざけて、大声でいいかわす。
つかまったのたぼうずは、もう酒のよいも、どこへやら。ばけるのもわすれて、どうかたすけてくれと、けんめいに頭をさげる。おとくいのでんちも、くしゃくしゃじゃ。
目になみだまでうかべているのたぼうずを見て、酒六たちも、かわいそうになってきた。
「こら、もう酒蔵をあらしにきちゃ、いかんぞ。二どとやってこねえなら、ゆるしてやる。」
いちばん年よりの酒六がそういうと、のたぼうずは、頭を土間にすりつけるようにおじぎをして、大いそぎで竹やぶのほうににげていったげな。

のたぼうずは、それきり酒蔵にはでてこんようになった。
こなければこないで、なんとなく、酒六たちも、ものたりん。
酒のしこみ歌をうたっとるときなんぞ、ちらっと白黒だんだらのでんちが、目のはしをかすめたよ

うな気がすることがある。
「あっ、きた。」
みんな、おもわず目をこらすが、だれもおらん。
「やれやれ、気のせいか。」
「竹やぶもへってきたし、どこかへひっこしちまったんだろうよ。」
などとうわさしあって、さびしげな目つきになる。
半田の酒をつんで江戸へむかう千石船も、明治になってからは蒸気船にかわり、そのせいか、つくり酒屋も、めっきりとへってしもうた。
それといっしょに、タヌキがばけてでたいう話も、めったにきかれんようになったなあ。
〈再話・しかたしん〉



コレラと巡査〈現代民話・渥美郡〉

コレラっていえばな、巡査にでもとりつくおそろしいやまいだに。なにしろ、うつることがはやくて、うつったがさいご、たかい熱がでるわ、はくわ、くだるわで、死んでしまうだげえな。

むかしは、すぐ死んでしまうで、コロリだてって、えらくおそろしがられてただよ。なにしろ、コレラにようきくくすりてや、なんにもないころのことだでなあ。

そのコレラが、明治十七年に、大阪にでたただとよ。あれよあれよといっとるまに、この愛知県にもうつってきた。海につきでとる渥美郡の奥郡いったいは、ひどいもんだったげえな。

「川ぐろの源治さとこじゃあ、まんだいきがあるうちに、かんおけへいれちゃったげえな。」

「どうせたすからんだで、はや死んでもらったほうが村のためだに。」

「山ぐろの五平さとこのよめさも、コレラらしいで、毒をのませたげえな。」

「村はずれに小屋つくって、かかったもんはみな、そこへほうりこめって、お上から、おふれがでた



そうな。」
そんなひそひそ話で、村じゅうがさっきだっておったと。
けいさつもほうってはおけん。おまえはあっちいいけ、おまえはこっちいいけと、巡査を消毒だの、見まわりだのにさしむけた。
その巡査のひとりに、江崎邦助さんという若い巡査がおった。その年に額田のほうから、渥美の田原へかわってきたばっかりでの、まあ、かわったとたんにコレラにぶつかったわけだに。
この江崎巡査も、署長さんの命令で奥郡を見まわることになった。なんでも、堀切村の彦左衛門のおっかさんの、ウメていう人がコレラだという。それっというので堀切村へかけつけると、どうだ。
けっそうかえた彦左衛門がとんでてて、大手をひろげ、
「おらのうちで、コレラやなんかだすもんか、かえってくれ。」
と、どなる。それればっかりじゃあない。巡査がきたというので、きんじょのもんが、かまやら竹やりやらをもちだして、
「おまえら、毒をまくっていうじゃあないか。まめなもん（げんきな人）まで、ころす気か。」
「かえれ、かえれ。」
「人ごろし。」

てって、わめきたてるだ。病人は、なんどのくらやみにかくして、なにしろ、一歩も家の中へはいれんかまえだ。むかしの人は病気のことを、なんにも知らんだだなあ。

そいでも、はい、さようですかてって、かえるわけにはいかんもんなあ。江崎巡査は消毒の医者とふたりして、口すっぱくして、コレラのおそろしいことをいってきかせ、やっと消毒をすませたのは三日めだったと。ばかなこんだいね。

さあ、それから、このようすを田原署へ知らせにゃいかんいうわけで、いそいで奥郡をたった。いまのように電話で、もしもしというわけにはいかんし、自動車で、ブブーッというわけにもいかん。わらじがけで、てくてくあるくだがや。いくら巡査でもな。

ところが、若見あたりまできたとき、江崎巡査は、きゅうにくるしくなって、げえげえはいてしまった。のどはからからになるし、熱はたかくなる。頭はふらふらする。まああるけん。

ちょうどちかくにいた人力車にのせてもらって、加治まできたが、どうにもくるしくて、人力車にのっとることもできんようになってしまった。

「わしにもコレラがうつってしまったらしい。このまま田原の町へかえれば、大ぜいの人にうつってしまう。ここの山の中へおろしてくれ。」

そういって、車からはいずりおりると、松や雑木のしげっとる林の中にはいっていったと。そいで

書類だけ署へとどけてくれえって、いうんだと。

人力車の車夫は、どうしてええやらわからん。しんぱいじゃあるし、おそろしくもあるし、はやくいけとせかされて、しかたがない。きとった半てんを江崎巡査にかけてやると、

「まっとってくれまっしょう。じき、もどってくるで。」

と、田原署へすっとんだ。

話をきいて、役場のもんやら、けいさつのもんやら、医者やら、おくさんやらがかけつけたのは、もう夕方だった。みんなしてつれてかえらあとしたけど、江崎巡査は、

「わしは家へかえったとて、たすかるもんじゃあない。消毒さえいやがる町の人のとこへ、おそろしい病気をもちこんでどうすりゃ。ここにおるで、みんなかえっとくれまっしょう。」

てって、うごかなんだ。しかたなく、くさりかかったたきもの小屋に、ともかくはこびいれた。そばにのこったのは、おくさんのじゅうさん、ただひとり。どうしてものこってかんびょうせるてって、みなさんはおかえりくださいと、これも、きっぱりいったそうな。

みんな、とぼとぼ、ふたりをのこしてかえったが、むねがさかれるようなおもいだったと。

そのとき、じゅうさんはまんだ十九、江崎巡査が田原へくるちょっとまえに、よめいったばかりだったげえな。



あかりもない、まっくらな山ん中で、ブーン、ブーンと、カがたかってくる。たったひとりぼっちで、だんなさんの死んでいくのを目のまえに見とりながら、若いじゅうさんは、どんな気もちだったずらのう。

つぎの日、昼すぎに江崎巡査は、とうとういきをひきとったげえな。年は二十五だったと。

そのときにはもう、じゅうさんも、やっぱりコレラにかかっとった。それでも、夫のなきがらによりそい、いくらいわれても小屋からでようとはせん。

加治の衆は、にぎりめしやら水やらを、竹ざおのさきにつるして、小屋の中へさしいれてやったそうなけど、じゅうさんは白い顔をふって、なんもいらん、かえれ、かえれというようすをしたげえな。

つぎの日のぞいたときは、もうはや、うごかなんだ。夫が死んでから三日めのことだったと。

じゅうさんのそのすがたが目にのこってならんと、加治の衆はないたげえな。

このおかげで、田原の町では、コレラにかかったもんは、ひとりもなかったとよ。

ふたりの墓は、ふたりがいきをひきとったところにあったけど、いまは加治の衆の墓地になかまいりして、りっぱなお墓になっとる。いつでもだれかしらん、花をあげておくれると。

〈再話・山田もと〉

ここをぬけだす　つばさがほしや

〈現代民話・一宮市〉



一宮市光明寺にある墓地のかたすみに、〈織姫の碑〉という文字のきざまれた、大きな石碑がたっている。このあたりには〈織屋さん〉とよばれる織物工場がぎょうさんあって、〈織姫〉というんは、その工場ではたらいとった若い女工さんたちのことや。

そのころは、いまみたいに、子どもじゃからいうて、法律でまもられとったわけじゃあない。まずしい農家なんぞに生まれりゃあ、小学校をでるか、でんうちに、借金のかたに、工場にはたらきにだされたもんや。織姫さんについては、ずいぶんかなしい話が、いろいろのこっとる。

この〈織姫の碑〉にも、こんな話があるんじゃ。

明治三十三年の冬のことじゃった。

そのころの織物工場の二かいは、たいてい、女工さんたちのねるところになっとった。それも、たたみ二十じょうじきぐらいの、だだっぴろいへやの中に、五十人ちかくのふとんが、ぎっしりじゃ。

旧暦の正月まで、あと三日という日。もうすぐくる正月やすみをたのしみに、女工さんたちは、家へもってかえるおみやげを見せあって、おしゃべりしとった。

さむい冬の畑でしごとをする父親のために、毛のシャツを買った子、母親にネルのたびをもってかえる子、小さいおとうとやいもうとに、げたを買ってやった子など、どのみやげも、とぼしい小づかいをためて買った、つましいものばかりじゃった。

小学校をでるとすぐ、工場へはたらきにだされた若いむすめたちにとって、正月は、なによりのたのしみだったんや。

夜もふけ、おしゃべりもようやくしずまって、ふるさとの両親やきょうだいたちのことをおもいながら、女工さんたちがぐっすりねむりこんだ午前三時ごろ。

「おきろっ！」

するどいさけび声に、むすめたちは、びっくりして、目をさました。

まどに、ぼうっと、まっかな火の色がうつっている。戸のすきまから、黒いけむりが、もうもうとはいってくる。



「火事だあ、にげろっ！」
「はやく、はやく。」
あっちでもこっちでも、おそろしいさけび声がおこった。わあっとなきだすものもおる。くらやみの中で、家族へのおみやげをさがしまわるものもおる。
ふとんや荷物につまずきながら、みんな、バタバタと、まどにかけよったげな。
だが、まどには、ふとい鉄ごうしがはまっとって、そとへでることができん。かいだんからにげようと、戸口へはしっても、おもい木戸には、そとからじょうがおろしてあって、おしてもひいても、びくともうごかん。
まどからは、あついほのおがはいってきた。ふすまが、めらめらともえだし、むすめたちのかみ



の毛も、こげはじめた。
「あつい、あつい。たすけてえ。」
へやの中の五十人ちかくの女工さんたちは、ほのおにおわれ、けむりにむせながら、あっちへにげ、こっちへはしり、
「くるしい、あつい。」
「たすけてえ。」
「おかあさん。」
と、大声でさけびながらころげまわったが、にげられるところは、どこにもありゃせん。
やがて、人びとが火事に気がついてかけつけたときには、ほのおが工場をすっかりつつんどって、なんとも手のつけようがなかった。とうとう、工場ばかりか、となりの母屋まで、のこらずやけおちてしもうた。

この夜の火事で、二かいにねとった五十人たらずの女工さんのうち、なんと三十一人もの人がやけ死んだ。死体は、だれがだれかわからんほどやけただれ、戸口やまどぎわに、おりかさなっとったという。

二かいのゆかをやぶってとびおり、ようやくたすかった人たちも、ほとんどが骨をおったり、やけどしたりで、大けがをしとったげな。

「戸に、じょうさえおりとらなんだらなあ。」

「まどに、鉄ごうしさえ、はまっとらなんだらなあ。」

むすめたちの死をあわれんだ世間の人びとは、そういうて、工場主をせめたが、もう、あとのまつりじゃ。

鉄ごうしも、じょうも、むすめたちが、しごとのつらさと家こいしさから、にげださんようにつけられたもんなのや。わずかばかりの借金のため、むすめたちは、工場をやめることができんばかりか、いのちまでも、とられてしもうたわけや。

たすかったうちのひとりは、火事のおそろしさに気がくるうて、家へかえってからも、一日じゅう歌をうたいながら、家のまわりを、ぐるぐるまわっておったと。

その歌は、ふだんから織姫たちのあいだに、こっそりうたわれとった、かなしい歌やった。



ここをぬけだす　つばさがほしや
せめて　むこうの丘までも

こないだきたのに　はや　かえらにゃならん
とうさんたっしゃで　かあさまも

かえりましたと　だんなにつげりゃあ
機ごのかまちが　まっとると

うつろな目を空にむけて、そのむすめは、つぶやくようにうたうんじゃと。その声は、村人たちのなみだをさそったげな。

こんなおさないむすめまで、はたらきにださねばならんほど、明治のころの農村は、そりゃあまあ、まずしかったもんや。

火事のあとで、工場主は、どうにも町におられんようになり、どこかへいってしもうたげな。

「あつい、あつい。ここからだして。」

とさけぶ女工さんたちが、まい晩ゆめまくらに立って、くるしめられたからだともいう。

それからのち、いつたてられたのか、町の墓地のかたすみに、三十一の墓石があったが、それも年とともに、すっかりコケにおおわれ、草むらの中にかくれとった。そこで、昭和五十年の八月になって、あたらしい碑をたて、女工さんたちの霊を供養したのだという。

これが〈織姫の碑〉のいわれじゃ。

〈再話・野田文子〉

伊勢湾台風とくつ塚

〈現代民話・名古屋市〉



昭和三十四年九月二十六日。この日が、あんなおそろしい日になるとは、はじめは、だれもおもやせんだった。朝から台風警報はでとったものの、どうせ、たいしたことにはなるまいと、名古屋の町の人たちは、のんびりしたもんやった。

「朝のうちは、ちいっと雲がはやかったけど、ほれ見やあ、もう、うす日がてってるに。」

お昼ちかいころ空を見あげたみんなは、そんなことをいいあって、一どしめた雨戸を、またあける人さえおった。

ところが、午後五時か六時ごろになって、ふと気がつくと、空もようは、がらっとかわっとった。にわかに足をはやめた台風が、予想よりはるかにはやく、潮岬に上陸したんだわ。愛知県いったいは、まもなく、すさまじい雨と風につつまれた。夜にはいると、風雨はいっそうつよまり、名古屋

市の大通りでは、かんばんやネオンサインが風でふっとび、自動車までがひっくりかえされた。
そのころ、気象台は、なんとも、おそろしい予報をだしとった。
台風のいちばんつよいときが、ちょうど満ち潮の時間にぶつかるというんや。そのため、十メートルも二十メートルもある高潮がおしよせ、とても、海岸ていぼうではささえきれんじゃろうという予報やった。
放送局は、その予報を、ひっしになってくりかえした。ていぼうがきれて大洪水になるまえに、はやく高台へにげるよう、なんどもよびかけていたんや。
しかし、その放送は、人びとの耳にはとどかなんだ。名古屋の町に電気をおくる送電線が、強風にひきちぎられ、テレビもラジオもきこえなくなっとったからだ。
ひにくなことに、こんどの予報は、まちがいなしにあたった。
午前零時、あれくるう波は、あっというまに、ていぼうをけやぶり、まっ黒い水は、どっと、海ぞいの町まちにおそいかかった。工場や家がぎっしりとたっていた名古屋港や市の南部は、土地がひくかったため、いっしゅんのうちに海水につつまれてしもうた。
電気もつかない、まっくらやみの中で、にげるまもなく、大ぜいの人たちが波にさらわれた。名古屋市南区の北頭市営住宅では、八十戸のうち七十人もの人が、こうして死んでしもうた。

このときの高潮によって、伊勢湾にそった町や村は、のきなみ被害をうけ、五千人いじょうもの人が死んだり、ゆくえ不明になったりしたという。ほんとうに、わるいゆめを見とるような一夜やった。

台風がすぎて、ひと月ちかくたって、ようやく、町じゅうをひたした黒い水がひきはじめた。ちょうどそのころのこと。

七十人もの人がなくなった北頭の停留所ちかくの田んぼのそばをとおりかかった人びとは、ふと足をとめた。

「おや、どうしてここに、こないにぎょうさん、くつがあつまっとるんやろう。」

「それも、子どものくつばかりだに。」

そこには、ひきはじめた水にながれよせられて、たくさんのくつがあつまっとった。ふしぎなことに、そのおおかたが、赤やみどりの、小さな子どものくつばかりやった。

「そういやあ、ここは、台風のまえには、子どもらのあそび場やったなあ。」

「国道へでるとあぶないといわれて、子どもら、いつも、ここのあぜ道であそんどったに。」

「そうか、このくつは、台風で死んだ子どもたちのくつなんや。子どもたちは、またここで、みんなといっしょにあそびとうて、あつまってきたんや。」

■お話をうかがった方がた（五十音順・敬称は省略させていただきました）

伊藤長子（渥美郡田原町）
岡田忠雄（知多郡日間賀島）
菅沼武夫（南設楽郡一ノ宮町）
小島太郎（一宮市文化財委員長）
林三郎（前日間賀島小学校教諭）
福沢たきえ（渥美郡田原町）
峯田通俊（南設楽郡作手村）
岩崎まつえ（安城市）
加藤助一（岐阜県羽島郡笠松町）
小裏きり（安城市）
津島老人クラブの方がた（津島市）
原田保（宝飯郡小坂井町）
水谷鋼（故人・前中日新聞記者）

■参考にさせていただいた本（発行年順）

「愛知県伝説集」　愛知県教育会編　昭和12年　郷土研究社発行
「犬のきらいな神さま」　宅池のぼる著　昭和24年　篠島村篠島シリーズ刊行会発行
「名古屋の伝説」　尾崎久弥編著　昭和32年　名古屋市教育委員会発行
「碧南市史」　碧南市市史編纂会編　昭和33年　碧南市発行
「愛知県伝説集」　福田祥男編著　昭和36年　泰文堂発行
「愛知の史跡と文化財」　愛知県文化財振興会編　昭和37年　泰文堂発行
「東栄町の民話」　東栄町文化財保護委員会編　昭和37年　東栄町発行
「鳳来むかしばなし」　鈴木隆一編　昭和39年　鳳来町教育委員会発行
「あいちの民話」　名古屋タイムズ社会部編　昭和41年　黎明書房発行
「江崎邦助巡査夫妻の事蹟」　江崎邦助巡査遺跡顕彰会編
「尾張国熱田大神宮縁起」　熱田神宮編　昭和42年　熱田神宮発行
「三河煙火史」　三河煙火史編纂委員会編　昭和44年　愛知県煙火組合発行
「東海の伝説」　堀田吉雄編著　昭和48年　第一法規出版発行
「愛知のむかし話」　尾崎久弥編著　昭和48年　愛知県郷土資料刊行会発行（再刊）
「愛知のむかし話（続）」　尾崎久弥編著　昭和49年　愛知県郷土資料刊行会発行（再刊）

「かわいそうになも。」

人びとは、なみだをおさえながら、そう、はなしあった。

ただよいよってきたくつを、だれかが、ひとところへひろいあつめ、いつのまにか、小さなくつの塚ができた。

この台風で子どもをなくした、なん人かの人たちが、そのかなしい気もちをベニヤ板にかいて、塚にたてた。

そして、この塚は、いつしか名古屋の人たちから、〈くつ塚〉とよばれるようになり、花や線香の火がたえんようになったという。

〈再話・しかたしん〉

解説・1

いま生きている民話

「ふるさとの民話」編集委員会

わたしたちが生まれ、そだったふるさとには、たくさんのお話がつたわっています。

「むかしむかし、あるところに」ではじまるのを、昔話といいます。

――むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがおったそうな。ある日のこと、おじいさんは山へしばかりに、おばあさんは川へせんたくに……。

知っているでしょう。『桃太郎』のはじまりです。『うり子姫』も、こんなふうにはじまります。こういうのが昔話です。

――なんとか山の、なんとか池には、むかし、おそろしい主がすんでいた。その主は大蛇だったと。

こんなふうに、いまでも場所や、ものがのこっているような話を、伝説といいます。

伝説は、池とか山とかだけではありません。道ばたに立っているお地蔵さまにも、町のまん中に立っている木などにもあります。

このほか、村むらで語られてきた話、これを世間話といいます。

なんとか村の、なにべえさんは、キツネにばかされてね、という話や、なんとか村の、なにすけさんは、たいへんな力持ちでね、などという話です。とんちのある人が、とんちで殿さまをやっつけたりする話もあります。

もっとも、昔話のようでもあり、伝説のようでもあり、世間話のようでもある、はっきりき



められない話もあります。なにしろ口から口へ、語りつたえられてきたものですから、いりまじってもしかたありませんし、それはそれでいいのです。

こうした、語りつたえられてきた話をまとめて、民話といいます。

こんどわたしたちは、日本中の民話を県ごとにわけ、『ふるさとの民話』全四十七巻をまとめることになりました。この本は、その中の一さつです。

わたしたちが『ふるさとの民話』を本にしたい、みなさんに読んでほしい、と思ったのには、いろいろなわけがあります。

みなさんは、旅行がすきでしょう。電車に乗ったり、バスに乗ったり、もしかすると飛行機に乗ったりして、遠い土地へいくことは、すばらしいことです。美しいけしきにであえるだけでなく、自分たちとはちがうくらしのありかたを知ることができます。それが心を豊かにし、ひろい目でものごとをかんがえる力になっていきます。

しかし、むかしむかしの世界へいきたいと思っても、バスもありません。電車もありません。そういうとき、お年よりにねだって、民話を語ってもらったり、本で読んでほしいのです。そこにくりひろげられる物語は、時間をこえて、あなたを遠いむかしの国へつれていってくれます。

そこには、いまは見られないひろびろとした野や山があります。

山には、やまんばがすんでいます。

川には、かっぱがすんでいます。

てんぐが空をとび、大蛇はうねうねと山の木や草をおしわけてすすみ、まっかなしたをぴら



ぴらさせます。
日が暮れればキツネ火がもえ、タヌキが人をばかします。
ふしぎな世界です。
むかしの人びとは、そういうふしぎな世界にすんでいました。しかし、ただ、ふしぎといってしまえば、それまでです。ありそうにもないこと、でありながら、そこにはあんがい、ほんとうのことが語られているのではないでしょうか。
いまよりももっとまずしく、米の飯など正月にしか口に入らないくらしの中で生きた人びとは、おそれる心をもっていました。山をおそれ、川をおそれ、水をおそれ、風をおそれました。
それが、やまんばやかっぱとなったのかもしれません。
しかし、むかしの人びとは、おそれてばかりはいません。力強く、たくましく、知恵やとんちをはたらかせながら生きぬいてきました。
民話には、そうした祖先の心が、いきいきと語られています。人びとのねがい、喜び、悲しみ、おかしさがあふれています。だからこそ、わたしたちは、民話をたいせつに思うし、あなたたちにも知ってほしいと思うのです。
ここまで読むとみなさんは、ああそうか、民話というのは、むかしの話なんだな、と思われるかもしれません。
それがそうではないのです。
「むかしむかし」ではじまるお話も、あたりまえのことですけれど、ついこのあいだの話だったのです。それが、だんだん語りつたえられているあいだに、むかしむかしの話になってきた



わけです。

むかし、戦いがあって、負けた武士たちが山をこえてにげだしました。自分の国へかえろうと思ったのです。ところが何日かにげつづけていったある夜のこと、ふと見ると目の前に海が見えるではありませんか。山へ山へとにげたはずなのに、ここはまだ敵の土地だったのです。もうだめだ、武士たちはもう、にげつづける力もなく、そこで切腹して死にました。

しかし、それは海ではなかったのです。白い花をつけた、いちめんのソバ畑だったのです。月の光で、それは海に見えたのでした。

村人たちは武士たちをあわれんで、それからその村では、ソバをつくるのをやめたという話です。

これは民話です。ほんとうにあった話が語りつたえられて、伝説化したのです。とするならば、みなさんの、おとうさん、おかあさん、おじいさん、おばあさんが体験した戦争の話も、やがて民話として語りつたえられなくてはなりません。そのことによって、戦争のさなかに生きた人びとの、ねがい、悲しみ、怒りが、のちの世につたえられていくのです。

こういう意味で、この本には遠いむかしの話ばかりでなく、少しむかしの話もいれました。

どうかこの本を読んだあと、自分たちの町や村、山などにつたわっている話をさがしてください。おじいさん、おばあさんに、むかしの話を聞かせて、とねだってください。そしていまに、あなたたちに子どもが生まれたら、こんどは、あなたたちがお話をしてあげてください。

そういうねがいをこめて、わたしたちはこの本をつくりました。

〈解説1・おわり〉

愛知県の民話地図

岐阜県
長野県
静岡県
三
河
茶臼山
佐久間ダム
御殿山
明神山
東栄
鳳来寺山
作手
本宮山
鳳来
豊
新城
一ノ宮
豊川
川
東海道新幹線
小坂井
蒲郡
豊橋
姫島
田原
遠州灘



せともの
まつりの
雨
→P.32



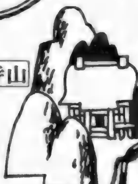
かっぱの
やけど
みまい
→P.138
犬千代さ
→P.85



→P.17
初連ギツネ



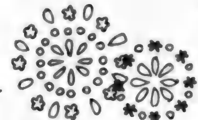
花まつりの
てんぐ
→P.70





鳳来寺の
三びきのおに
→P.96

水こい鳥
→P.79

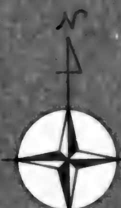


まぼろしの
金魚花火
→P.26
じょうるり姫
→P.12



→P.148
子だが橋





つと穂で
みのれ
→P.155



おうむ石
→P.90



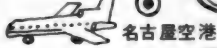
→P.182
コレラ
と
巡査



では陸をまいろう
→P.134
ここをぬけだすつばさがほしや
→P.188



水ぬすびと
→P.143
やろか水
→P.129



木曽川
犬山
江南
一宮
尾西
小牧
名古屋空港
稲沢
春日井
とぼけ村
→P.48
庄内川
小田井
のろりのろりの小田井人足
→P.55
尾張旭
瀬戸
揖斐川
長良川
名古屋
→P.21
ばかされたタヌキ
津島
尾張
猿投山
熱田
豊田
島田
北頭
大府
知立
東海
刈谷
矢作川
岡崎
→P.195
伊勢湾台風とくつ塚
知多
→P.169
まるかの人星
安城
三重県
伊勢湾
半田
西尾
碧南
常滑
へこきのへえ七
→P.124
佐久島
三河湾
日間賀島
犬をかわない島
→P.120
篠島
大山
伊良湖岬



→P.60
毛かえ地蔵



うめく金シャチ
→P.65



→P.39
ヤマトタケルとミヤズ姫



酒
→P.177
酒のみタヌキののたぼうず



→P.113
竜神の燈



→P.163
やっとべえとてんぐ



かしき長者
→P.107



愛知県
東京
大阪

解説・2

愛知県の民話について

しかた　しん

愛知県には、有名な渡し場がいくつもあります。万葉集の時代から知られた砥鹿の渡し（宝飯郡一ノ宮町）とか、江戸時代、東海道五十三次のひとつだった熱田の渡し（名古屋熱田区）など、かぞえあげると十本の指でもたりないくらいです。

このことは、むかしから、この地方が重要な交通路であったことをものがたっています。つまり、鎌倉、江戸（いまの東京）などの東国と、京都、大阪などの西国の中間にあって、東西の文化をむすぶ〈わたりろうか〉のような役わりをはたしてきたのが愛知県でした。

さらに、木曽川や揖斐川の河口にあたる愛知県は、その上流の木曽、飛騨の山国とも〈わたりろうか〉の関係にあったといえます。

このように東国、西国、山国という三つの地域の文化が入りまじり、とおりすぎてゆくところだったので、「これが愛知の特徴だ。」と、ひと口にいえるような独自の文化を見つけるのは、なかなか困難です。逆にいえば、それだけ多様性にとんだ地方なのです。

さて愛知県は、その地勢、風土から見て、大きく、三つの地方にわけることができます。

まず、名古屋を中心として、ひろびろとひろがる尾張平野——ここは、関西らしい都会的なふんいきをもった地方です。それから、岡崎、豊橋を中心とした三河地方——ここは東の国の武骨で野性的な気風が強いところです。さらに、木曽の山なみにつづく奥三河の山岳地帯——ここは山の国らしい、きびしい土地がらです。



東へ西へといききする旅人でにぎわう東海道鳴海の宿

かつて戦国の時代に、この尾張、三河から出て日本を統一した織田信長、豊臣秀吉、徳川家康という武将たちに共通して見られる、こまかい計算にたけた実利性をそなえた気質は、やはり〈わたりろうか〉の環境によってはぐくまれたものでしょう。そういうところが、いっぱんの愛知県人の性格にもなっているようです。

そのため、この県の民話も、尾張・三河平野、奥三河と、それぞれの地方の色あいのちがいはありながら、ぜんたいには、ふんわりとしたロマンチシズムより、人間くさい実利性のようなものが、おのずと反映されているようです。この本では、それらの民話を、愛知の特色がだせるよう、六つの舞台にわけてまとめてみました。

〈わたりろうか〉の国であっただけに、都へのぼる人、都からくだる人、商人、職人などの往来もはげしく、それらの旅人にまつわる話は、数多くのこされています。

『じょうるり姫』　義経にまつわる伝説は日本各地にのこっていますが、これは、岡崎市の誓願寺につたわる話です。この話は、十五世紀ごろは、すでに全国にひろがっていたといわれます。きっと、とおりすがりの旅の僧や芸人たちがつたえていったのでしょう。のちになって「浄瑠璃物語」という、ながい物語にまとめられ、三味線が発明されると、それを伴奏にしてかたられたことから、以後、そのような語り物のことを〈浄瑠璃〉と



岡崎市誓願寺にある
じょうるり姫の墓

よぶようになったといわれます。

『初連ギツネ』　キツネのあいてが大名というのも、いかにも街道すじの愛知ならではの話です。長篠の合戦（一五七五年。武田勝頼と織田信長の戦い）を見物していて、流れ玉で目をつぶした設楽の〈おとら〉とか、小牧の〈吉五郎〉など、愛知には名物ギツネがたくさんいました。初連もその中の一ぴきで、明治になってからもしばらく生きていて、ほかにもいろいろな話をのこしています。

『ばかされたタヌキ』　キツネとともに人をだますチャンピオンは、タヌキということになりますが、そのタヌキ話が多くのこっている津島地方で取材してまとめたものです。タヌキさえも、逆にだましてしまう愛知商人のたくましさを、よくあらわした話です。

『まぼろしの金魚花火』　明治以後、日本が急速に近代化をなしとげられた理由のひとつに、そのまえの時代の、職人といわれる人たちの技術の高さや、新しいものをつくりだそうとするエネルギーがあげられます。かれら職人たちは、もともとは全国を旅しながら技術を売ってあるいたものですが、それがしだいに同業者どうし、一か所に定住するようになります。研せんは、その生きのこりの流れ職人だったのではないでしょうか。岡崎は花火職人の町として知られていましたが、その名人花火職人へのあこがれをひめた民話だといえます。

『せとものまつりの雨』も、やはりおなじ系統の民話と考えられます。だいたい特産、名産と



瀬戸市でまい年ひらかれている〈せとものまつり〉

いわれるものについては、どこにでも、その由来を語る伝説があるものですが、この地方に陶磁器という新しい産業をつくりだした職人たちのエネルギーや生きかたを、民吉というひとりの人間に結晶させたのだと考えたほうがいいと思います。

『ヤマトタケルとミヤズ姫』　古代日本をいろどるロマンチックな英雄のひとり、ヤマトタケルにかんする伝説は、東海地方（愛知、静岡）のあちこちにのこっています。古代、この地方がヤマトの大王の勢力圏の東のはてだったことを思えば、漂泊の英雄の舞台として、いかにもふさわしいではありませんか。なお、東海道ただひとつの船路〈熱田の渡し〉が、すでにこの話にでているのにはおどろかされます。

愛知の県都、名古屋は、家康が尾張の主城をおき、城下町をきずいてから、いっきょにさかえた町です。その後、徳川ご三家の筆頭、尾張藩のご城下として、めざましい発展をとげました。そして、町の中央に金のシャチをいただいてそびえる五層の天守閣は、当時の支配階級、武士の権勢の象徴でもあったのです。そのかげには、圧政に苦しむ無数の民衆がありました。

『とぼけ村』『のろりのろりの小田井人足』の二つとも、そういう中での、かれら民衆のせいいっぱいの抵抗を示した伝説です。

『毛かえ地蔵』　武士たちは民衆の生活など眼中になく、おのれの栄達と支配欲のままに抗争をくりかえしていました。〈わたりろうか〉の国であ


熊坂長範が馬の毛がえをしようとしている絵額

ったがために、やすらかにやすむ日もなかった農民たちの、いらだちとねがいの中から生まれた話だといえます。ところで、この話にでてくる熊坂長範は、ほかの地方では、ざんぎゃくな大どろぼうとしてつたえられていますが、この東海地方では義賊として評判が高いのです。権力に反抗する長範に、じぶんたちの思いをかさねあわせて拍手をおくっていたのでしょう。

この三編に共通するのはいずれも、表むきは従順をよそおいながら、その裏では、したたかに、たくましく生きていた民衆のすがたです。

『うめく金シャチ』 太平洋戦争のとき、名古屋市いったいは、アメリカ軍の爆撃によって、てってい的に焼きはらわれてしまいました。この話は、防空ごうの中や工場のかたすみで、ひそひそと語りつたえられた現代民話の一つです。特高警察や憲兵の目をぬすんで、空襲の被害や悲しみを克明にあつめられた、当時の中日新聞の記者、水谷鋼氏(故人)よりうかがった話の中からまとめました。

舞台をうつして、奥三河の山国へいってみましょう。谷ぞいにつくられた、ネコのひたいほどの水田、きゅうな山の斜面にへばりついた、せまい畑。それだけでもう、山のくらしがどんなにきびしいかがわかります。そこでは自然の力のまえに、人間がいかにも小さく思われたことでしょう。自然をおそれる思いが、てんぐ、大蛇、鬼などの話を生みます。

『花まつりのてんぐ』 花まつりは、奥三河から、それに隣接する木曽の山国いったいにひろ



設楽郡東栄町の花まつり

がる、この地方独特のまつりです。テーホへ、テホへというかけ声とともに夜あけまでおどりあかす花まつりの熱狂を見ていると、せめて年に一度は、きびしい生活をわすれておどりくるおうという人びとの気持ちが、ひしひしとつたわってきます。しかしいっぽう、まずしい山国で、まつりのほかの日に、だらだらあそぶことは、たちまち不作やききんにつながります。長野県新野の盆おどりなど、多くの地方で、まつりのとき以外におどると、たたりがあるとしているのは、山の民たちの自らをいましめる知恵でしょう。

「水こい鳥」　山の国では、馬はなによりたいせつな労働力でした。おそらく、どこかの家の口べらしのためにひきとられてきたにちがいない下女の命より、馬のほうが、ずっとだいじに思われていたのです。この世に心をのこして死んだものが鳥になる〈小鳥前生譚〉は『ホトトギスと兄弟』、「よしとく鳥」など、ひろく日本各地にありますが、これはその一つです。

「犬千代さ」　豪快で痛快な人物像をえがいた、山の国ならではの話です。山野をかけまわり、鉄砲のひきがねひとつに命をかける猟師たちにとって、この犬千代さは自分たちのヒーローだったのにちがいありません。

「おうむ石」　「娘たちは川とともにながれる。」ということばがあります。山国の娘たちは、すこしでも平地にちかい村や町に嫁入りしたがるという意味です。そう考えると、この話も、町のくらしにあこがれた山国の娘たちの悲話と見ることができます。ヘビが人間のすがたになって嫁入りするという、昔話の〈蛇女房譚〉が、この伝説の基礎になっていま

す。

『鳳来寺の三びきのおに』　ブッポーソーとなく鳥がいることで有名な鳳来寺山には、むかしから古義真言宗の寺として、朝廷や貴族たちのあつい信仰をうけてきた鳳来寺があります。この伝説は、この宗派の霊験のあらたかさを示す話だと理解することもできますが、この鬼たちを、素朴で力強く、たくましい山の民のすがたとして見ると、またべつなあわれさと感動があります。

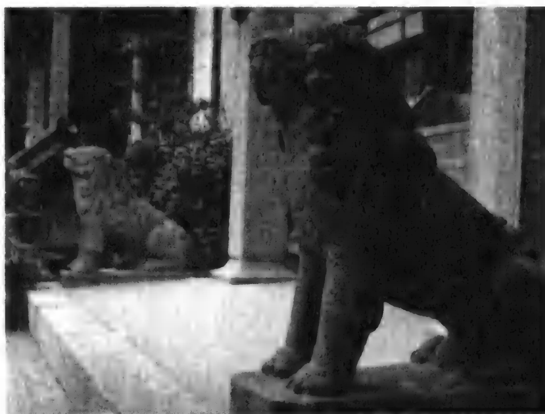
さて、つぎは海の話です。おなじ三河でも、山また山の奥三河から、伊勢湾、三河湾にそった地方におりてくると、風景もくらしも、すっかりかわります。



奥三河の象徴ともいわれる鳳来寺

『かしき長者』　これに似た話は鹿児島県の種子島に一つあるだけで、ひじょうにめずらしい伝説です。いつもえさをもらっていたさかなたちが恩返しをするという〈動物報恩譚〉の一つですが、いかにも海ではたらく男たちの夢のある話です。かしきは少年のこともあれば老人のこともありますが、船の上では、やはり特異な存在で、ふしぎな力や、未来を予言する能力があると信じられていたようです。

『竜神の燈』　ふだんは波静かな海も、いったんあれると板子一まい下は地獄となる、そういう一寸さきの運命もわからない生活の中で、漁師たちが神仏や、水の神である竜神さまを信仰するのは、とうぜんといえます。この地方に多い信仰善行の伝説の中から、一つえらんでみま



犬ぎらいの神さまが
ほうりだしたという
医徳院のこま犬

した。

『犬をかわない島』も、そういう信仰の話の一つですが、漁村では、その地方ごとに、さまざまなタブー（してはならないこと）や、まじないをもっています。たとえば船には女をのせてはいけないとか、「さる」ということばはつかうなとかいうように。この伝説も、そのタブーを人びとにおしえるための話と見ることもできます。しかし島の人たちは、「犬をかわなくても、だあれもどろぼうなどにはいらん、のんきな島だで、こんな話ができただらぁよ。」といってわらっていました。

『へこきのへえ七』　これはまた、東海のあかるい海べのように、なんとも陽気なばか話です。ところで、わらい話にはたいてい、あいきょうのある主人公がいて、熊本の彦一、大分の吉四六、石川の三右衛門など、いずれも数字のついた名まえで親しまれていますが、このへえ七も、そのなかまでしょう。しかし、へえ七話はこれ一つきりで、ふしぎと愛知の民話には、特定の名まえでよばれる名物男はでてきません。実利的でものがたいこの地方の人びとは、こういうとぼけた主人公を、もうひとつ、身を入れて愛することができなかったようです。

　尾張、三河の国はまた、川の国でもあります。背後にせおった木曽、飛騨の山やまからの水が、いく本もの大きな川となってながれくだってきます。ことに木曽川は、尾張の農民たちとは、きってもきれない関係があります。



『やろか水』　川に洪水はつきものです。そのため、この地方の人びとは何百年にもわたって治水工事をくりかえしました。でも自然の力は、そんな努力をあざわらうかのように、ときに村むらにおそいかかります。そのおそれが、このようなぶきみな伝説を生んだのでしょう。「よこさばよこせ。」といったがために大水がおしよせるわけですが、これは古来、ことばには精霊がやどっており、口にすると、ものごとがそのとおりになるという言霊信仰が、その背景にあるからです。

『では陸をまいろう』　川はまた、たいせつな交通路でもありました。その水路をおさえる船番所の役人の風むきしだいで、商人や村人たちのくらしは大きな影響をうけました。陸の関所が、かずかずの悲話を生んだように、船番所にまつわる話も少なくありません。これは、そういうコチコチ頭の番所役人の意表をついた痛快な伝説です。

『かっぱのやけどみまい』　民話の中には、その時代の民衆が生きていくための、さまざまな知恵や教訓がもりこまれていますが、この伝説にも、川すじに生きる人びとが、どんなに川をたいせつにしなければならないかという生活の心得が、水の神といわれるかっぱの口をかりてつたえられています。

ひろびろとひろがる尾張平野は、木曽川を中心に揖斐・長良の三つの川で豊かにうるおっているように見えます。しかし「百姓と油は、しぼれ

尾張平野をゆうゆうと流れる木曽川

ばしぼるほどとれる。」と考える為政者のもとでは、民衆の苦しさは、この地方といえども例外ではありませんでした。

『子だが橋』　この橋にまつわる伝説も、雨や風のぐあいで、たちまちききんにつながる、そのころの農村から生まれた悲話です。川の神への人身御供の話は多いのですが、風の神への話はめずらしいと思います。春さきから五月にかけて、おそろしいばかりにふきまくる木曽おろしの風が神のイメージになったのでしょうか。

『つと穂でみのれ』　「初連ギツネ」が陽気なキツネ話であるのにたいして、それとはちがう系統の〈狐女房譚〉とよばれる昔話の形式をふんだ話です。人形浄瑠璃や歌舞伎の「葛の葉」で知られるように、ひろく全国にある話ですが、ここでは地名とむすびついた伝説になっています。昔話には、このようなキツネ、オオカミ、ヘビなどが人間のところへ嫁にくる話はたくさんあって、〈異類婚姻譚〉と分類されていますが、いずれも、土着の人びとから見てよそものだった人を、動物にたとえているのだという説があります。そう考えると、この話も、嫁にきたよそものが、村人に差別され、警戒され、ついに村のくらしにくわえてもらえなかった悲しみを、キツネに仮託してつたえているのかもしれません。古来、よそもののゆききが多かったこの地方には、よそものを神または、それにちかいものとして、たいせつにし、あたたかくもてなす話があるかと思うと、いっぽうには、こういう排他的な話ものこっています。人間の心の複雑さをかいま見る思いがします。

『やっとぺえとてんぐ』　おなじ愛知県でも、奥三河の山の国のてんぐたちは、それらしい魔性や力をもち、てんぐの貫禄じゅうぶんといった感じがしますが、明るくひらけた西三河のこ



まるかの伝説を
つたえる保福寺

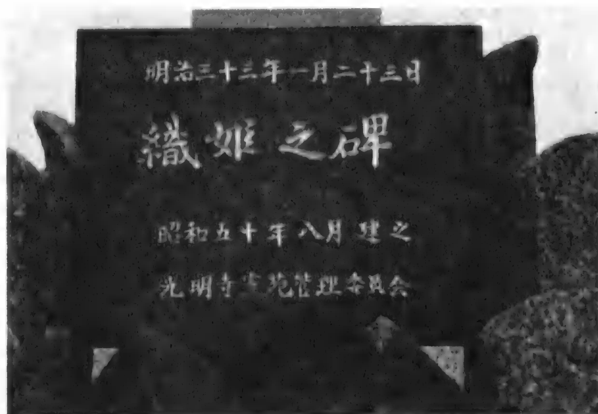
のあたりになると、なんとなく威厳がなくなり人間くさくなってきます。それで、くやしくなってやっとべえにしかえしをするのです。

『まるかの人星』　三河地方は、むかしから信仰のあついところでした。そして、お寺へ小僧さんにやられる子どもが多かったようです。しかしそれは、信仰のためよりも、くらしがまずしくて食べていけず、口べらしのためが大部分でした。お寺の小僧さんにまつわる、暗い悲しい話は、この地方に多いのですが、これも、その一つです。

さて、明治になって日本の近代化がはげしくすすむ中で、〈わたりろうか〉のこの地方は、早くから、その大きな変化の波をまともにうけることになります。

『酒のみダヌキの　のたぼうず』　津島とおなじく半田地方でも、タヌキは気やすく、そのあたりにでてきたようです。しかし時代がかわると、人なつっこく警戒心のないタヌキたちは、あっというまにけちらかされてしまったのでしょう。タヌキをいとおしむ人びとの気持ちが、ふんわりとただよってくる話です。

『コレラと巡査』　江戸時代三百年の鎖国のおかげで、世界的な流行病には見まわれないでいた日本人にとって、明治十七年から二十年にかけてのコレラの大流行は、各地に恐怖の津波をひきおこしました。そのときに生まれた悲惨な現代民話です。



一宮市にある織姫の碑

「ここをぬけだす つばさがほしや」 西洋においつき、おいこせを旗じるしに明治新政府は、ごういんに富国強兵策をおしすすめました。そして交通の便がよく、労働力のゆたかな中京地区に紡績工場が林立することになります。それを底辺でささえていたのが、織姫さんたちでした。労働基準法などなかった時代のこと、朝から深夜まで立ちどおしではたらく織姫さんたちの血と涙の中から生まれた女工哀話は、たくさんのこっています。

「伊勢湾台風と くつ塚」 伊勢湾台風は、名古屋大空襲とともに、名古屋人の心の歴史の中に深くきざまれた恐怖の傷あとです。しかし、その中で生まれたかずかずの感動的な話や悲話などが、あっというまにきえさっていくのは、とてもざんねんなことです。このくつ塚も、現在は南区元塩町にうつされ、コンクリートの碑になっていますが、この話を取材にいったところ、碑の由来をだれも知らないという状態でした。

さて、この再話は中部児童文学会の十人の手ですすめてまいりましたが、その間、いろんな方から御協力をいただきました。とくに、原話を御提供くださった話者の方がた、著書を参考にさせていただいた方がたについては、巻末に名をあげて、深甚な感謝の意を表します。

〈解説2・おわり〉

■お話をうかがった方がた（五十音順・敬称は省略させていただきました）

伊藤長子（渥美郡田原町）
岡田忠雄（知多郡日間賀島）
菅沼武夫（南設楽郡一ノ宮町）
小島太郎（一宮市文化財委員長）
林三郎（前日間賀島小学校教諭）
福沢たきえ（渥美郡田原町）
峯田通俊（南設楽郡作手村）
岩崎まつえ（安城市）
加藤助一（岐阜県羽島郡笠松町）
小裏きり（安城市）
津島老人クラブの方がた（津島市）
原田保（宝飯郡小坂井町）
水谷鋼（故人・前中日新聞記者）

■参考にさせていただいた本（発行年順）

「愛知県伝説集」愛知県教育会編　昭和12年　郷土研究社発行
「犬のきらいな神さま」宅池のぼる著　昭和24年　篠島村篠島シリーズ刊行会発行
「名古屋の伝説」尾崎久弥編著　昭和32年　名古屋市教育委員会発行
「碧南市史」碧南市市史編纂会編　昭和33年　碧南市発行
「愛知県伝説集」福田祥男編著　昭和36年　泰文堂発行
「愛知の史跡と文化財」愛知県文化財振興会編　昭和37年　泰文堂発行
「東栄町の民話」東栄町文化財保護委員会編　昭和37年　東栄町発行
「鳳来むかしばなし」鈴木隆一編　昭和39年　鳳来町教育委員会発行
「あいちの民話」名古屋タイムズ社会部編　昭和41年　黎明書房発行
「江崎邦助巡査夫妻の事蹟」江崎邦助巡査遺跡顕彰会編
「尾張国熱田大神宮縁起」熱田神宮編　昭和42年　熱田神宮発行
「三河煙火史」三河煙火史編纂委員会編　昭和44年　愛知県煙火組合発行
「東海の伝説」堀田吉雄編著　昭和48年　第一法規出版発行
「愛知のむかし話」尾崎久弥編著　昭和48年　愛知県郷土資料刊行会発行（再刊）
「愛知のむかし話（続）」尾崎久弥編著　昭和49年　愛知県郷土資料刊行会発行（再刊）

■愛知県の民話をもっと知りたい方のために

「なごやの民話」　ふるさとを訪ね民話を読む会編・発行　昭和50年

「愛知の伝説」　武田静澄・福田祥男著　昭和51年　角川書店発行

■執筆者（五十音順・○印は責任者）

赤座憲久　「日本児童文学者協会」「中部児童文学会」会員。岐阜市在住。

阿久根治子　「中部児童文学会」会員。名古屋市在住

北村けんじ　「日本児童文学者協会」「中部児童文学会」会員。三重県桑名郡在住。七取小学校教諭。

熊沢あきら　「日本児童文学者協会」「中部児童文学会」会員。津島市在住。

○しかたしん　「日本児童文学者協会」会員。「中部児童文学会」会長。名古屋市在住。

寺沢正美　「中部児童文学会」会員。安城市在住。安城西部小学校教諭。

寺沢美智恵　「中部児童文学会」会員。安城市在住。

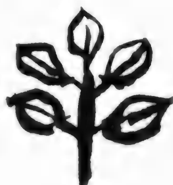
野田文子　「中部児童文学会」会員。一宮市在住。

松原喜久子　「中部児童文学会」会員。尾張旭市在住。

山田もと　「中部児童文学会」会員。渥美郡田原町在住。

山本知都子　「中部児童文学会」会員。豊川市在住。

338　日本児童文学者協会
花まつりのてんぐ
偕成社　ふるさとの民話 1
219p.　22cm　1978



（ふるさとの民話１）
花まつりのてんぐ
一九七八年七月　初版第一刷発行
編　者　日本児童文学者協会
発行者　今村廣
発行所　株式会社 偕成社
東京都新宿区市ヶ谷砂土原町三―五
電話／〇三(二六〇)三二二一
振替／東京五―一三五二
印　刷　新興印刷製本株式会社
製　本　文勇堂製本工業株式会社

8339-522010-0904

わたしが子どもだったころ 全8巻

日本児童文学者協会 編



おとなも昔は子どもだった。時代はかわっても「子ども時代」という共有の世界での対話をめざして全国のおとなが少年少女期の体験を綴った短編集。

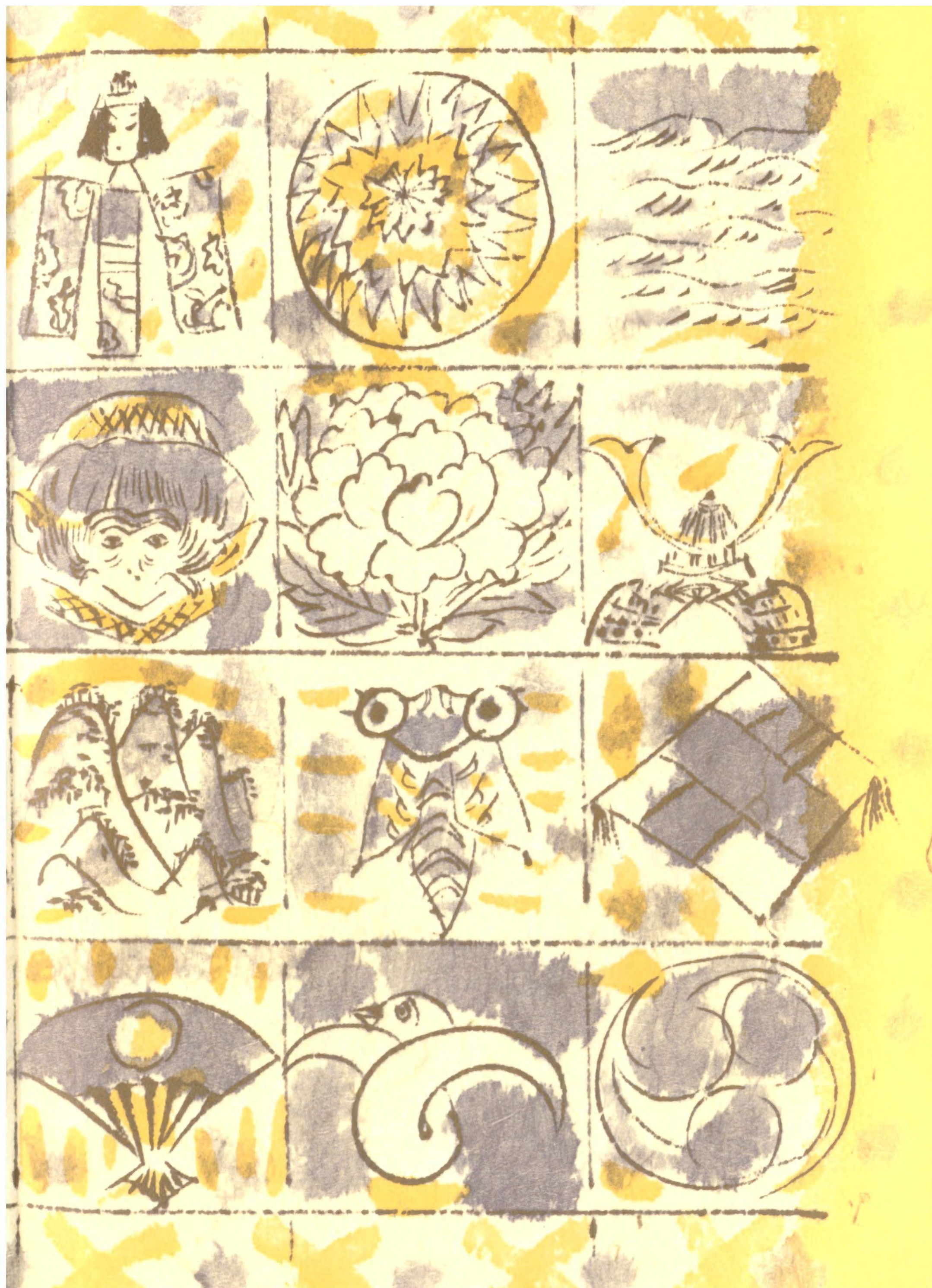
小学中級向　菊判　4色口絵　さし絵豊富　本文12ポ　平均204ページ

編集委員 北川幸比古・木暮正夫・長崎源之助・宮川ひろ

1	おかあさんものがたり	やさしかった母、強かった母、さまざまな母の姿を、かぎりない愛情と尊敬をこめて今語る。
2	おとうさんものがたり	幼い日に映った父の姿を、あたたかい共感をよせて、また痛烈な批判をこめて今ふりかえる。
3	小さな心のひみつ	だれにもいえず小さな胸をいためた子どもの頃の心の悩みや、ひそかな喜びを今うちあける。
4	すきだったあの子	幼い心に芽ばえたほのかな初恋の思い出を、なつかしさとほろにがさをこめて今うちあける。
5	すきな先生きらいな先生	人生のスタートで出会った先生たちから学んだもの、感じたこと、受けた影響などをつづる。
6	わすれられない友だち	今も心に残る友だち、影響を受けた仲間との思い出を描いて、真の友情とは何かを考える。
7	かわいがっていた動物	心をふれあった動物の思い出を通して、思いやりの心と生命の尊さ、厳しさを知ったことを語る。
8	かわった子おかしな子	ユニークな個性をもった子どもたちを描いて、テストや成績で計れない人間の価値を考える。

●書評

「おかあさんものがたり」……カボチャどろぼうとののしられながら、子どものためにじっとこらえていたお母さん。せなかじゅう汗もだらけになり赤ちゃんを生むその日まで田の草とりをしていたお母さん。どの物語にも作者の、お母さんを思い、なつかしむ心と、そのお母さんたちのやさしく、暖かい心があふれています。**〈毎日小学生新聞評〉**



《編集の5大特色》

1このシリーズは昔話から伝説、世間話まで日本各地で口づてに伝えられてきた、いわゆる「民話」の集大成です。

2それぞれの土地で育くまれてきた民話を、なるべく土の香りを残したままお届けするために県別に編集しました。

3筆者はいずれも県ゆかりの方で、生まれ育った郷土の民話を愛情こめて再話しています。

4各県の代表的な話はもちろん、筆者が歩いて採集した未紹介の話、さらには明治以降に生まれ定着しつつある現代民話もくわえられ全巻を通して見れば日本の基本的な民話はすべて網羅されるよう配慮してあります。

5日本児童文学者協会が創立30年を期して全国会員の総力を結集した記念出版です。



ふるさとの民話 1　愛知県

偕成社

